393
Ta16

①

0056550000

0056550-000

３９３－Ｔａ１６ウ

“撃滅”の哲学

多田憲一・著

東文館

昭和１８

AJD

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

393
Ta16

多田憲一著

„撃滅"の哲學

近代戰の本質的考察

東京 東文館 發行

969
31

「愛國の情は美しく同胞を見るはいとほし」といふ
羅馬詩人オヴィドの言葉は遂に眞理であつた
著者は學徒的純情の全幅を吐露し
拂へどもつきぬ涙をおさへ
ソロモンの海境はるかなるところ
珊瑚の礁に愛國の塒を覓めて逝きし、
幾多謙讓なる英靈のために
泣いてこの書をさゝぐ

自序

米英のイデオロギーは、これを芟除すべしである。しかるにその前に、斷乎として淸算せねばならないものがある。それは舊觀念に外ならない。

舊觀念は「速度」の理念を缺如し、古めかしい「時間」「空間」意識を墨守して止まず、主觀限りに、若しくは民族限りに固定した觀念型態と、昔ながらの戰爭樣式とを思辨して足れりとする。かうした舊觀念の妄者に限り、物理的力量と精神的力量とは、相互に代位すべからざる異質性に屬するものであることをさへも認識せず、物理的力量の缺陷を精神的力量を以つて補塡しようと足掻き、こゝに死屍丘の幾つかを殘して、潮の如く退くのを常とする。

のろはしき舊觀念にこそ、痛ましき犧牲と、そして無慈悲な敗戰の酵母とが罩め宿されてゐるのである。

「速度」の理念は、古めかしい「時間」「空間」の意識を解消し、これを「瞬間」に止揚した。脅威は瞬間に殺到し、戰勝と戰敗の岐路は瞬間に決定する。

假に彼我の間に速度二ノツトの開きがあつたとせよ。わづか二ノツトの數字上の相異は、忽ち質容上の相異となつて展開し、戰爭樣式をして革命的に轉形せしめねば止まないのである。

われ等は否でも應でも「時代の條件」――即ち「速度」に支配せられねばならぬ。「客觀的範疇」即ちこれである。

舊觀念は、徒に主觀本位の觀念型態を愛襲して「時代の條件」には背をむけ、獨りよがりの神話と神學に陶醉し、空疎な優越感を滿喫することにおいて、すでに米英の亞流に墮してゐることに氣がつかない。そして「客觀的範疇」の假借なき壓力に觸接し、忽ち自己崩壞の現象を露呈するに至るや、「こんな筈ではなかつたが……」と周章狼狽するのを常とする。

わたくしの哲學は、この舊觀念の擊滅を目的とするものである。米英は飽くまでも排除せねばならない。しかり、舊觀念は斷乎として擊滅しなければならないのである！

Delenda est Carthago！

皇紀二六〇三年晩春

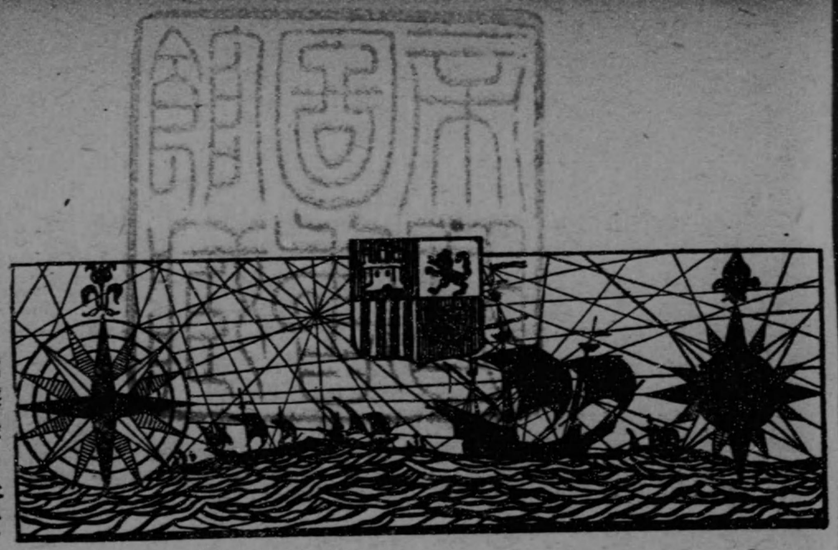
多田憲一

目次

自　序……（一）
電擊戰の本質……（一）
戰爭現象の哲學的考察……（二四）
戰爭と事變……（四六）
戰爭と文化……（六二）
戰爭と民族……（九一）
戰爭と社會……（一〇三）
戰爭と技術……（一四一）
戰爭と悲劇……（一八四）
思想宣傳戰の哲學……（二二一）

目　次

〔附　錄〕
制海權の問題……（二三六）
制空權の問題……（二四二）
落下傘降下部隊戰技の形而上學的基礎……（二六五）



電撃戰の本質

電撃戰の本質

Si vis pacem, para bellum.

平和を希求するならば戰爭の準備をせよ

獨逸國のフォン・ビューロウ少佐が、或る專門雜誌上に一論稿を發表し、「世界の出來事は、いまや太平洋問題において、その焦點が橫はつてゐる。歐羅巴では、ほんの小係爭に對してさへ一致の解決點が見出されずにゐる時に、極東では相剋が、廣汎なる範圍において擴大しつゝあるのを目擊する。今日、地球の他の半面は『嵐』によつて象徵せられてゐるのである。嵐は夜通し吹き荒さび、曉となれば全く新しい動向となつて示現せられ、人間歷史を、こゝに更改せしめるのである」[1]といふたのは、既に一九三四年〔昭和九年〕の

ことであつた。爾來時日を經過すること六箇年、この情勢は聊かも改善を見るどころか、事態はます〳〵激化の道向をのみ馳驀し、西洋・東洋ともに、夜通し吹き荒む嵐によつて象徴せられるの端目に立ち到つたのである。

されど曉になれば、全く新しき道向となつて展開し、こゝに、人間歴史を更改せしめる一宿命が孕み出されるのである。——即ち西洋・東洋相對峙して「現狀」〔statu quo〕の根を堀りかへし、こゝに燦爛たる〔新秩序〕が誕生するに至るのである。

これは、しかしながら政治的—經濟的の問題であつて、いまこゝに、吾等の凝視しようとする「方法論上」の課題ではない。政治・經濟上の社會的・歴史的伸展を條件づけ、さしも搖がざりし「現狀」をして倒潰の悲劇に急進せしめるものは、實に戰爭技術の革命的更改に依存するものが頗る多いのである〔!〕。戰爭技術の伸展は、少くとも現狀を是認せざる民族の嚴肅な課題であり、またあへて國民的尊嚴といふやうな形而上學的理由よりも、むしろ現實の「生存權」を確保しようがための切迫的必要に起因するものであつた。

「生存權」を確保しようとする切迫的必要よりして、戰爭技術の伸展を考慮するの餘義なきに至らしめられる壓力は、實に絶對的のものといふてよい。獨逸・伊太利等の樞軸諸國民が、その「生存權」に由々しき危殆を感じ、その確保を考慮する時、そのアイデアは、すでに戰爭技術と交錯して意識に浮んでゐたのである〔!〕。戰爭技術は、これ等の國民にとつて正に「生存技術」であつた。——民族的第一原理であつた。それ故に、これ等の國民を「好戰的」〔militant〕なものとして彈呵する舊秩序諸國即ち米英側の解釋は當らない。戰爭技術は、樞軸側諸國民にとつて飽くまでもその生存權を維持しようとする防衛的〔廣義〕のものにしか過ぎなかつたのである。

その生存に何等の不安を感ぜず、たゞ舊秩序の維持に汲々たる米英及び敗戰前の佛蘭西にあつて、戰爭技術の伸展は、必ずしも國民生活の第一原理であり得なかつたのである。たゞ民族的尊嚴といふ形而上學的滿足を喫し、局地的防衛と、すゝんで未開國若しくは半開國を對象とする植民地獲得の進攻的野望を充足する以外に、現狀を容認せざる國民におけるがほど、必要の切迫的なものを感受し得ないのも必至の數といふべきか。したがつてこれ等第一群の國々〔米英及び敗戰前の佛〕にありては、曩にいへる一群の國々——即ち獨伊等の樞軸側諸國におけるがほど、戰爭技術の伸展に焦燥な韻律とてはなく、國民的鬪志において脆弱なものがあり、厭戰的志向の顯

著なものさへ認められるのも亦當然の歸趨と見るべきである。

以上の理由で、米英及び敗戰前の佛蘭西の戰術は、決して「電撃的」なり得ず、正しくもそれと對蹠する「懶撃的」戰術であり、それは危殆に瀕する自己の生存權を防衛するための、切迫的必要の産物である「電撃戰」であり得なかつたことが分明するであらう。

(1) >Das Luftproblem im Pazifischen Raum. < Von Major a. D. Frhr. V. Bülow. Deutsche Luftwaffe Bd. L. Nr. 2.

「電撃的」戰術といふ言葉は、今次の歐洲大戰勞頭において、獨逸軍が敢行したノルウエイ攻略の方式を表現したものであるけれども、すでに獨逸の評論家は、曩に決行せられたイタリイのアビシニア攻略を「電撃戰」〔Britzkrieg〕と呼んでゐるのである。それ以前に、「電撃的」といふ文字があつたか否かは明かにしないけれども、英國のハーバート・ラッセルは、空軍の機能について「青天霹靂的」戰術といふことを述べてゐる。卽ち、

「現代の陸海軍が、如何にそれの戰時編成を完備しようとも、青天霹靂的戰術に出づることは、とても爲し能はぬところであらう。しかるに空軍は、よくそれを爲し得るのである。空軍は、戰爭の開始せられた瞬間に急激な突撃を敢行し、直ちに敵の神經中樞を衝く。これを防禦する唯一の手段は敵の機先を制するにある。それだからして吾等の國防は、敵の空襲を食ひ止め得られるだけの空軍勢力を常備するとともに、間髪を容れず、攻勢に轉じられるやうな待機狀態において組成せられてあらねばならない。從來のいはゆる『動員』では敵に機先を制せられる。敵の機先を制しようがためには『跳員』でなければならない」[2]と——。

「電撃的」戰術とは、畢竟「跳員」による「青天霹靂」的戰術に外ならないのである。そして空軍の驅使こそは、その方法の隨一なるものであらねばならぬ。勿論これには落下傘及び降下部隊が使用する重輕機關銃・火砲、場合によりては輕戰車等の地上兵器を携行することが條件とせられようが、依然として翼が、「電撃的」戰術の主たる道具たることにおいて、何人も異存はあり得ないのである。航空前期に屬するすべての戰爭型態は、そのあらゆる意味において、解消の無慈悲な宿命に齎されるのである。そして地上・水上に固定するところの、或は浮遊するところの陸・

海軍兵力ないし要塞・兵站は、悉く假借なき爆撃の好對象として曝露せしめられるのである。すんで敵の軍事的施設のみかは、獨逸軍のロンドン爆撃において見るが如く、敵國國民の「心の憩ひ」場所である寺院の如きも爆撃の範圍に內包せしめられ、こゝに神經戰爭の一項目までもが加味せられるに至つたのである。

「電撃的」戰爭即ち「跳員による青天霹靂的戰術」は、不意の空襲であるからして、敵國をして、これを豫測せしめるやうな前觸に似た何物もあつてはならないのである。「爆撃飛行機は偉大な破壞力を有してゐる。——即ち宣戰布告を受けない國々は、宣戰布告を俟たずして不意の空襲を敢行し、敵の出鼻を挫いて、情勢を自國のために有利に展開せしめるであらう」[3]と、フェリックス・メリイは說いてゐる。——「不意の空襲」〔überraschende Luftangriff〕といふ言葉は、「電撃的」戰術の本質を、得て遺憾なく表現し來るものといふべしである。

今日の戰爭型態にして、「動員」のやうな微溫的手段によらず、跳員による青天霹靂的戰術をプロローグとして展開せられるならば、「不意の空襲」そのものこそ、事實における殺伐な宣戰の布告と看做すのほかはないのである。

こゝで「爆彈が、外交の役割を果すのである」〔!〕。

2) British Naval and Military Record, 25th, Feb 1925.
また日本とソヴイエート聯邦及び日本と米國とが航空戰を開始した場合を想定して、その立論を試みた佛國の海軍少佐ブラキシマイヤアにも、ドウエ理論を敷衍して、「航空は敵の戰鬪資材を組織的に破壞するのみか、非軍人間にも恐怖を流布して、『決定』を迅速に招來し得るのである。故に航空は優勢なものである。その行動をして決勝的たらしめんがためには、航空は、敵對行動を展開する劈頭——或は宣戰布告以前にありてさへも——電光石火的に攻撃を開始するであらう。そしてあらゆる破壞方法即ち爆彈・燒夷彈及び毒瓦斯等を使用する」といふ嚴しき說が見出されてゐる。〔Cf. 〈Considérations sur la guerre aérienne, 〉 par Capitain le Corvette Braxmeyer. La Revue Maritime, No 192. Decembre 1925.

3) 〈Die wirkliche Bedeutug eines überraschender Luftangriffs. 〈〔Aus〉 La France Militaire 〉vom Bd. 2 vom 19. 9. 34〕 Bd. 2, von Felix Marie, Luftwaffe, Nr. 2.

空軍を驅使して敢行せられる「電撃戰」の效果を、最も文學的な言葉を以つて表現せるものは

將軍アルマンゴウである。いはく「陸〔海——著者挿入〕軍の課題は、戰鬪行爲に入る際、新しい方法〔機動〕を以つて移動・集中を迅速ならしめるにあり、毫もこゝに『古典的』方法を選擇するの餘地がない。しかるに空襲は、吾等に對して『怪奇な攻撃』の恐怖を以つて、ます〳〵迫つて來る」[4]と。——げに「怪奇な攻撃」〔die brüsken Attacken〕は、敵人の腦裡に「印象ふかき恐怖」を惹起せしめるであらう。

航空機は、また「空間の武器」〔Waffe des Raum〕である。——そして「空間の武器」を道具として成就せしめられた「青天霹靂的戰術」即ち「電撃的」戰術の效果は「奥行の制覇」となつて具現する。そして「奥行の制覇は、直接に戰爭行爲を敵の背後へ、ないしは敵國の心臟へと持ち運ぶのである。それで航空機は、前線だけの戰爭を、國家擧げての戰爭に擴大せしめるであらう」[5]といへりしフォン・ビューロウの言葉が、さながらに想起せしめられるのである。

更に落下傘降下部隊が使用せられることにより、「電撃作戰」が、敵の心臟に加へる重壓が增加し、こゝに神經戰爭としての意義が强調せられるであらう。〔卽ち「第五列部隊」の活躍！〕。「奥行の制覇」に基づく前線・銃後の區別の解消は、かの法學者のいふ戰爭の「地域」〔region〕と「舞臺」〔theatre〕との差別解消を意味するのである〔オツペンハイム〕。戰爭は、今や戰鬪行爲が展開せられつゝある陸上の、若しくは海上の一局面に限定せられず、擴大して戰爭の「地域」のみかは、銃後の全部を震撼し、擧げてこれを戰爭の「舞臺」に歸一せしめるのである。

更に「奥行の制覇」は戰爭の「轉形」を招來し、T・A・テラクーチオのいふ通り、「帝國主義戰爭を內亂に轉形せしめ、またその逆に、內亂を帝國主義戰爭に轉形せしめる」[6]といふソヴィエート理論の顯現を招來する可能性さへもが存在するのである。——「電撃的」戰術の一網目である落下傘降下部隊が、はじめてソヴイエート聯邦に誕生したのも偶然でない理由が、こゝに分明するであらう。

「はじめに戰ひ取つた空中の優勢は、地上〔および海上〕の勝利を誘致し來る結果となる」ことは、眞實に近いものがある〔V・ビューロウ〕。それ故に「何等公式の宣戰布告を俟たないで、不意に全空軍を動員〔ハーバート・ラッセルのいふ「跳員」！〕して攻撃を開始する。そして對手國に深憂すべき打撃を加へ、國民生活のあらゆる觀點より、戰爭行爲の終局へ決定的に導入せしめる」であらう〔F・マリイ〕。

「神に捧げようがために泥棒をする」〔hurtar para dar por Dios〕とはスペインの諺である。近代戰の花形である「電撃的」戰術は、全くこれを出でないのである。たゞ機先を制し、以つて勝利を獲得すればそれでよい。故に航空戰に「汎愛」の倫理法則はなく、またF・メリイのいふ如く「フェアプレイの競技精神に基づき、敵を援けねばならぬ義務を有しない」[7]のである〔一〕。

4) 〉Geschichte der Luftwaffe. Bd. Nr. 9.
5) 〉Die Leitgedanken der Organisation des Luftheeres.〈 von General Armengaud. Revue Militaire Française, Nr. 158. vom Novemer. 1933. D. Lutwaffe. Bd. 1 Nr. 5.
6) The Soviet Union and International Law. by T. A. Teracouzio. 1936. p. 313. p. 318.
7) Op. cit. von Felix Marie.

「電撃戰」は、なべての限界の解消者である。それは曩に、「奥行の制覇」によつて戰爭の「地域」と「舞臺」との別を、戰線と銃後とのそれを、更にソヴイエート理論にありては、帝國主義戰爭と内亂との區別を解消した。——これ等の諸現象は、すゝんでクラウゼヴキツツ將軍のいはゆる戰爭の絶對的——相對的區分をも解消し去り、あらゆる戰爭現象は、それのほんのプロローグだけが登場したばかりなのに、早くも本國戰爭と轉換し、こゝに物凄き形相を呈露するのである。たとへ蒼溟のそれを隔つるものがあり、峯巒のそれを支ぎるものがあらうとも、文化國同志の間に開始せられた戰爭は、皆悉く本國戰爭の一筋に歸着する。

また航空戰は無慈悲である。また航空機の投下する鐵塊は、あまりにも不作法にして「怪奇」なのである。それ等を驅使して決行せられた「電撃戰」は、何の前觸もないので、平時と戰時との區別をさへ認容しようとはしないのである。爆彈は、まづ前に投下して相手を粉碎した方が事實上の勝利者ではないか。その行爲が、倫理學の法則に照して良からうが悪しからうが、皆後の祭りであつて、國際上の問題としては餘りに微弱であり過ぎる。こゝに豫想せられるものは、平時より戰時への急角度の轉換である。しかも戰爭は、從來の三〇年ないし一〇〇年の長期戰爭の代りに、刹那的な形式が選擇せられ、國家の總力を擧げて敵國内の心臟部をめがけ、匕首一閃、

瞬間的にこれを抉り畢せ、そのいづれかゞ決定的勝者または決定的敗北者となり、こゝにまた戰時より平時への急角度の轉換が經驗せられるであらう。「宣戰布告前に、機敏に攻撃するの利益はあまりに周到ならざる國民を試煉するのに、可なり大なる效果があるものだ」〔アンリ・ベルネイ〕。

「電撃的」戰術を契機として、平時―戰時―平時へと、急角度の轉換が體驗せられることにより、こゝに出現したものは「新秩序」である。舊秩序即ち〈statu quo〉は、怒濤に漂ふ雪片の如く解消し、もはや何等の痕跡さへも止めないのである。

「電撃戰」は、もの凄き「カタクリズム」〔革命的混亂〕を敵國内に捲き起し、こゝに世人の想像にだも及ばない「ミートス」〔奇蹟〕を孕むのである。――この「ミートス」を母胎として、こゝに燦爛たる民族的「史詩」〔Epos〕を編述するに至らしめるものは何か。それは機械文明である。絶えて觀念型態ではない。

世界は、この決定的戰勝國となり、一篇の民族的「史詩」を書き下ろさんがために、性急に、敏感に、自國の機械文明を碾ぎすまことに鋭意してゐるのである。

世界は、いまや機械文明の齒車の上にある。一瞬の落伍は間髪を容れず、自我自身の全體的・總括的爆破を誘致するに至るであらう。機械文明・尖新な戰爭技術――これ等を抱載して、伸展過程に營爲する客觀的範疇の壓力は遂に絶對的であるに向けて、或る種の固定した觀念型態の思辨に侵淫せしめられた國家民族には、假借なく無慈悲な懲戒が加へられるであらう。――「カタクリズム」即ちこれであつて、かゝる國民は誇らしき民族的「史詩」を編述するかはりに、まことに陰慘な民族的「悲歌」[8]を奏して止む。

新しい戰爭技術が發見せられるところ、必ず新しいイデオロギーが示現する。新しいイデオロギーが蒸化するところ、また尖新にして驚異すべき戰爭型態が投げかけられるのである[9]。新しいイデオロギーに開眼せられないものは、必然的に尖新な戰爭型態に對して、認識の不足を包藏する。國を擧げて「敗戰」に導き、その生存權を危機に提露するものは何か。それは赤字から來る國庫の窮乏でもなければ、經濟界の不況に隨逐する思想界の混亂でもない。また人民戰線でもなければ巷の耽美主義者でも尚更ないのである。焦燥なイデオロギーの轉換と、新しい戰爭技術の伸展とに對して眼を閉ぢ、耳を塞ぎしものにこそ、「敗戰」の宿命は立ちどころに殺到するので

ある〔！〕。

それの密度において、水よりも遙かに稀薄な「空氣に浮む軍艦」は、總重量の五〇―六四%の爆發物を搭載せることを想へ。機械文明の伸展は、すゝんで「スピード」の理念となつて示現する。それ故に「轉形の韻律（リズム）」は航空現象において特に敏感であり、また焦燥なものが看做せられてあらう。――「電撃戰」は、それの寵兒である〔！〕。

8) 一九四一年午後、フランス元首相レイノウが、下院において試みた一場の『敗戰報告』は、一篇の民族的「悲歌」として聽くべきである。――「敗因の眞相は、われ〳〵の戰爭遂行に關する舊式の觀念が、〔獨逸の〕新式觀念に遭遇して、時代おくれになつて來てゐることにある、云々」と。

9) この數行を裏書するものは、マックス・ラファエルに見出される下のやうな言葉である。――即ち主觀―客觀の關係において、新しい客觀的具體性は、すべての心的狀態の原始的偶然性に廣き限界を附與すると同時に、また逆に、それ〳〵新しいすべての心的狀態は、結果として同樣の客觀的事物を齎して來る」と。そして「この主觀・客觀の對立は相對的のもので、その精神的質容と機構とが新しいもの〈還元する時、經驗的領域の物的存在は破壞せられる」と。Vgl. Max Raphael, Zur Erkenntnistheorie der konkreten Dialektik. Paris. 1934. S. 62. S. 76. ff.

「速力二節の相違は、如何なる士氣〔モーラル〕を以つてしても、補塡することは出來ない」とは曩の歐洲戰爭の當時、ユトランド海戰において、獨逸戰艦隊が二十三節の速力を有し、英國艦隊よりも二節の優越を具備せる事實を發見した際の、英提督ジェリコーの述懷であつた。

鐵砲を臆病道具であると輕蔑したわが封建期の武士も、火藥力の發揮する現實的脅威の前には、如何ともすることが出來なかつたのである。

いまや往時の滑塘砲より旋條銃への伸展、それよりも地上の大砲より「飛べる大砲」〔飛行機――ジョルジ・ギイヌメールの言葉！〕への伸展は、壓倒的迫力を以つて、すべてのものを爆破するのである。それは唯物史觀哲學者のいふ「客觀的範疇」〔objektiv Kategorie〕に該當するものである。戰爭技術の「客觀的範疇」は、それに反する微弱な諸計企・諸構想を餘すなく、灰失せしめて畢ふほどの迫力を有つ。

桑港よりマニラに至る約七、〇〇〇浬の「汎米航空路會社」線は、少くとも帝國に對する「客

觀的範疇」であつた。何となれば、それは帝國に對して、「電撃的」戰術を施そうと欲したならば施すに足りよう幾多の珊瑚礁基地[10]を、いはゆる「沈まない航空母艦」として包羅してゐたからである。

「萬物は流轉する故に、吾も亦それと共に流轉する」といふラテンの諺は、殊に「焦燥な韻律」に乘る現代において、如何に痛切な意義を罩め宿してゐることか。隣國の「電撃的」準備に對しては、それよく固定せる觀念型態を清算し、隣國の「電撃的」準備を反撃するに十分な「超電撃的」準備を整へしものにのみ、勝利の榮冠が輝くのである。

固定せる觀念型態にこそ、「敗戰」の種が蒔かれてゐるのである〔！〕。

10) 〉Stratégie aero-navle dans le pacifique〈 par capt de Corvette. V. Barjot. La Revue Maritime. No. 213. Septembre, 1937.

「結局飛行艇のお蔭で、ミッドウェイ島や、その附近及び中間に散在する珊瑚礁は、太平洋上における米國の組織的防禦の樞軸たるハワイ群島の防衛を强化するものである」と、V・バルジョウは

いふてゐるのであるが、これは逆說的に解釋すべきものである。——組織的「防禦」も組織的「攻撃」も、「電撃戰」の立前から論ずれば、左のみ重要な區別ではないのである〔！〕。

「電撃的」戰術は、「空間」及び「時間」の舊觀念に革命的變更を加へ得たのである。即ち「空間」より「隔絶」の觀念を除却し、「時間」より「繼起」の觀念を抹削し去り、これをして實踐〔Praxis〕を內容とする「刹那」〔Moment〕の觀念に、歸一せしめることに成功を告げたのである。これは眞に、「驚異」であらねばならない〔！〕。

「空軍は陸軍および海軍よりも、技術の革命的伸展と、戰爭に對する發展的手段との迅速性を利用してゐるのである[11]」と、將軍アルマンゴウは說く。そして「空軍は、二個の主要な點において擡出せるものがある。」卽ち、

「その一は空間である。——近代世界を不安ならしめてゐる紛爭の擴大性を考慮する時、『空間』の問題の如何に重大なるものであるか知り得られよう。

「その二は時間である。——『時間』は驚異を保證する。戰爭行爲が營まれる度毎に、ます〳〵

世人は驚異を以つて、成果の確實な抵當であると考察する」と。

そのいふところ、頗るセンセーショナルに讀まれてはあるけれども、「空間」の問題の重大性は、今や「電撃的」戰術の施行によつて止揚せられ、たゞ「時間」のみ「驚異」の保證となつて殘されてゐるのである。

「驚異」といふやうな感覺的體驗は、「物體」と「目的」との關聯より生ずるものであると、マクス・ラフアエル[12]は說いてゐる。

航空機は、由來、「高速度精神の物理的型態化」であると考へられる。この現代の物理的條件では、達成することの不可能性を信ぜられてゐる諸目的が、この信念を裏切つて達成せられた時こゝにはじめて、「驚異」といふ感覺的體驗が生ずるのである。

それは、しかしながら無條件に、「驚異すべきもの」であつたらうか〔!?〕。

西歐人の眼孔を以つてすれば、伊太利北部からロンドン爆撃を成功的に成就することが不可能視せられてゐたにも拘はらず、わが海軍航空部隊は、それに匹敵する遠距離の渡洋爆撃を最も成功的に達成してゐるのである。これこそ西歐人にとつて、「驚異すべきもの」にあらずして何であらう。しかるに吾等にとりて、獨逸の「電撃的」戰術は、必ずしも「驚異すべきもの」ではあり得ないのである。

それは吾國の、若しくは獨逸の機材・人員が、その目的を達成し得るだけの物理的條件を十分に具備してゐたからである。「物體」〔「機材」及び人員を含む〕と、それが達成しようとする「目的」との間に、水も洩すまじき物理的關係——卽ち「統一」が維持せられてゐたからである。

「統一」を維持する支索の一部が、ヴエールに被ひ匿されてゐたことも、或は有り得るであらう。「電撃戰」を準備するために、將軍アルマンゴウが勸告したやうに、「機材を著しく增加せしめしかも工場生産物にはヴエイルをかけておく」[13]位の配慮は爲されるかも知れぬ。それ故に、その效果が、或るモメントにおいて燦爛として結實した時、それは遠くよりの傍觀者にとり、「驚異すべきもの」として、心からなる驚異に値するのである。

驚異は、奇蹟である。「論理的聯環の一つが匿されてゐた時、そこに奇蹟が生れる」といへりレデヴイツト・ヒーユムの悲劇論〔!〕。

11) D. Luftwaffe. Bd. I. Nr. 5〔Revue Militaire Française. Nr. 148 Novembre 1933〕

12) Max Raphael, Zur Erkenntnistheorie der konkreten Dialektik. 1934. Paris. S. 54.——こゝの論旨は、原文のやゝ放縱なる解釋であることを諒とせられたい。

13) ひとりアルマンゴウのみではない。將軍デュシェーヌにも「不意の急襲を決行せんとすれば、まづ急襲の準備を極秘に附しおき、命令せられた編隊は最後の瞬間において集結し、豫期せられない急襲を展開せねばならない」との說がある。〔▷Der plötzlich Angriff und die Luftgefahr. ＜von General Dechêne Luftwaffe. Bd. 6. N. 2〕

M・ラフアエルは、外界の「物體」と、それの「目的」との「分裂すべからざる統一よりして、個人的に決定せられ、また一度限りの、或は刹那的のものが導き出される」[14]といふてゐる。この一句には、「電撃戰」を哲學づけるに當つて、極めて意味深甚なものが認められてあらう。「物體」〔「機材」及び人員を含む〕と、それが達成しようとする「目的」との分裂すべからざる統一は、たゞ物理的にのみ解釋してはならない。卓越した機材の性能と、それを驅使する人員の一絲亂れぬ統制とが、そこに併考せられてあらねばならない〔！〕。

卓越した機材の性能と、人員の一絲亂れぬ統制とが强められ、しかもさうした民族的「體系」の一部若しくは全部が被ひ匿されてゐる時、或るモメントにおいて發揚するを得たりし「電撃的」戰果は、傍觀者によつて、さぞかし「驚異すべきもの」として享け容れられるであらう。——ただしこれは相對的の「享け容れ方」にしか過ぎぬ。〔卽ち▽ein umgrenzte Hier-, Jetzt-, und Sosein in der sinnlichen Empfindung〕。

「電撃的」戰術にして「國民勢力の發現」なりとすれば、それは決して魔術の杖により、一夜の內に描き出されし蜃氣樓ではないのである〔！〕。

それは多年にわたつて培はれた技術と、蓄積せられし工業生產力と、機械力と、更にそれへヴエールをかけておくことを忘れない國民的節度と德操、更に多年にわたる人的訓練と、國民全體となつて民族的使命を達成すべく、個々を犧牲としての「全體的統制」との結實である。

「全體的統制」といふことを知らない社會民主主義國の國民にとつて、「電撃戰」は遂に奇蹟であつた。故に彼等は「電撃戰」を試み得ないのである。たゞ非文化國或は半開國民を對象とする

「懐撃戦」のほか、見るべき戦争技術は發達し得ないのも當然か。――一方の挑みかける「電撃戦」を、一層物凄き「電撃戦」によつて反撃することをせずして、早くも「勝戦」と「敗戦」の兆候を露呈しかけるのである。

また「電撃的」作戦にして哲學上の「認識」の範疇に屬するならば、その根源において、すでに「實踐的行動」であり「觀照」の類ではないから、したがつてその結末も、また「實踐」の最たるものであらねばならぬ。そして「實踐は理論を超越する」〔Die Praxis der Theorie überlegen〕こと、「電撃戦」におけるがほど端的なものはない。

それは、あまりにも革命であると同時に、刹那的なものであつた。

14) Max Raphael, Loc. cit.

「個人的に決定せられ、また一度限りの、刹那的のものが導き出される」といくりしは、即ちゲッテルベンドの考へた〈ideographische〉なものに該當する。〔Präludien. Zweiter Band. 〈Geschichte and Naturwissenschaft.〉――民族的「史話」は、刹那的な「電撃戦」を契機として、ここにその民族限りに獨自の、またその時代限りに特殊な民族的「英雄史」として、書き直されるのである。

15) Op. cit. S. 24

戰爭現象の哲學的考察

跳員による青天霹靂的戰術——卽ち「電撃」戰術は、また新しい戰爭の哲學を布陳するであらう。知らず、飛行機による尖新な戰爭型態は、如何なる理論によつて哲學せられるであらうか。

この世に、絶對的に新しいといふものは存在し得ない。新しい戰爭哲學といふても、畢竟、古めかしいそれの模樣がへに非ざれば、解釋の仕直しにしか過ぎないのである。しかしながら概念の結びかへが、また新しい感情と存在層との顯現を示唆することを忘却してはならない。

戰爭は民族にとりて、それも興國の氣象の躍如たるものが認められる民族にとりて、自分等の生存に必然な至高至大の超絶原理であると思惟せられる。卽ちあらゆる後驗的思索によりて尋究することが出來ず、また分析的證明を以つて說明することの出來ない先驗的ないし綜合的の所與原理であると考察し得られる。先驗的ないし綜合的の所與原理は、ひとり人間活動及び歷史法則の根源であるばかりではない。すゝんで後驗的ないし分析的判斷そのものさへ可能ならしめる先

立條件である點において、エンゲルスの解釋による辯證法と、その軌を一にしてゐるのである。否、こゝにエンゲルスを俟たないでも、これは夙にケーニヒスブルグの哲人が、數學・自然科學及び思辯學の三科學の成立につき、それ〳〵周密に說明しつくすところのものであつた。

ヴキンデルバンドもいふ通り、カントの哲學は、いはゆる「概念の類型的合法性」を討究の對象とするばかりではない。それは實踐的理想主義であり、また人類の理想の何であるかを討究の主題とせる哲學であつた。人類の理想へ到達するに二つの道がある。それは自然科學と文化科學とであるが、この兩分野の構成は全く相異なつてゐる。卽ち後驗的ないし分析的判斷に基づいて自然科學は說明し得られ、それと、先驗的ないし綜合的判斷によつて說明せられる文化科學との方法論的對揚さへもが考察に上つて來たのである。そして自然科學の方法を「法則的」、文化科學のそれを「個別的」と呼ばれてゐることは、哲學學徒の誰でもが、かへつて忘却して畢ふほど世間に俗通してゐる理論なのであるから、こゝでは說明を省略するであらう。

ヴキンデルバンドは、この「個別的」卽ち文化科學の世界に働きかける歷史的因果律を、「一度限りの因果律」〔Kausaleinmligkeit〕といふてゐる。そしてそれは、「人々が責任のある行動を

執つて、環境に缺くことの出來ない新しい意味を附加しようとする人格的要求」に由來するものなることを主張してゐる。

これに比考し、自然科學を成立せしめるものは、同時的—論理的因果律である。これと叙上の歷史的因果律——卽ち「一度限りの因果律」とは、範疇的に、それの成立の由來と樣式とを異にしてゐるのである。さてリツカートのいふ通り、個々の事物を、その根底を共通にする概念より別置して、個別的に理解しようとする悟性の根源的要求より、かうした二元論的解釋が出發して來た。

「個別的」世界には、意識一般を機杼として、その時代々々の價値判斷を決定せしめるべき「規範」〔Norm〕が樹立せられてゐる。その時代々々に特殊なる文化科學は、その時代々々に特殊なる「規範」概念に據つて成立せしめられるのである。わたくしは、しかしながらわたくしの戰爭哲學を布陳する豫備階梯として、この「個別的」世界に働きかける「規範」意識をさへ笑破して畢ふであらう。

マクス・ラフアエル[1]のいふ通り、われ〳〵の思惟が後驗的ないし分析的判斷と相容れないところの、先驗的ないし綜合的判斷の對象を探求して止まない時、われ〳〵は「物それ自體」の領域に歸入する。——「物それ自體」の領域は、最も根源的なものゝ淵叢であり、あらゆる論理的思惟の說明することの出來ない「無論理的」〔alogische〕の世界である。げに洪濤が輕舸を掀播するが如く、論理的・法則的世界を震撼するものは、この無論理的・無法則的世界である。論理的・法則的世界が輕舸に譬喩せられるならば、無論理的・無法則的世界は、かのフレデリツク・アミエルの擘に倣つて、際涯なき碧空に見立てることが出來るであらう。——この際涯なき碧空より、戰の雲はむら〳〵と湧き出でゝ、それに浮遊する論理的・法則的世界を變形せしめ、或はこれを破壞して畢ふのである。

ヴキンデルバンドが、この無論理的・無法則的世界に、文化科學の成立を可能ならしめるべく、「意識一般」を基礎とする「規範」意識を考察したが、われ〳〵が「物それ自體」の領域に歸入するとともに、この「意識一般」の思惟卽ち既成の文化科學を成立せしめる基礎概念を突き崩し、存在と意識との對立をさへ、より一層高き段階に向つて止揚せしめるのである。

1) Max Raphael, Zur Erkenntnistheorie der Konkreten Dialektik. 1932. S. 100.

アリストテレスは、人間の本性に〈socius〉なる要素の介在を是認し、生れながらにして「社會性」を有する事實を肯定してゐる。これが眞實ならば、はじめから「戰爭」現象の勃發は考へられない譯ではないか。

しかるにルドヴイヒ・シュタイン[2]のやうな學者は、人間は當初よりして鬪爭的であり、個人と個人、民族と民族、國家と國家との間には不斷の摩擦が持續せられてゐることを認め、永き歷史生活を通過することによつて、「社會性」を具備するに至つたと思惟してゐる。それであるから「自然の法則と、他方歷史の志向とは、最高の種族概念に向つて伸展する」といひ、前述ヴキンデルバンドやリツカートの所說とは、自ら對蹠する見解を打ち樹てたのである。

シュタインの說に從ふと、戰端を開きつゝある敵國同志でも、元は相互に友人同志であつて、いづれは或る共通の規範準繩において結びつけられるのである。——凡そこの理論に該當することと、日支兩國間におけるがほど端的なものはない。日本は、支那の舊國民政府及び軍閥を討伐の對象に擬したのであつて、支那四億の蒼生は、決してわれ等の敵ではないのである。フランスの諺の通り、「これは由々しい出來事である。しかしながら戰爭ではなかつた」のである。

われ〳〵が、この論稿で問題とするのは、たゞ醇乎たる「戰爭」現象の哲學的解釋に止まるものである。或る時代限りに、また或る場所限りに感受せられる民族的利害の問題を超越したところの、少くともその民族の意志に根ざせる最も深奥な、そして尖新な根源衝動より來る「戰爭」現象の說明に突き進まんとするものである。如何にも或る時代限りに、また或る場所限りに感受せられる彈機の役割はつとめるであらう。しかしながら「戰爭」現象そのものではないのである。

そしてわれ〳〵は、シュタインの意味した「最高の種族概念」はいはずもがな、「意識一般」を機杼として考察に上る「規範」意識よりも、いやはるか深奥な、そして尖新な根源衝動が「戰爭」現象の底に、また傍に胎動しかけてゐる事實を——人間歷史を通じて最も嚴肅な事實を凝視して止まないであらう。

2) Ludwig Stein, Die soziale Frage im Lichte der Philosophie. Dritte und Vierte Aflage. 1923. S. 455, S 495.

エミール・ラスク[3]は、無論理的・無法則的な「物それ自體」の領域に胎動しかける根源衝動を明かにし、これを「未だ科學的たり得ない機能」——〈vorwissenschaftliche Funktion〉——といふ言葉で表示してゐる。

隔置せられた個々の事物——それは文化規範にまで齊整せられず、未だ科學的たり得ない機能のほかの何物でもないのである。この機能の本質を得て遺憾なくいひ現すべく、ヴキンデルバンドの使用した「個別的」〔ideographische〕といふ言葉さへも亦餘りに希臘的であつて、概念的なものゝミニマムを罩め宿してゐるのである。——そしてよしんばミニマムにせよ、概念的なものがそこに保存せられてある限り、文化規範の遙か手前に横はるところの「未だ科學的たり得ない機能」とは對蹠的に、それの範疇を異にしてゐることが知り得られる。

「戰爭」現象の最も早い搖籃は、この「物それ自體」の領域に胎動する「未だ科學的たり得ない機能」そのものに見定められるのである〔!〕。

3) Vgl. Emile Lask, Logik und Kategorienlehre.

「戰爭」は「物それ自體」の世界、「未だ科學的たり得ない機能」等一系列の、無論理的領域より出發するところの、最も由々しい現象の一なのである。

そして、それが飛行機を道具とすることにより、尖新な「存在層」を提起し來ること端的なものがあらう。戰爭を契機とし、「未だ科學的たり得ない機能」よりして尖新な「存在層」へ導入せられる樣式は、すでに舊套の觀念學者〔ヘーゲル〕の考察した「成長」〔Werden〕なぞといふ微溫的志向を辿るものではないのである。

それは、實に感情の躍動である。——われ等はすべからく、かのハルトマン將軍[4]が戰爭を定義して、「あらゆる拘束より解放せられた感情の躍動である」といふたセンセーショナルな言葉をこゝに想起せねばならない。

「未だ科學的たり得ない機能」の發露は、既成概念のすべてに對する挑戰であり、また固定して、つぎに墮落した既成現象に對する否定を以つて終始する。

この挑戰と否定により、こゝに示現するものは、最も深い「根源現象」〔Urphänomenon〕であると考察し得られる。――最も深い「根源現象を示現しようがために感情は躍動し、未だ科學的たり得ない機能を機杼として、こゝに跳員による青天霹靂的戰術が奔放に展開せられるのである。

わたくしはまた、かの一八〇六年より一五年にわたる普佛戰爭の當時、獨逸の勇將として知られたクラウゼウヰツツ將軍が[5]、あらゆる拘束より解放せられた感情の躍動として把握せられた尖新な存在層は、今は古びた種族概念に對して抗爭を準備する個人的力量であると共に、似而非文化並びにそれを支撐するもろ〳〵のイデオロギーに對する否定原理である、と道破した言葉を擧證することが出來るであらう。

これ等の提說は、こぞつてフォン・モルトケ將軍の、下のやうな戰爭聖化說より起つたものである。

「戰爭は聖なるものである。神性制度であつて世界の神聖なる法則の一つである。戰爭は人間の中に、偉大にして高貴な、あらゆる情緒を保存する。即ち名譽・無私・道德・勇氣なぞを維持する。これを要するに、それ等が最も忌むべき物質主義に墮落することより防ぐのである。」

――即ち「戰爭」は、「神の世界的秩序に屬する一機構」〔ein Glied in Gottes Weltordnung〕であることが、モルトケ將軍によつて由々しくも肯定[6]せられたのである。

4) Vgl. >Militarische Notwendigkeit und Humanitat. < Rundschau. Bde. XIII. S. 119-35.

5) Vgl. vom Krieg.

6) ラードブルフは、このモルトケ將軍のいかめしい言葉を引證し、それに起續して、「國家の概念はこの秩序の内に織り込まれ」〔ラツソン〕、こゝにトライチユケのいはゆる>die Politikat Fxochen<が成立したと附加してゐる。これ等の戰爭聖化說は、畢竟「從來の自由主義に基づく國家同志の聯合體〔カントの考察した『世界市民としての自覺に基づく自由國家の聯合體』の理念と相俟つものでない。――筆者註〕は、事實においてマクス・シユテイルネルの意味した利己主義者共の寄り集まりに過ぎなかつた」ことの反映であると。こゝでラードブルフガ、>Friedensgemeinschaften der Staaten<といへるは、歐洲歷史上に出現した「神聖同盟」をはじめ、名のみ美しい「國際聯盟」類似のそれに該當するものであり、金輪際、道義の一筋に結びつけられた日滿支三國間のそれに當嵌まるものでないこと

を、こゝで警告しておかねばならない。Vgl. Radbruch, Grundzüge der Rechtsphilhphie 1914, S. 136-7.

ハルトマン、クラウゼウキツツおよびモルトケ諸將軍の、センセーショナルな戰爭の定義を哲學し來るものは、かのゼーレン・キールケゴールの質的辯證法〔qualitativ Dialektik〕のほかの何ものでもない。

キールケゴールが、形式論理學に附與した下のやうな非難のうちに、意味ふかき或物が含まれてゐるのを看取する。卽ち「論理學は、それ自らの領域にありて、偶然性なるものを理解することが出來ない。偶然性は、しかしながら實在の本質的內容である」と。——そしてまたいはく「事實の世界において、偶然性への推移は、飛躍によつて爲し遂げられる」と。

$A_1A_2A_3$……と、すくなくとも、その質容を同じくする事物間の推移は、論理的進行であるけれども、A. B. C. ……と、全く質容を異にする事物間のそれは、「成長」以上の「飛躍」であらねばならぬ。自然科學は、普遍的に妥當なる論理的法則に基づいて展開せしめられると同時に、人文科學は個別的に特殊なる歷史的因果律によつて伸展せしめられよう。しかしながら事物の質容は、歷史的因果律をさへも無視したる、それ自らにおいて絕對的な「飛躍」によつて驀進する。

辯證法的「飛躍」は、また「創造」を完成する。東洋および西洋の文化史は、今や日本・獨逸および伊太利の樞軸三箇國の必死の鬪爭により、新しい「創造」にむかつて、一「飛躍」を試みんとしてゐるのである。

そしてその「創造」しようとするものは何か。東西それ〴〵の領域における「新秩序」に外ならないのである〔!〕。

〔7〕 Max Raphael Op. cit. S. 75.

事實としての文化史は、數限りなき「飛躍」と「創造」の序列であつた。文化的欲求に向つて端的なればなるほど、ます〳〵高き「飛躍」衝動と「創造」に對する願望とが、その傍に準備せ

られてあつたのである。

「青天霹靂的」戰術が把握する尖新な「存在層」は、その本質は、卽ち「實在の實在」は、絶えてイデオロギー的辯證法〔Dialogik〕によつて說明し得られるものではない。イデオロギー的辯證法の彼岸に、いなその根底に、質的辯證法が準備せられてゐることを忘れてはならぬ。「形式の形式」といふ判斷は悟性そのもの、私生兒であつた。しかしながら「吾等の悟性は、何故に筋肉と血液を具備してはならないのか。筋肉と血液を具備する限り、何故それは激越せる感情であつてはならないのか」〔!?〕。

激越せる感情は、目前に繰りひろげられた、ありのまゝの、現狀の一筋に繫がれる「實在」を輕蔑する。そして現狀の「實在」を揚棄して、その奥にひそむ眞乎の「實在」を——卽ち「實在の實在」を追求して止まないであらう。そして秩序を新にした構成的な何物かを確把するまで、感情は怒濤の如く漲溢して止まないであらう。こゝでわれ等は、「われ〳〵」が歷史より獲得した最善のものは、歷史によつて興作せられた激情である」〔Das Beste was wir von der Geschichte haben, ist Enthusiasums, den sie erregt.〕といへりしゴエーテの言葉が、痛切に想起せしめ

られるのである。

自然科學における最高の措定が、アプリオリの判斷によつて證明せられてある限り、激越せる感情を除いて、文化科學におけるそれを證明しつくす何物があり得ようか。證明が直ちに感情である限り、感情その物が、また直ちに證明その物ではなかつたか、あらゆる拘束より解縛せられた、若しくは解縛せられようとする感情の躍動と激越とが、「戰爭」といふ嚴肅なる出來事によつて表現せられてある限り、「戰爭」は、すべての抽象的規約よりも高級な「證明」〔Evidenz〕そのものではなかつたか。

「戰爭の間は、すべての法則は沈默する」〔inter arma silent leges.〕と。この古めかしいラテンの諺に見るやうに、疑ひもなく戰爭は——殊は飛行機を道具とする戰爭は、既成文化の一切に對する果敢な否定原理であつた〔8)!〕。

8) 飛行機による攻撃卽ち爆撃が、既成文化に對してあまり破壞的でなく、それ故に否定原理にあらざることを明瞭ならしめるものは、〈The Aeroplane〉 1s/Aug. 1937. に揭載せられたC・G・グ

レイ署名にかゝる小論文である。いはく「精神的・生理的に政治家をして恐怖の困憊に陷れ、これを消沈せしめる爆彈こそは、格鬪よりも遙かに人道的であり、平和を招來すること、一層に迅速である。格鬪は國民中、生理的最適の分子を殺戮し始め、それが極度に達すると、凡そ爆彈が企及すべからざる手段を以つて、國々を擧げて荒廢に附するであらう」といへど、これは原筆者に獨特な獨斷的見解であるといはねばならない。飛行機による爆擊は、「一般荒廢」を招來すること他の方法によるよりも端的である。それで「空襲の重點は大掃蕩を企てるにあり」といひ、また空軍の使命に論及して、「海陸軍の勢力を以つてしては獲得すべからざる目的を成就するにあり、軍隊若しくは艦隊そのものゝ擊滅は必ずしも空軍の目的ではない。空軍の目的は、敵をして全體的に、その鬪志を挫折せしめるにある。」といふたヘルフンド・フォン・ローデン中尉の說が、眞理を物語つてゐるものゝやうである。〔Gedanken zum Luftkriege〈 Luftwehr. Bd. 6. N. 2〉。

戰爭は否定原理であると共に、それはまた、來るべき新なる世紀を基調すべき肯定原理でもあつた〔!!〕。——この否定・肯定の二律背反を說明すべく、辯證法的唯物史觀によるよりも、むしろ超絶原理により、沸騰せる激情を母胎とする「飛躍」といふ質的辯證法を俟ちてこそ、それは初めて雄辯に語りつくされるのであつた。

わたくしはこゝで「見えは信仰である、されど感情は赤裸々の眞理である」〔Seein's believin, but feelin's the naked truth〕といふ蘇格蘭の格言を興味深く想念に浮ばせるであらう。若し敵性國の格言と言葉とを、併せて引用することについて、著者を彈呵しようとする狹量な愛國者がありとすれば、著者は更に、さうした人々のために、盟邦獨逸の詩人ゴエーテの貽した「激情のみ人生を永遠にする」といふ達言を擧示するであらう。激情ほどアプリオリなものはなく、激情ほど實體の世界に獨接すること端的なものはない。「激情は退化する。しかしながら激情はまた奔騰する」〔La passion déprave, mais elle élève aussi〕とラマルティーンはいふた。——奔騰して、人生を永遠の相の下に甦らせしめる激情こそは、最も聖的なものであるといひ得られるのである〔!〕。

法律の支撐するものは、未だ經驗的價値たるに止まる。ヨゼフ・コーラアのいふ通り、法律を實現することをのみ目的と考察した法治國は、十九世紀にありては大に尊長せられたのであるが、かうした法治國家は、往々にして國家の使命とするところを忘却し、その力量を弱體化するの結果となつた。「文化」は由來、客觀的法律のみかは、すゝんで主觀的法律までを內包し、文

化國家としての素質を具現しようとする志向となつた。——あまりにも峻酷な法治國家を止揚してこれを文化國家として完成せしめるであらう契機は、激情の懐より生れた「戰爭」現象のほかの何物であつたらうか〔!?〕。

あらゆる既成概念を打ち毀ち、固定化したまゝに生き伸びた規約を一片の反古となし、こゝに發剌として生命ある本質的のものを把握しようとする文化國民必然の希求は、エミール・ラスクのいふ「絶對的價値」の顯現を意味し、「法律に先立つ實體」——vorjuristische〉Substrat〈——に導入することを目的とするものである。[10]

「戰爭」は否定原理であるからして、また既成の諸規約を蔑視するからして、驚異すべき「ミートス」が、また戰慄すべき「カタクリズム」が、その傍に示現するであらう。　さりながら、こゝに見よ、かの尺取蟲は仲びようがために、一時、その身體を縮めるではないか〔!〕。

9) Josef Kohler, Lehrbuch der Philosophie, 1909. S. 143.
10) Vgl. Emile Lask, Rechtsphilosophie.

わたくしの叙述は、頗るじぐざぐした迂路を辿り、說明の糸筋はこんがらがつて、讀者の或るものに取りては、理解するに苦しむことの無きを保しないのである。そこでわたくしは、その要旨を十箇條に要約して示すであらう。

一　戰爭は至高至大の超絶原理である。それは先驗的ないし綜合的の所與原理であつて、絶えて後驗的ないし分析的の判斷と相俟つものではない。

二　先驗的ないし綜合的の所與原理は文化科學に、それに對して後驗的ないし分析的の判斷は自然科學に施すべきものである。

三　先驗的ないし綜合的の所與原理もて說明せられる文化科學の範疇は、「個別的」世界に屬するものであつて、こゝに「一度限りの因果律」が働きかける。——「一度限りの因果律」は環境に新意義を附加しようとする人格的要求に由來するものである。

四　また「個別的」世界には「意識一般」を機抒として、その時代々々限りに特殊なる價値判斷を決定せしめるべき「規範」意識が樹立せられる。

五　由來「個別的」世界は、無論理的・無法則的世界であつて、こゝより最も深奥にして尖新

な根源衝動が働きかけ、こゝに嚴肅な「戰爭」現象を孕み來る。

六　「戰爭」現象の母胎である根源衝動は、「意識一般」の所産にして固定化せる「規範」に對する激しい否定原理である。

七　民族的利害關係の衝突は、畢竟、根源衝動を刺戟して「戰爭」現象を觸發せしめる彈機であるが、決して一般に考へられてゐる如く「戰爭」現象そのものではない。

八　「戰爭」現象の母胎であるところの根源衝動は、「未だ科學的たり得ない機能」であると考へられる。——それは或る新しい「存在層」〔新秩序〕を孕み出す「感情の躍動」である。

九　「感情の躍動」は、異質文化間における辯證法的「飛躍」によつて伸展せしめられる。

十　辯證法的「飛躍」は「創造」である。——故に「戰爭」現象は、否定原理であると共に肯定原理であり、「破壞」と同時に「創造」である。

洋の東西を問はず、英雄的民族の脈博には「飛躍」意志の發刺たるものがあり、また「創造」意志の躍如たるものが存するのである。——この二つの意志を包藏する國家民族は勃興し、然らざるものは退歩するであらう。樞軸三箇國は、實に「飛躍」と「創造」によつて哲學せられてゐるのである〔!〕。

「飛躍」と「創造」によつて哲學せられてゐる國家民族は、然らざるものと、全く趣を異にせる新態勢を以つて外に向はねばならぬ。新態勢を以つて外に向はんとすれば、內に新體制を整えねばならぬのである。態勢と體制とは、語呂以上に愼密不可分の關係にあることが、こゝに圖らずも證示し得られるのである、

法律と文化との對立は、國家と社會との對揚である。法律が文化に內包せられねばならないと同じ樣に、國家の意志は社會に、また社會の意志は國家に、直接〔間接であつてはならない〕反映せられてあらねば、この新態勢—新體制の具現は得て望むべくもないのである、ルドヴイヒ・シュタインが「近代國家は文化國家であつて、この兩者〔法律と社會〕の綜合を實現する」[11]といふたのはこれであつて、カントが國家の法律を、ベンザムが社會の最大幸福を最高標準に擬したのが、このやうな頗僻した見解を以つてしては、文化國家に特殊なる新態勢—新體制の具現は、遂に不可能事に歸するであらう。

「飛躍」と「創造」に志向する國家の意志が、社會構成の最後の因子に至るまで徹底するに非れ

ば、高度國防國家としての新體制を其現することは企及すべくもない。何となれば「戰爭」は——少くとも「跳員」による「青天霹靂」的戰術は、機材の整備とともに、「人間力」卽ち志氣の持續に俟たねばならないからである。

「人間力卽ち志氣の持續は、主として戰爭が正當な理由によつて戰はれてゐる、といふ信念に依存する。卽ちわが國家の目的とするところは、敵方のそれよりも正しいといふ信念である。」

そして「人間力」〔man power〕とは、數量・智力・技能・精力・勇氣および國家と同盟諸國を意味し、なほ武力のみならず武力戰を支持し、指導する非武裝的銃後人をも抱含すると、英國人であるサア・レヂナルド・カスタンス提督[12]は、自國のことよりも、對立關係にある樞軸諸國の今日の狀態を、さながらに豫言したやうな言說を發表してゐるのはむしろ奇觀ではないか。

11) Ludwig Stein. Op. cit. S. 430. シュタインは最後の頁〔S. 578〕においてファシスタ及びプロシア・イデオロギーを簡潔に叙し、階級意識の上に國家の理念の重壓を加へ、多少の恐怖を附加して指導者〔Führerschaft〕の理念を確立したといふてゐるが、これがわが高度國防國家の創建を目的とする新體制とは氷炭相容れぬところである。獨伊兩國にありては、「指導者」といふ媒介を通じて國家の意志が社會に傳達せられるのであつて未だ間接的のものたることを免れない。わが國にありては「指導者」の存在を必要とせず、國家の意志が直接に社會へ、社會の意志が直接に國家へ作用し　皇室を中心とする一絲紊れぬ統制が歷史的—民族的傳統となつて輝いてゐるのである。故に恐怖に似たものは勿論、重壓に類する何ものもあらう筈はない。一見、自由主義の延伸ではないかと見紛ふほど圓滑な道程を辿つて、こゝに全體的新體制が具現せられるに至つたのである。各國が羨望に堪えぬわが國の特異性はこれである。

12) Admiral Sir Reginald Custance, A Study of War. 1924. p. 47-9.

戰爭と事變

佛國にこんな諺がある。卽ち「それは由々しい事件である。しかしながら戰爭ではない」〔C'est magnifique, mais ce ne pas la guerre〕と。これは頗る名句であつて、複雜多樣な現下の狀勢に當嵌め、極めて妥當なものがそこに認められてあらう。

戰爭にして「感情の躍動」である限り、頗る危險な結果が、そこから孕まれて來るであらう。「激情は飛躍する電光である。理智の馬力を以つてして測定することは出來ない」とエマーソンはいふてゐるけれども、「理智の伴はない激情は、さながら光なき火のやうなもの」ではないか。「光なき火」に終始すれば、宋だしも始末がよい方であらう。若し戰爭現象を感情・意志等一系列の主觀意識にのみ繫ぎ、頗僻した考察を下すことは、カウツキーのいはゆる「動員するための動員」〔der Krieg wegen der Mobilization.〕を肯定することであつて、文化諸國民の、つとめて避けようとするところのものではないか。

戰爭現象は、いかにも交戰國民の主觀意識を衣裳として、華かに繰りひろげられることは事實である。しかしながら客觀的・合目的物體關係が戰爭現象直接の動因として、主觀意識の傍に橫へられてゐることを看過するほど、現代人はマyopiaへ〔近視眼〕ではないのである。

この客觀的・合目的物體關係の樣式如何に基づいて、こゝに「戰爭」〔la guerre〕と「事變」〔la affaire〕との對立が生ずることを凝視しなければならない。

I「戰爭」は、少くとも同等の伸展段階に到達してゐる資本主義國家同志が、植民地・半植民地に對する併合志向の衝突であると解釋し得られる場合が多い。

往時は暫く措いていはず、現代における併合志向を觀察するに、先づ商業飛行機を前衞として展開せしめられる事實は、すくなくとも現代の「論理性（ロギシテート）」であるかのやうに見へる。

卽ち金融資本の債權國は、つとめて債務國の狀態を知悉し、その管掌と獨占をして效果あらしめようがために、この兩地域間に定期航空路を設定し、兩地域を連結する有機的紐帶を緊（ひきし）め、これをいやが上にも敏感ならしめることに性急となる。

われ等は、それの最も端的なる實例として、「汎米航空路會社」が、曩にシンガポールまで延伸

しようと目論見てゐた桑港―香港間の太平洋横斷空路〔一四、〇七八粁〕を指摘することが出來るであらう。更に「英帝國航空路會社」の英國サザムプトン―シドニイ線〔二〇、八七三粁〕・サザムプトン―南阿ダーバン線〔一一、六八四粁〕や、「エール・フランス」社のマルセイユ―香港線〔一三、六七三粁〕等もひとしき範疇に屬するものである。G・ブザンソンは、これ等本國と植民地を連結する定期航空路の價値を說明して、「飛行機は植民地に對して、土人に威信を示す方法として、最も顯著な道具である。飛行機は容易に、且つ迅速に移動し得るから、植民地內における視力單位および活動を擴大させるものである」といふてゐる。――聰明な讀者はこの引證によりわたくしが、こゝでいはうと欲するところのものゝ全部を速に理解することが出來たであらう。

この程度にありては、しかしながら飛行機に、戰鬪的な如何なる意義も附加せしめられてゐはしない。それは植民人に對し、本國よりの情報・藥劑・器具等の急需品を送致する意味で、むしろ衞生飛行と呼ばれ得るほど、平和的意義が打ち勝つてゐることを知るのである。これ等の商業飛行機は、それであるからして天使にも比考せられてよいだらう。この天使は、しかしながら餘り大した轉形も經ずして惡魔となり、直ちに偵察―戰鬪―爆撃機と化身し、跳員による青天霹靂的戰術を展開し得る性能を奮有してゐる事實を――この嚴肅非常な事實を閑却してはならない。

G・ブサンソンが引證するマーセル・プレヴォストの言葉にいはく、「或る一定の距離に對する速力の決勝は、……生活無氣力に、卽ち死に對峙するものである」[1]と。――この言葉こそは飛行機の戰鬪的意義を示唆することの、痛切なものがあるではないか〔！〕。距離は眞に惡魔である。[2]これを克復する「速度」の問題〔！〕。これこそ飛行機をして植民人に對し、福祉を齎す天使であらしめると同時に、資本主義戰爭に勝敗を決定し、固定して畢つた既成文化の根を、あばかずにはおかない超惡魔的役割を果さしめるのである。

こゝに見よ、AB二大資本主義的國家間に戰爭現象が捲き起されたとせよ、そしてその戰爭現象がCといふ植民地若しくは半植民地の併合を目的として展開せられたものであるとせよ、ABの兩國間の戰爭型態は、金輪際Cを戰爭舞臺として現出せず、また長期にわたる奔命によつて共に疲勞困憊し、かのセルヴアンテスの勁拔な警句における「去年の巢に今年の鳥を探すの愚」を擧ばないであらう。

この時ABは、しばしその鬪爭目的であるCを閑却し、直ちに相互の心臟を抉ぐるべく、跳員

による青天霹靂的戰術を果敢な型態において展開するであらうことは、公式的に指示せられてゐるのである。――この尖新な戰爭型態の如何に壯烈なものであるかは、いま現に、われ等の有ち合はして世界戰爭史の、いづれのページを以つてしても想像することが出來ないのである。「歷史家は、うしろ向きの顏を有つ豫言者である」〔Der Historiker ist ein rückwarts gekehrte Prophet.〕といふ諺があるけれども、跳員による青天霹靂的戰術にかゝはる限り、この豫言者もいまは啞者のやうに口を緘して何事も語り得ないであらう。

今日の戰爭現象は、それ故に「ミートス」ないしは「カタクリズムス」の名を以つて呼ばれよう蓋然性にさへ立つ。既往の戰爭は恰度野犬群のそれにだも比考せられるべきであつた。投ぜられた一片の肉塊をめぐりて互に爭奪する。そしてどの犬も皆困憊し、しかも爭奪目的であるところの肉塊は寸斷せられて、原形をさへ止めなくなるであらう。――高度文化國家同志の戰爭型態は決してかゝる「間の抜けた」方向において成立しないのである。その欲するところのものは暫し閉却し、自分の心臟が抉り畢せられる前に、敵の腦中樞に死の一擊を加へて止むのである〔！〕。跳員による青天霹靂的戰術は、かゝるきびしき志向において成立せしめられるのである。神に捧げようがために盜みをする。目的のためには手段を選ばないジェスウイツト教徒の信條こそは、今日の戰爭現象において正認せられるべき最後のものであつた。

目的のために手段を選ばないとはいへ、高度文化國同志の戰爭には、一つの條件がある。それは戰爭行爲を軍部限りに委任せず、經濟・科學・哲學、その文化的諸裝置の全部を擧げて、皆悉く戰爭の合目的價値にむかつて牽聯せしめ、擴充せしめようとする努力が卽ちこれである。フォレスト・シヤーマンが、「戰爭は一敵國或は數敵國の壓迫に反抗し、またはそれを壓迫しようとする國民能力の秤量である」といふてゐるのも、畢竟これに外ならないのである。

卽ちその國民の有つ物的―心的關係の總和が、卽ちその國民能力の秤量の全部を決定するのである。その杆格が大きくなればなるほど、敵國をして鬪志を挫折せしめることが急となり、戰爭そのものを未然に解消せしめることの可能性が、多大の確實性を把握するに至るであらう。それ故に「平和」は、武力〔平和的諸裝置を含む〕の第一級的效果であるといひ得られる。

これはしかしながら、ジェスウイツト的な獨逸的人道主義〔deutsche Humanismus〕の理念と おなじ範疇に依屬するものではないのである。一八八一年二月、サハラ砂漠のツアレグ族は、佛

蘭西の派遣軍を全滅させる目的を以つて、毒草を使用して椰子パンを製し、これを疲勞困憊せる佛兵に與へて、一氣にこれを殺戮し畢せようと目論見たのであるが、他方、ツアレグ族の習慣として、井泉を宗教的に神聖化する關係から、佛軍の飲料とする水源には、何等手を觸れなかつたのである。しかるに宗教を嘲笑して止まぬ獨逸の啓蒙主義は、曩の歐洲大戰に際會して、戰慄すべきヒンデンブルグ戰術となつて具現した。

卽ち道路・家屋・井戸を破壞し去り、敵の殺到するのを未然に防禦し、戰ひを、未だ戰ふに先立ちて解消せしめることを目的としたのであつた。——如何にも獨逸兵は、その命令書に「毒殺する」「vergiften」といふ言葉を使用しなかつたのは事實であらう。しかしながら肥料・糞尿・死屍ないし淺瀆を水源に投じ、再びこれを使用に堪えざらしめることによつて、戰ひを不可能ならしめる軍事目的は十分に達し得られたのである。[3]

これは確かに「觀念論的」戰爭哲學の私生兒であつて、頗る陰慘にして深刻な結果を、銃後の非戰鬪地域に及ぼすものである。しかるに近代戰爭にして武力同志の衝突それのみであり得ず、「國民能力の秤量戰」である限り、諸文化國間に展開せられるであらう非文化的文化戰——蓋し不可思議な表現であり、論理學上の形容矛盾を露呈すること甚しい言葉であるが、實現の可能性に富む爭ふべからざる「事實」であるから致方がない——に對する周到な防衛が、「隣組」その他の機構によりて綿密に考慮せられてあらねばならない。

飛行機による爆撃は、さなきだに一般荒廢を招來すること、他の兵器によるよりも、端的なものゝあることを忘れてはならぬ。更にデツサント部隊による「第五列」の活躍と神經戰爭「!」。近代戰は、こゝにそのプログラムを繰りひろげ、スケールを擴大して、非戰鬪的な項目までも數多吸攝し、包羅するに至つたのである。かくして文化的なものは、皆悉く擧げて非文化的な目的を達成する手段となつた。天使は、遂に惡魔と化身したのである。

わづか一日の長の認められる一强國の心的—物的諸裝置の總和が、論理的必然に、他國のそれを卷舒し、敵をして鬪志を解消せしめ、その殺戮本能を掘りかへし、平和を具現する第一級的功果を有つならば、平和的諸型態の下に整備せられよう心的—物的諸裝置は、また惡魔を轉じて天使に還らしめ、「非文化的」なる形容詞を抹削し、殺戮なき文化戰〔Kulturkampf〕として、人類文化史の伸展に寄與するに至る或物となり得るのである。

血腥き人道主義を揚棄するものは、より一層に高級な人道主義であらねばならぬ。これを東洋の言葉で表現せしめよ。八紘一宇の思想が即ちそれではないか〔!!〕。

1) Cf. L'Aerophile, Oct/1831.「商業飛行と長航路」と題する論文參照。

2) 昭和十五年十一月十六日『ニューヨーク・ポスト』紙が、「米國は實力を以て日本の進出を阻止すべきか」の問題を中心として對日政策討論會を開催したが、その席における元駐日大使キャッスルが、元亞細亞艦隊司令長官ヤーネルの露骨な對日政策に對抗して述べた言葉中の或る箇所に、この誇が引用せられてゐる。同十八日附都下の各朝刊新聞紙には、この所論の要旨が掲載せられてゐるが多くはこの箇所を省略してゐる。特に『報知新聞』十一月十八日附朝刊參照のこと。

3) フランス軍醫總監エル・ゼオルジュ「黴菌撒布器」と題する論稿參照。

Ⅱ「事變」は同じからざる伸展段階に到達して、それを秤量すべく、あまり甚しい間隔においてある國家同志の間に惹起せられるものである。

即ち低度文化國が、その領土内に設定せられた高度文化國の資本・經濟的諸施設を排除し、破壞しようがための武力行動に出で、高度文化國が、それの討伐に兵を派遣した時に起る葛藤を意味するのである。

たとへば滿洲事變・上海事變の如きは、その最も端的な實例である。これを低度文化國側より律すれば、全國擧げての本國戰爭と何等選ぶところはないであらうが、高度文化國側より見れば畢竟、植民地戰爭たるに過ぎないのである。〔但し今度の支那事變は、斷じてこれに與らないのである！〕。

高度文化國が低度文化國内に設置した文化的・經濟的諸施設は、高度文化國自身にとりて、更におなじ利害關係を享受する第三文化國側にとりても、價値ある或物であると同時に、低度文化國側としても、感佩しなければならない或物の存するに相異がないのである。

これ等は、いはゆる「特殊」權益の名もて呼ばれはすれ、そこに「特殊」ならずして極めて公的なる、そしてそれを機構する哲學は、極めてカント的な「世界市民」〔Weltbürger〕の理念と合流するものが認められてあらう。何となれば「特殊」權益は、世界文化史を伸展せしめ、或はこれを更始せしめるべき有力な契機となるからである。

それであるから「特殊權益」の名もて呼ばれてゐるものは、世界の文化史において少くとも肯定的のものであつて、それを機杼として、文化史的に價値ある何物かを展開せしめるであらう構成的因子を、多大のパーセンテージにおいて含有することは眞實である。しかるに低度文化國は、空疎にして排他的な「民族」の名においてそれを否定し、破壊することにおいて世界歴史の伸展に障碍を與へ、世界市民の理念とは對蹠し背反した民族主義の大旆をふりかざして立つ。

低度文化國民の肯定する最後のものは、現實的環境の推移と、現實的諸條件には眼を閉ぢ、たゞ空疎にして排他的な民族主義の前提を生かすにあらざれば、その民族主義を正認すべく、極めて抽象的な一構圖に過ぎない公正觀念（ジアスティス）のほかの何物でもあり得ないのである。

低度文化國即ち劣弱國の凭（もた）れかゝる唯一の壁は、それであるからしてノミナリズムの哲學であつて、絶えてレアリズムのそれでは有り得ないのである。——彼等はレアルに、何物をも有ち合はしてゐないから。

故にノミナリストは、いづれも空疎にして排他的な民族主義的動物であつて、その是認するものゝアルファは「世界歴史」の爆破であり、肯定するものゝオメガは「殺戮のための殺戮」でしかない。——それに隣れる高度文化國は、國境の彼方に企てられた世界歴史爆破の陰謀を根こそぎにあばき、陰慘極りなき殺戮のための殺戮意志を微開するに先立ちて芟除すべく、征討の軍をさし向けて聖戰を捲き起す。それは由々しい「事變」ではあるが、未だ「戰爭」ではない。そして征は「行つて人を正す」のである。

空疎にして排他的なる民族主義者が、戰爭手段として使用する青龍刀は、老子の哲學とともに共通のイデオロギーより蒸化せしめられたものである。老子は凶器を排斥すると同時に、人間力を盡して平和的・文化的施設にむかつて努力することをも是認してゐないのである。その本質はまさしくも「虚無」であり、經濟的・科學的・人間的のあらゆる營みに對する、まことに果敢な否定行爲において終始する。

虚無の哲學が根源となり、近代文化に對する嫉視と憎惡とが直接因子となつて働きかけ、高度文化國の在留非戰鬪員や婦女子に對し、まことに執拗な、陰慘な、そして無慈悲なゲリーラ戰が繰りひろげられるのである。

高度文化國が、その優秀な爆撃機を編隊し、跳員による青天霹靂的戰術の、ほんのプロローグだ

けを展開したのみなるに、低度文化國の首都は早くも深刻なカタストロフイに陷り、名狀すべからざる「カタクリズム」が、その社會層の各分野に捲き起されるに至るであらう。

德望の聞え高き教育家が、破廉恥罪の嫌疑を被むることあらば、それはほんの嫌疑であつてすら致命的打撃であるといはれてゐる。しかしながら市井の無頼漢にとりては、必ずしも左樣ではないのである。文化的諸裝置が體系化せられてゐる高度文化國にありては、その首都或は工業的核心に加へられた死の一撃は、遂に全體の倒潰を招來すること端的である。しかるに低度文化國にありては、これは當て嵌まらないのである。

低度文化國にありては、都會と、都會を連絡する鐵道等の中樞神經に死の一撃が加へられても、末梢神經は別箇の働きを營みて、その殺戮衝動の發揮を逞しくする。また「恐怖の働き」としても、その連絡機關の不完全なるよりして、高度文化國におけるがほど敏感ではあり得ないのである。こゝで高度文化國は、「敵に憎惡せられることは光榮である」[1]といへりしラテンの諺を眞理する

とともに「より良きものは、よきものゝ敵である」[2]といふたイタリーの格言を正認するであらう。何人も、この意味ふかき格言に包隱せられた歷史法則を看過してはならない。あらゆる事變といふ事變の酵母は、こゝに醞釀せしめられるのである〔！〕。高度文化國に對する嫉視と、それに觸發して擡頭する殺戮のための殺戮本能とに、血腥き「事變」の爆發點が準備せられてある〔！〕。「事變」において、高度文化國は低度文化國の民衆を憎惡する筈はないのである。これに反し低度文化國は高度文化國に依屬するあらゆる事物を嫉視し、憎惡する。

高度文化國同志の戰爭現象を、現象するに先立ちて解消する手段は何であつたか。それは國民の有つ物的—心的關係の總和であつた。——そしてそれが秤量の差が僅少であつた場合、早くも對手國の鬪志を挫折せしめ、これから起り得るであらう戰爭現象の酵母を、發芽に先立ちて枯死せしめ得るのであつた。

換言すればヒューマニズムに對する、より一層高度のヒューマニズムが、戰爭現象の具現を未然に解消し、若し解消することが不可能であつたならば、それの影響をミニマムに局限することが出來るのであつた。

これが「事變」の場合にありては、いさゝかその趣を異にするものがある。物的—心的總和の對比が、これを秤量すべく餘りに杆格が大きいのである。鬪志は神經束を缺き、無目的な殺戮意志は別々に働きかけてゐる。しかも國民の意識はヴェイルで擁蔽せられ、そこに現示せられた物的—心的總和の、餘りにも著大なる杆格を、現實に認識するの明をさへ有しない。

こゝで「事變」を解消する方法は何か。行つて人を正すにある。即ち聖戰である。相手を滅亡せしめるにあらず、相手の眼を塞ぐヴェイルを取り退け、蒙を啓いて、認識に喚醒せしめるにある。そしてその嫉妬を開解して道義に蘇生せしめ、殺戮のための殺戮本能を芟除して、こゝに輝かしい文化意識を植ゑ付けるにある。——八紘一宇の思想が[3]即ちそれではないか〔!〕。

物的—心總和の秤量より生ずる差が、絶對的のものにあらずして相對的のものであると考へられよう。そこで「戰爭」と「事變」との別も亦、絶對的のものにあらずして比較的のものである限り、「戰爭」と「事變」との別も亦、絶對的のものにあらずして相對的のものであると考へられよう。それを解消する最も根源的にして絶對的なものは、しかしながらたゞ一つあるのみ。——八紘一宇の思想が即ちそれではないか〔!〕。

八紘一宇の思想は、斷じて「ユートピイ」〔無秩序〕ではない。それは最も現實的な「トーピイ」〔秩序〕である。即ち未來永遠に亘り、東亞に「戰爭」と「事變」の酵母となるべき ∨status quo∧ 即ち「舊秩序」を解消し、以つて萬民を共榮に皈腹せしめるに足るべき新しき客觀的事物と發見はれ〳〵に課せられた民族的使命の發露であり、歷史的理性の顯現であり、また無上命令の胎動でもある。われ〳〵國民は物的不足より來る苦惱を克復し、この無上命令の下に八紘一宇の思想を具現しようがために戰つてゐるのである。聖なるかな、八紘一宇の民族的使命〔!〕。

1) hostis honori invidia.
2) il meglio é l'inimico del bene.
3) 『淮南子』に曰「九州之外、乃有二八殥一、八紘之外、乃有二八極一、注「紘、維也、維二絡天地一而爲二之表一、故曰レ紘也」。

戰爭と文化

The isles of Greece, the isles of Greece !
Where grew the arts of war and peace.——
——Byron.——

I　戰爭は文化を發達せしめるものであるか、それとも文化を破壞するものであるか。——かゝる論爭が、屢々人々の間に繰り返されてゐたことがある。そして常に、何等まとまつた結論に到達することが出來ず、水かけ論となつて終つてゐるのであつた。

わたくしは考へるのに、これは問題そのものがすでに誤つてゐるからである。換言すれば「文化」概念ないし「戰爭」概念に對する專門的研鑽が足りない結果なのである。一度この兩概念の中核に蹈み込んで、その本質

を明瞭にし得たならば、再びかゝる問題は生起しない筈であると思はれる。

叙述する便宜上、わたくしは結論を先に示すことゝしよう。この兩概念は決して範疇的に背反對蹠せるものではないのである。おなじ生きんとする人間活動の兩側面を示現するものにしか過ぎない。それだから「文化」と「戰爭」とは、密接不可分の關係を持續してゐるのである。卽ち或る種の「文化」——現狀を打破し、より一層に高級な「文化」を獲得しようがために、「戰爭」を手段とすると共に、「戰爭」を完遂し、光榮ある勝利の榮冠を獲得しようがためには、その準備〔軍の裝備・人的訓練等〕として、極めて高度の「文化」を必要とするのである。ヂアン・パウルのいふ通り、「戰爭は人道を强める燒鏝療治である」〔Der Krieg ist die stärkende Eisenkur der Menschheit〕と同時に、人道は戰爭を强める燒鏝療治であるともいひ得られよう。

故にわれ等は、古めかしい獨逸の戰爭聖化說や、或は東洋に發達した神武不殺の理論に考合するまでもなく、「文化」は「戰爭」を手段とすると同時に、「戰爭」は「文化」を手段として繰り伸べられることが肯定し得られるのである。われ等は「戰爭」なき「文化」なるものを考へることが出來ないと同樣、「文化」なき「戰爭」なるものゝ存在を知らないのである。——西漸しよう

とする彼斯の脅威下にありて、はじめて希臘アテーネの文化が勃興したのあり、また羅馬の兵器であつた戰車や弩は、その當時における羅馬文化の產物であつたことが知り得られる。

「文化」概念と「戰爭」概念とは、それであるからして本質的に相異なる何物でも有り得ないのである。——共に生存し、伸展しようとする「人間」概念の示現であり、從つて段階の差異にしか過ぎないことが分明するのである。

人間の生存欲・伸展欲が稀薄である時、換言すれば飽和充足せられてゐる際は、專ら「文化」概念が强調せられてゐるのも必然の結果であらう。——但しこの場合にありても、その飽和充足を確保し、外部よりの進攻に備へる意味で、「戰爭」概念が考慮せられずにはゐないのである。

これに反して、人間の生存欲・伸展欲が踰ゆべからざる障礙に打つかつた場合、「戰爭」概念が强く意識に浮んで來るのも、當然の歸局であらねばならない。——但しこの場合にありては、「戰爭」そのものが目的ではない。すくなくとも現狀より一歩すゝんだ環境に更始し、腐蝕した既成文化を脚下にふみにじり、より一層新しくして潑剌たる「文化」の創建を、目標とせるものであることはいふを俟たないのである。

「文化」概念は「戰爭」概念の懷より胎生すると同時に、「戰爭」概念は、また新しい「文化」概念を誕生せしめる苗床なのである。「文化」—「戰爭」—「文化」若しくは「戰爭」—「文化」—「戰爭」の序列によつて、人間の、ないしは民族の生存欲・伸展欲は巨歩を持ち運び、こゝに爭ふべからざる歷史法則を形づくるのである。

勿論、「文化」と「戰爭」の形式・質容は絕えず變化しつゝある。しかしながら兩者間には、常時、相互に背反對蹠せる現象を、單一の歷史法則に統一せしめようとする辯證法的統一の存在せることを錯認してはならない。——辯證法的統一は連續不斷の伸展過程に營爲し、その轉形を成就するに當つて片時も休憩したことはない。しかしながら「文化」と「戰爭」を、それ〴〵その時代に特殊なる本質卽ち生活樣式に結びつけ、これを統一に齎さうする辯證法的規約は、常に嚴守せられてゐるのである。

さて次に說き明かさねばならないことは、「文化」概念の內容である。「文化」概念は必ずしも「世界同胞」の理念と一致しないのである。——「世界同胞」の理念は、決して或る特定の「事實（エルヴイグニス）」

を指示するものではない。これは奔放な人間思惟が產したところの「種族概念」にしか過ぎないのである。したがつてそれは無差別にして抽象的のものであると考へれる。勿論、哲學者は思想經濟の立場から、個々を蟬脫して「人間」の、或は「國民」を超越した「世界市民」の理念を創作することはある。これはユダヤ人哲學者ヘルマン・コーエンの文化概念〔論理學的—倫理學的—美學的〕とおなじく、全く人間の純粹思惟より提起（エルツオイゲン）せられたものに外ならない。われ〳〵は殊に焦燥な環境の韻律に觸接し、純粹思惟の思辯に日を贐過するほど、うらゝかな氣持にはなり得られないのである。

「世界同胞」の思惟は、純粹思惟の私生兒である「人間」とか「世界市民」とかの理念に根底をおくものにしか過ぎない。テオドル・フキツシヤアには「全人（ガザムト・メルゾーン）」といふ概念があり、ウキルヘルム・ヴントには「全意志（ガザムト・ウキレン）」といふそれがある。これ等は、しかしながら個々の人格・意志を下部構造として發展せしめられたものであるからして、かの「世界同胞」なぞの理念とは、聊かたりとも契合すべき何物も認められないのである。

それで「文化」概念は、必ず特定の個々を機軸として展開せしめられた「一度限り（アインマーリグ）」の出來事に立脚するものであらねばならぬ。世界歷史は、この「一度度り」の出來事の列次であり、またこの連鎖によつて統べられた「事實（エルアイグニス）」の連續であらねばならぬ。

さてこの「一度度り」の「諸事實」は、それ〳〵その時代における「價値」を示現してゐるのである。それ〳〵その時代の「價値」は、同時にそれ〳〵その時代における「質容」を決定し來るものである。われ〳〵は、如何にしても希臘文化さながらの具現を中世に、近世に、はた現代に見ることが出來ない。またわれ〳〵は、如何にしても德川封建期にありて價値を繫ぎ得たものを、教說はいはずもがな、路傍の石塊に至るまで、これを今日に延耀することは出來ないのである。

「文化」概念は價値を「質容」とすると同時に、これを「形式」に表現し、その時代々々に特殊なる「型（ティープ）」を示現する。「質容が充實すればするほど、形式はます〳〵完全なものとなる」であらう。文藝復興は辭義（リテラル・センス）通りの意味における希臘文化の反覆ではない。それは伸やびかな伊太利の碧空の下に甦生せしめられた希臘文化であつて、むかしながらの希臘文化ではないのである。わが國にありても復古の潮流に便乘し、今日現代の「型」に卽しない封建的事物を墳墓より拾ひ

來つゝ、これを今日に強要するさへ無反省なるに、すゝんで現代の「形式」を改變し、歪曲した「型」をでつち上げようと焦慮する呆氣者（うつけもの）がありとすれば、それこそ現代の價値否認（ウニルト・ウオドリヴ）の亞流に墮するものであつて、嗤ふべき時代錯誤を提露せるものにあらずして何であらう。

さて「文化」概念の「質容」が、「一度限り」のものである限り、それを表現する「形式」も亦「一度限り」のものであることが斷定し得られるのである。――しかるにこゝに由々しき問題は自然科學との關係である。バーデン學派〔ヴキンデルバンド、リツケルト〕は、「文化」概念と自然科學概念とを對立せしめ、兩者の關係を說明すべく、ライプニツツ以來の傳統的觀念である「先立平行（プラスタビリーレンダハーモニイ）」の理念を生かし來るより外に、執るべき途とては見出し得なかつたのである。「先立平行」といふ言葉は、頗る便利なものであり、文化科學と自然科學との關係を、ア・プリオリに片付けて畢ひ、もはやこれ以上考察するの勞苦をさへ省略せしめるに足るほどの利益がある。われ等は、しかしながらこれで休止符を打つ譯にはゆかないのである。自然科學の法則は「一度限り」にはあらずして「繰り返し」である。そこで文化科學は、自然科學の內容に價値概念〔目的―統制―新しき研究方向に對する指標即ち「國策」〕を送り込むとおなじやうに、自然科學は文化科學の形式に、その時代々々の段階に到達した技術を附與するのである。これは斷じて觀念の「密輸」ではない。

われ〳〵現代の生活樣式即ち「形式」は、現代の生產樣式直接の示現であり、またその直接の示現であらねばならないのである。即ち現段階に到達した科學的伸展が、延いてわれ〳〵の「型」を決定するのであつて、藝術をはじめ、われ〳〵が現代に有ち合はしてゐるもろ〳〵の文化財について見ても皆おなじことがいひ得られるのである。――したがつてわれ等の文化概念の質容は「一度限り」の「價値」を示現してゐても、それを表現して時代の「型」を形作らしめる「形式」の一部においては、やはり自然科學概念の樣式である「繰り返し」に肖似した何物かゞ、未だ揚棄せられないまゝで殘存することがある。

これは殊に、自然科學の直接影響を受けること多き戰爭技術において、特にその然るを見るのである。希臘・羅馬の兵器であつた戰車（チアリオット）は數頭の馬に曳かせたものであつたが、そのアイデアは今日に至るまでも揚棄せられるに至らず、動力と鋼鐵を以つて、現代戰の尤物となつて再現せしめられてゐるのである。また海戰にありても、古來、「希臘の火」として恐れられてゐたものは

中世紀以來の「火船（ブリュロウ）」となり、轉じて現代の驅逐艦以下のカテゴリイに屬せしめられる小艦艇の奇襲戰術を行ふ機能と化してゐる。中古以來、歐洲の海上を「疾走」した海賊ないし海賊を掃滅することを目的とした「コルセイア」は、今日の高速度を誇る輕快巡洋艦以下、いはゆる奇襲艦（ライダ）艇の理念に連鎖を繋ぎ、また飛行機射出器は、往古の兵器であつた弩機であつて、「カタパルト」といふ名稱そのものまでも、これを今日に傳承してゐるのである。

更に曩の歐洲大戰において、おそるべきヒンデンブルグ作戰が行はれ、密集部隊を以つてする壯烈極りなき敵陣突破が試みられたが、これは古いプロシア以來の戰術と目せられるものであつた。それが今日のドウエテイズム理論となつて再現してはゐないか。——即ち「人間の怒濤」に代へるに「爆撃機の怒濤」を以つてしたに過ぎないのである。ド・レスケーユのいふ通り、ドウーエ將軍は兵力の經濟といふことを念頭におかず、また爆撃による恐怖は、さも無際限でもあるかのやうに誤信した結果、その戰術も、畢竟、現實に卽しない詩的のものになり畢せたかのやうな感がある。しかしそれはとも角、われ等は「若い土耳古主義」は何時の時代にも甦り來り、マケドニア人の長槍は、いづれの民族をも魅了して止まないであらうことを知るのである。——しかしこれは「形式」の問題のみ。それの「質容」はとこしへに一度限りであり、その「型」は永遠に尖新を競ふて底止するところを知らないのである。

「文化」概念を目して物質の刻印にしか過ぎないとが出來ないのである。「文化」概念より「價値」に當り、不注意にも赤子までも流して了ふの亞流であると知らねばならぬ。しかしながら物體關係は、「文化」概念が內包する「形式」の一部に刻印を投げかけ、これが機抒となつて「文化」の「型」全體を織成し、さも物體そのものゝ刻印でもあるかのやうに、轉形せしめられることも有り得るに相違がない。こゝに獨立して自律的な「價値」概念との葛藤が惹起せられるであらうけれども、この「形式」と「質容」間にも辯證法的統一の作用が働きかけ、「形式」が「質容」を陶鑄して畢ふか、逆に「質容」が「形式」を決定し畢せるかして、こゝに葛藤なき「全體」となつて示現する。

しかも「全體」は決して靜的な狀態において停滯すること、腐水のやうなものではあり得ないのである。それは既述の如く平和→戰爭—平和か、或は戰爭—平和—戰爭の過程において、絕え

ず舊き體系を打破して新しき體系の創建に向つて、伸展の行歩をすゝめる近代理論の立場より觀察すれば、近代國家の「文化」概念は除外例なく、平和と戰爭の「伸展過程(エクイリブリユーム・イン・フラックス)における均衡」狀態において成立してゐるのである。これは金輪際、武裝平和でもなければ平和武裝でもない。戰爭＝平和の、極めてデリケートな復合的機構としての「文化」概念に外ならぬのである。

こゝに一言附加せねばならないことは、「文化」概念の兩極端——即ち「形式」「質容」の對立において「形式」は物體關係の影響を受けること極めて敏感であり、また機械主義(メカニズム)の法則に從ふこと頗る從順なものゝあることも、時としては是認し得られるのである。故に「形式」は民族毎に「質容」におけるがほど差別性の設けられない事實も當然のことに屬するであらう。〔Aといふ國民は綠茶を撰り、Bといふ國民は紅茶を喫す。——けれども「アルカロイド」性であることは共通である。〕故に自然科學は國際的に規約し得られる可能性がらうけれども、その「質容」をなす國民性に至つては、斷乎としてその國民に獨自なる特質を發揚するであらう、平和—戰爭—平和或は戰爭—平和—戰爭の伸展段階において、その民族の「形式」的方面は、常に戰爭及び平和の營みを爲すに際し、必須不可缺の手段とはなるのである。「形式」〔物體的—技術的〕は、數字によつて測定し得られる部門なのである。平和及び戰爭の營みにおいて、この「形式」部門が如何に重大な役割を果すかは、こゝに事新しくいふを俟たないのである。しかしながら數字の奥で物をいひ、數字をして數字以上の能率を發揚せしめるものは、依然として「質容」であらねばならない。國民性を——即ち「質容」を缺如した數字は、畢竟するにかのメツシナ海峽に現はれるといふ「フアータ・モルガーナ」即ち蜃氣樓にしか過ぎないのである。とはいふものゝ國民性が、數字をして數字以上の能率を發揮せしめるのは、極めて微量の限度内においてゞあることをも忘れてはならない。これを忘却し、おろかしくも國民性を以つて數字の大部分を補塡し得ると考へるものあらば、それは非常な危機に提露せられてゐることを銘記せよ〔！〕。「形式」と「質容」、數字と國民性との對立は、愼密不可分の關係において持續せられてあるとはいひ條、それ〳〵異種性(ヘテロゲニイ)のものに屬し、果すに別々の機能を以つてし、決して相互に代換することの不可能な、それに獨自の本質を具有してゐるのである〔！〕。

「文化」概念は、またその民族に屬する個人々々によつて支撐せられてゐるとはいへ、必ず個人

個人の意志そのものとしては表現せられないのである。個々の quantum sum——即ち「蒐積」として表現せられるものであつて、フキツシヤアのいはゆる「全人」若しくは「種族我（ガットウングスエゴウ）」として完成せられるのである。「種族」はあくまでも單位であり、それを超越するところの「抽象我」は、畢竟、それに醇化せられない「個人我」とおなじく、共に「文化」概念の限界外に排除せられて畢ふのである。

Ⅱ　わたくしは前項において「文化」と「戰爭」とは、おなじく生きんがためにする人間活動の、兩側面であることを示現するものであつて、共に段階上の相異にしか過ぎず、毫もその間、本質上の差別のあり得ない事由を說明した。そしてわたくしは、「文化」及び「戰爭」概念の樣式につき若干、方法論的の說明を附加しておいた筈である。

この項においては竿頭一步を推しすゝめ、「文化」及び「戰爭」諸概念の母胎である「人間性」の——特にその感性・悟性の各本質に突き込んで、哲學的の考察を試みるであろう。この本質的考察を等閑に附して、「文化」「戰爭」兩概念の本質を知悉しようと欲するのは、さながら木に緣つて魚を求めるの流亞であらう。

われ等の想ひ出は二十五年前に遡上る。即ち一九一六年、曩の歐洲大戰に際し、獨逸は佛蘭西に向つて戰ひを宣し、進攻の途をベルギイ國に藉らんと要求したところ、その拒絕に會つたので怒濤の如き大軍はベルギイの中立を侵犯し、ついで隣國のルクセンバーグも同一の運命に捲き込まれ、ひとしく獨逸第一及び第二軍の鐵脚下に、蹂みにじられるの結果となつた。

獨逸が叙上の中立侵犯や、また占領地域内における數々の破壞的行爲が、曩々たる協商諸國側の否難を招致したのであるが、この時獨逸の軍當局者の辯明は、たゞ「これは戰爭（クリーグ）である」の一言に盡きてゐたのであつた。——いふまでもなくこの一言は「戰爭中、一切の法律は沈默する」といふラテンの諺を、それとなく示唆し得て餘りあるものであつた。

更にこれを哲學的に解釋すれば、一切の法律の支撐せるものは、未だ經驗的價値たるに止まるものである。戰爭によつてこれを沈默せしめることは、即ちエミール・ラスク——この難解なる哲學者自身も、西部戰線において戰死を遂げてゐる——の所謂「絕對價値」なるものゝ顯現を意味し、「法律に先立つ實體」に還元することであつた。それは即ち「立て直し」である。換言すれば舊體制を揚棄して、新體制を創始することに外ならぬ。それが如何なるものであつたかは別問

題として、少くとも獨逸帝國の企圖したものは、歐洲といふ地域限りに、獨逸「ヘゲモニイ」を機軸とする新體制を、樹立しようと焦慮したものに外ならなかつた。

「凡ての上に獨逸（ドイツチランド・イバア・アーレス）」といふ歌があつたが、獨逸軍は「詩歌で敎しえられたことを、苦難を以つて實行しよう」と試みたのである。戰爭は否定原理であることにおいて、より一層高級の肯定原理であり、それであるからして戰爭は、人文の悉くを更始せしめるに足る超絶原理であると信じたのである。誰かこゝに、プロシアに傳統せるモルトケの戰爭聖化說の投影を見落したであらう。われ／＼は今こゝで、事新しくトライチユケやベルンハーディの著作に考合する必要を認めないであらう。チユートン民族はその理論を通じて、同民族が、既往においてかくありし「事實」を指摘すると同時に、將來においてかくあらねばならぬ「規範」を啓示してゐるのであつた。この民族の「文化」及び「戰爭」概念は、つねに「有り（ザイン）―有らねばならぬ（ゾルレンデス）」存在形式において成立してゐる。

「有り―有らねばならぬ」存在形式には、方法論上、相容れないところの葛藤が內包せられてゐよう。「有り」の世界は「現實」のそれであり、物體關係の影響を受けること極めて端的なものがある。しかしながら、物體關係の中核に蹈み込み、現實に觸接することが深くなればなるほど論者の一部には「全く新しき內容」を創始しようと努力し、また他の一部には「新しき形式」を發見して、古き內容を韜晦しようと焦慮するものが認められる。――「新しき形式」とはいへ、古き酒を新しい革囊に盛つたのでは、完全な無意味といはねばならぬ。新しい囊に盛るのには、須らく、新しい酒を以つてすべしである。この新しい酒卽ち「全く新しい內容」を獲得することはたとへ現實に卽してゐても、現實の拘束よりは蟬脫したところの別箇の機能に俟たねばならぬ。それは卽ち人間の「理性」である。

さりながら人間の「理性」が孕み來るところの「全く新しい內容」は、必ずしも春の陽光の如く、うらゝかなものとのみ思ふてはならぬ。それは文化的（平和的）のものでもあれば、極めて「戰爭的」のものでもある。――この志向はケーニヒスブルグの哲人カントにおいて、明晰に指摘し得られたところのものであつた。

今時、たゞ現實――その「現實」は極めて狹隘なものであつた――より歸納したジヤン・ホツブスの「萬人皆敵」の說より、戰爭哲學の體系（システム）を樹立し來らうと欲する人は、おそらく有り得な

いであらう。人間は必ずしもラ・メトリイのいふ「機械人（オンム・マシーン）」では有り得ないのである。これを一片のパンに譬喩したなら、少くともバタのついてゐる方は、カントのいふ「理性的動物（フェヌンテイゲ・テイエル）」であらねばならない。勿論、バタがついてゐなくても食べられると同様、「理性」が缺如してゐても人間は生存してゆけるのである。されどその生存は甚だ無目的なものであり、人間に獨自とするところの價値を繋ぎ得ない、極めて索然たるものにしか過ぎぬ。文化人は、かゝる生活に片時も堪え得られるものではないのである。

「人間は思辨する蘆荻である」であると說いたパスカルは、あまりにも謙讓である。よしんばそれほどではなくとも、少くとも人間は先驗的綜合判斷の所作によつて、物事を「理性する」動物であると考へられて然るべきであらう〔！〕。われ〳〵はこゝで、かうした形而上學的・認識論的の思議に耽る餘裕は有ち合はしてゐないけれども、「人間性」そのものに內包せられた動物性—人間性は、それ〳〵存立の意義と目的と、そして樣式とを異にせる兩極端であり、同時に辯證法的統一を成就しもて、より一層高級な「人間性」の實現に志向しつゝあることを許容せねばならない。

さて「人間性」に內包せられる動物性は、無目的—沒批判的な領域であるからして、他の個々や環境との間に絕えざる摩擦が繰返されてゐる。卽ち爭鬪 per se が、それの存在樣式の唯一なるものである。——ホツプス、マンデヴイーユ、シユテイルネル、ダアウヰン、スペンサア及びヘツケル等一系列の哲學者群は、專らかうした「人間性」の半面卽ち動物性をのみ凝視して考察せられたのであつた。

こゝで問題とすべきは、「人間性」の他の半面卽ち理性は、この動物性の質容を果して轉形せしめ得るであらうか。人間にして若し動物性と理性との復合體であるとするならば、動物性本然の爭鬪樣式は、果して如何なる志向において轉換せしめ得るであらうか。或は爭鬪を對角線的に背反せる文化概念に變改せしめ得るであらうか。それとも戰爭概念をして、いやが上にも深刻化せしめるであらうか。

これはカントすらも明答を與へ得なかつた由々しい問題である。彼は一七八八年の著作『實踐理性批判』及び一七九〇年の著作『判斷力批判』を公にし、前者では「義務感」と「崇敬の情」を、後者では「合目的判斷力」と「美學的判斷」を考察したけれども、これ等は畢竟、われ〳〵

人間の判斷に必然とするそれ〳〵措定（ポステュラート）の質的區別を明示したまで〳〵あつて、これが實際上社會科學的に、如何なる所作と影響を及ぼし得るかについては、何等徹底した考察とても見出されてゐなかつたのである。

しかるところ、カントは一七九六年となり、その前年に公にした『永遠の平和』の補遺として『ベルリン月刊雜誌』に發表する小論文において、下のやうな趣旨のことを布陣してゐるのである。卽ち——

「いま人類をして、凡ての他の動物より挺出せしめるところの自個意識の特質——それに依つて人類が理性的動物たり得べきもの〔また意識の統一に據りて、理性的動物に、精靈が附與せられ得る〕——より觀察して、こゝに一つの關聯（ハング）がある。卽ちこの能力〔自個意識〕を以つて、理性づける（ファルン）所作の役割を成さしめるのである。ついで方法的に、卽ちたゞ概念を通して、理性づける——いはゞ哲學づけるのである。こゝでまた、その哲學化（フィロゾフィーレン）に據つて、他のそれと摩擦を來して討論的となり卽ち討議となる。されど討議的なものは、自分の哲學のために戰ふべき效果なくしては、効發しないのである。それは最後に、團體相互に〔學派が學派へ、恰も一軍隊が一軍隊へ〕結合し、公然たる戰爭を持續する……」と。

右の引證における「理性づける（フェルヌンフテルン）」こと sive「討論すること（デイスビュティーレン）」であり、「哲學すること」「討議すること」及び「公然たる戰爭を持續すること」等は、いづれも同一意義に繫がるシノニムにしか過ぎないことが、こゝに知り得られるであらう。〔たとへ「公然たる戰爭を持續」することは理論鬪爭の意味なるにせよ〕。

わたくしは前に、文化と戰爭は、生きんがためにする人間活動の兩側面で、共に段階上の相異にしか過ぎないことをいふたが、現代の一國家と一國家若しくは一民族と一民族との間に展開せられる戰爭現象は、常に國家總力戰であり、直接、軍に關與しない平和的諸部門に至るまで、こぞつて牽挽せられ、戰爭に馳せ參じ、それ〳〵その部門において、戰爭目的の完遂に向つて努力のマキシマムを拂ふのである。——これを爲す國家は勝ち、然らずして國家の各部門が、精神錯亂せる狂者の如く、別々の目標に志向したが最後、敗戰の宿命は立ちどころに殺到するのである〔11〕。

勿論カントの「理性づける」こと sive「討論すること」が、「公然たる戰爭を持續する」こと

に結びつけられてゐることは、現代の思想宣傳戰の理論に施して、適切なるものが認められてゐるであらう。されどわたくしが、わたくしの戰爭哲學を樹立するために、カントの、かうした言葉を引證するのは、たゞに思想宣傳戰にのみ局限せられた一理論を說明しようがためではない――わたくしは冒頭において、平和と戰爭とに本質的差別を認容してはゐず、ともに生きんがための人間活動の兩側面であり、段階上の相異にしか過ぎないことを、明言してゐる事實を想起せられたい。

勿論カントの「公然たる戰爭を持續する」ことは、理論鬪爭の意義に解釋せられて然るべきものである。――しかしながら現代の意識において、イデオロギーはさながら日月を繞る暈のやうなものであつて、その核心に、炳乎たる大物を包隱するであらう。戰ひの雲は、その奥に、戰車の姿と、天鼓の響とを秘めかくしてゐるのではなかつたか〔！〕。

批判すること、討論することは、畢竟戰爭することに外ならず、その間、何等本質的の差別とても見出されてゐない。畢竟、それは段階上の相異にしか過ぎないことを知るのである。しかもこれ等の所作〔批判すること―討論すること―戰爭すること〕にして、われ等の有つ實踐理性そのものに本然な、先驗的に必然な作用であるとするならば、戰爭は「合理的（ゲセツツメーシヒ）に、しかしながら超論理的（ロギツシエ）に」可能なる人間活動の全部であるといひ得られよう〔！〕。

「理性」は批判し、討議し、絕えざる鬪爭を展開するのみならず、M・ラフアエルに從へば、理性は、實踐的に未だ獲得し得ない「セクト」〔領域〕に對して、想像を通じ、それの確把を豫想するものである。――して見ると「理性」そのものは、如何なる意義においても、未だそれに屬しない外界を併合しようがための、戰爭現象を孕み來る母胎と考へて然るべきであらう。

戰爭は、人性深奥なるところに「支撐（プロツペン）せられ」たところの、內的價値である。客觀的壓力の如何によつて、文化・戰爭のいづれかに具現し、文化戰爭（クルツールカンプ）となり、或は武力戰爭となつて發揚せられるであらうけれども。

して見るとわれ〳〵は、むしろ戰はんがために生れ、更に鬪ひを理性化しようがために――しかり、その鬪ひに意義と目的を附與しようがために、哲學するのではなかつたか。

カントの引用するケストネルの詩にいはく、

とこしへに戰爭は避け得らるべきなり、
人若し賢人の云へりしところに從はんには。
かくて全人類は平和を享受せん。
たゞひとり哲學者のみは然らず。

と。——けれどもこの詩の初めの二行には由々しい誤謬が內包せられてゐる。借問す、賢人は果して、われ等に何事を敎しえたであらうか。彼の敎しえたところとても、畢竟するに理性化ずることsive 爭鬪することの外の何事でもあり得なかつたのである。よしんば民族が戈を收めることがあつても、哲學者は依然として血腥き構思を以つて、また新しい戰爭の序曲(プロローグ)を奏してゐるのではないか〔!〕。

前にも述べたやうに、爭鬪 pen se は人間の動物性に職由するものである。理性はこの動物本能を根こそぎに芟除することは不可能であるけれども、少くともこの動物本能を轉形せしめ、それに目的と意義とを附與することは御手のものであらう。——いひ換ふれば爭鬪より、per se の

形容詞を抹削し、より一層汎大な領域に、爭鬪現象を從屬せしめるの機能を果すであらう。

カントは、このより一層汎大なる領域において、「目的(ツヴェック)」を措定し——飽くまでも措定(ポステュラート)であつて、斷じて事實(エルゲイグニス)ではない——それを「永遠平和」と呼んでゐる。彼は「永遠の平和に」を書いたのである。しようがために、一七九五年、七十一歲の老軀に鞭打つて、『永遠の平和に』を書いたのである。

カントは「殺戮者と被殺戮者とが平衡狀態を維持すべきこと」をいひ、ついで「諸國家相互の、この一點〔永遠平和〕における協商は、決して一國家の命令によるものであつてはならぬ。專ら普遍的な〔道德的に法則づけられた〕人間理性による義務に基づくものである」といふてゐる。——されど人間理性は、決してのどかなものでなかつた筈ではないか。それは批判を命じ、ついで討論を招致し、最後に戰爭を思念せしめてゐるのである。

こゝに引用の暇はないけれども、カントには屢々、戰爭の禮讚說さへもが見出されてゐるのである。彼は「永遠の平和」を說く心算で、事實、永遠の鬪爭を說いてゐるのではないか。

カントは、その永遠の平和を確保すべき機能として、國民(フェルケルブンド)の結合なるものを考へ、國民國家(フェルケルシュタート)を以つて、この目的に背反するものとなした。これはカント自身の認めてゐる通り「事實」ではな

いのである。――さればといふて「想像」でもない。これは「不文律の必然的完成」であり、哲學上の「ポステュラート」に屬するものである。この「ポステュラート」に肖似したものが、曩の世界大戰の直後に出來た國際聯盟であるが、この國際聯盟なるものが如何なる道向を辿つたかは、こゝに呶々するまでもなく、すでに讀者各位の知悉して居られるところである。

國民・民族を超越したところの、無差別な「結合」なるものは、特に現下の環境において、考へ得られよう筈はないのである。「ポステュラートは先驗的所與であつて、それの可能性については何等の說明も下し得られない。〔同時にまた何等の證明も〕。人々は『事實（ザッヘン）』も、或は一般に或る對象の『存在（ダーザイン）』も措定（ポステュリーレン）することは出來ない。たゞ格率（マキシミ）〔主體の行動の律則（レーグル）〕をのみ措定することが出來る……。」

さりながらこれは、極めて抽象的にして現實の世界に施すことは不可能であらう。われ〳〵には、前項で述べた通り、世界同胞とか國民〔異種性に屬する〕の結合とかの理念より、むしろ「種族我」としての意識の方が、少くとも、より一層に强く働きかけて來るのである。われ〳〵は、かうした「ポステュラート」に立脚する抽象觀念に侵浸し畢せる前に、國民・民族としての意識は、壓倒的に擡頭し來るであらう。

世界市民として感ずる義務は、依然として「命令」であるに相異がない。さりながら國民・民族として感ずるそれこそ、むしろ「無上命令」であらねばならない。

さてカントもいふ通り、世界法にはあらざる國「民法の觀念は、相隣れる民族相互の分離を豫想する。同時に、かゝる狀態は、それ自身すでに戰爭の狀態である」と。――カントは、しかしながら世界支配の一權力下に、それ〳〵の民族を併合し去るよりも、むしろかうした戰爭狀態を是としたのである〔！〕。

古來、世界支配（ウニヴェルザルモナルヒイ）を夢想し、無告の人民をして居を溝壑に轉ぜしめた人はかず〳〵あらう。ジユリアス・シーザア、ナポレオン・ボナパルトしかり、カイザアまた然りであつた。されど以上一系列の人々の企圖した世界制覇は、一に武力に據るそれである。それにも增して始末に惡いのはアングロ・サクソン民族が、世界貿易及び金融資本に基づく世界制覇の念願であつた。

この念願は、カントの思惟した「ポステュラート」ではなく、現實の壓力となつて、世界の弱小民族の身邊にまで殺到し、居を溝壑に轉ぜしめる代りに、身を顚落して奴隷に墮せしめたので

あつた。

居を溝壑に轉ずるより、そして身を奴隷に墮せしめるより、誰か戰爭を是としないものがあらう。――この一點に關する限り、カントの提說は肯綮に當つてゐるのである〔！〕

前にも述べておいたが、戰爭はア・プリオリの無上命令である。少くとも「種族我」の主體における實踐理性の發動である！

「歷史が劇的特質を演ずる危機〔戰爭〕に際會した時、舞臺の主演俳優は、明確にエマーソンのいふ代表的人物の役割を果すであらう。――この代表的人物の言語及び動作は、無名の大衆の動向と感情を表現するであらう。そしてその代表的人物こそは、集合的意慾（コレクティブ・ヴォリション）の個人的機能である。」と、レヴィ―ブリュールはいふてゐる。

戰爭の主體は個人ではない。「種族我」にあらされば「集合的意慾」である。否、それの內部に發動したる實踐理性の無上命令である〔！〕。

しかしながら實踐理性の發動を示唆する彈機は、客觀的の物體關係である。客觀的の物體關係〔經濟關係〕における摩擦が、こゝに戰爭といふなる實踐理性の無上命令を發動せしめる彈機とはなる。――彈機そのものが、直ちに戰爭現象を孕み出すのではない。

ア・プリオリの根源を見究めることは不可能であるからして常に「ミスティーク」の衣裳をまとひて現象する。――モルトケ將軍の「戰爭聖化說」は、或は獨逸人に特種な、かうした思議から出發したものであるかも知れない。

戰爭の目的・意義等は、畢竟するに後驗的のものにしか過ぎない。曩の歐洲大戰の口火が切られ米大統領ウヰルソン、英首相ロイド・ジョージ及び獨首相ヘルトリングの間に交換せられた理論鬪爭の如きこれであつて、おなじやうな論爭が、ヴエルサイユ條約締結後、十年も經て蒸し返されてゐたのである。

人間の理性は、おもしろいものである。自ら「戰爭」現象を孕み出し、更にそれを先驗的所與として、批判の對象に擬してゐるのである。――されど、それは無益であらう。障壁が、そこにある。そして障壁の彼方には、「ミスティーク」なものが渾焉として渦卷てゐる〔！〕。

カントの眼鏡より觀じた世界歷史は、「理性の顯現史」であつたとすれば、日本の歷史は肇國以來、八紘一宇といふ「民族的使命の達成史」に外ならなかつたのである。幾多の障礙があり、假眠狀態にあつたこともあらう〔例へば德川封建時代！〕。しかるに今度、東亞に展開せられた客觀的事態は、常にこの民族にとりての先驗的所與であり、また實踐理性の無上命令である「八紘一宇」の理念をして、燦爛として輝かしめる彈機とはなつた〔！〕。

民族的使命の達成せられる段階毎に、わが民族の一飛躍が約束せられてある。——戰爭は、「民族的飛躍を基礎づける」とはリンドネルの說。

戰爭と民族

「空疎にして排他的な民族主義」的民族の働かし出す戰爭は、畢竟、戰爭のための戰爭であり、殺戮のための殺戮であつたからして、初發より、明瞭な戰爭目標の存在を證示すべき何ものも有り得よう筈はなかつたのである。

成吉思汗、それに『ニーベルンゲン』の詩に歌はれてゐるフン王アツテイラ[1]に見る侵略戰爭の如きそれの範例であつて、古人はこれを「兵を貪る」行爲となし、彈呵して止まなかつたのであつた。空疎にして排他的な諸民族は——その多くは劣弱國として、他の强大な資本主義國家の植民地〔インド〕若しくは半植民地〔蔣政權下にあつた舊支那〕と成り畢せてゐる——おろかしくもアツチラ以下一系列の群雄が、支撑しつゞけてゐた古色蒼然たる戰爭哲學を、現代にまで延燒して殺戮・侵略の詩歌を詠じ、せめてもの慰藉を追求して止まないのも心理的必然であつて、怪しむには足りないのである。

彼等の現實生活は、四隣にめぐらす強大な資本主義國家群の政治的—經濟的—文化的壓迫の桎梏下に苦悶する。彼等は「詩歌で教へられたことを、苦悶を克復して實現する」べく、その形而上學的・形而下的能力がまた餘りに貧弱であり過ぎた。所詮彼等の執るべき術は、たゞこれを倒逆して、「苦悶を克復することが出來ないから詩歌を詠じて自ら慰む」ことのほか、執るべき手段とても見出し得ないのであつた。——そして彼等は、その持ち合はしてゐる古典の文句を引證し、或は神話に假託して、實行せられる可能性の決してないスローガンのいろ〳〵を擧示し、自ら陶醉して短かい日を消してゆく。

そうすることによつて、彼等は資本のかゝらぬ民族主義的「美學」を描寫し、彼等の陰慘な、正視すべく餘りに陰慘な日常生活を想像化し、以つて劣弱國民としての悲痛な現實生活を美化しようと焦悶する。

彼等は、畢竟「現實」を內包しないイデオロギーそれのみの囚虜である。卽ちノミナリストである。——「イデオロギー」と「ノミナル」は何物を孕み來るであらうか。それは戰爭のための戰爭であり、殺戮のための殺戮でしかない〔！〕。

觀念型態は、つねに血腥きものゝ母胎である。

1) この歌に出て來る Atli, King of the Huns 卽ちこれである。

古いゾヴィエート理論[2]を以つてすれば、≫Die wahren Ziele des räuberischen Krieges müssen, kostes, was es wolle, ein Geheimnis für alle Völker, für den unaufgeklärten Pöbel bleiben.≪といはれてゐる。これは、しかしながら成吉思汗・アツチラ一系列の、無目的な侵略戰爭についてのみ該當する戰爭理論であつて、近世における文化國同志の間に勃發した如何なる戰爭現象について見ても、當て嵌まるべき何物もそこに見出し得ないのである。

佛蘭西の俚諺にいふ如く、「貪慾な親に放蕩兒あり」、無目的な侵略に關する限り、「戰爭は戰爭を育成する」〔Der Krieg ernährt den Krieg〕といふた詩人シラアの言葉が、痛切に想ひ合はせられるのである。

この種の「奪掠戰爭」は大阪の儒松井輝星[3]のいはゆる「貪兵」といふ行爲についてのみいひ得

られる理論なのであつた。――何となれば「侵略戰爭」は、たとへば成吉思汗なりアツテイラなりの一個人にのみ、むら〳〵と蒸成したところの「無」文化的物慾から胎動しかけるものであるからして、「空疎にして排他的な民族主義」的段階にだも到達してゐないのである。かうした戰爭の目的が、一般民衆〔奴隷〕の理解に入らざるはおろか、成吉思汗・アツテイラ自身でさへも時としては五里霧中に迷ふのである。一般民衆〔奴隷〕は、たゞこれ等「黑き心」の覇者の鞭笞の下に、苦役としての戰爭行爲に從事せしめられるのみ、覇者の意志については、何等の理解も共鳴も、こゝに繫ぎ得ないのは當然のことに屬しよう。

これが賃銀勞働としての戰爭行爲と進化しても、依然として、同じことがいひ得られるのである。事變前、蔣介石の麾下に動めいた無教養な兵士・土匪及び便衣隊どもは、將領連の意志目的について何等理解することはいはずもがな、忖度することさへ出來なかつたのと同樣である。――たゞ抗日といふ破壞的にして病的な信仰のほかは。

これに對比して、大陸及び海洋に戰ふわが陸海の兵士達にして、公明正大なること、天地に俯仰して恥ぢぬ日本の使命を體認してゐないものが果して有り得るか。日本兵によつて驅使せられる限り、軍犬・軍馬は勿論のこと、自動車・艦艇及び飛行機等の無機物に至るまでも「生命」が吹き込まれ、日本の使命を具現する一機構と有機化し、明喨な戰爭目標にむかつて、一糸紊れない全體的行歩を果敢に展開するのである〔!〕。

日本は非文化的國家ではない。故に獨裁者や覇者や必要を認めないのである。――叡智はひろく都市・農村の隅々にまで普及し、大衆擧げて文化人であるといふ顯著な事實を看過してはならない。大衆はその文化を蒐積し、その叡智を綜合し、東亞に新秩序を創建し、八紘を一宇に維絡（つな）ぐべく、こゝに世にも聖的な戰爭行爲に從事してゐるのである〔!〕。

2) 〉Krieg und Frieden〈 31 Januar, 1917 von G. Zinoviev. Gegen den Strom S. 367-70.

3) 『神武不殺篇』日本經濟叢書第十九卷所收。第三册「武德止戈章」において、神武不殺に基づく東洋の戰爭哲學が雄辯に說かれ、こゝに〉Bellum ita suscipiatur, nihil aliud nisi pax quaestia videatur.〈〔戰爭は平和を目的とする以外に行ふべきものにあらず〕といふたシセロの說と符合するものが見出されてゐる。輝星は、まづ「兵を修むる」ことゝ「兵を好む」ことゝを峻別し、神武不殺の理は、たゞ兵を修むることにおいて顯現することなし、貪兵若しくは黷武の惡德は、兵を好

むより生起すると考へてゐる〔二八八―九〇頁〕。刑は刑なきに期すると同じく、武徳の究竟は干戈を止めて用ひしめざるを主とする。

文化國を構成する民族の意志は、神經束を具備してゐる。そして綜合せられ、合理化せられて中樞神經に歸一せしめられてゐる。――卽ち全體的に結束せられてゐる。

海鷲の「浮べる巢窠」[4]が、全體的に結束せられた民族の意志を擔ひ、こゝに跳員による青天霹靂的戰術を展開するのである。しかしながら全體的に結束せられた民族の意志が、跳員による青天霹靂的戰術となつて具現しようがためには、こゝに必須不可缺の媒助が働きかけねばならない。必ずしも「意志が萬事」〔La volta e tutto〕ではない。民族意志の快露をして奔放ならしめようとすれば、こゝに紙背に徹する銳尖な「眼力」と、如何なる微音といへども、これを捕捉して餘さない敏感な「聽力」とが働きかけねばならない。內に對する神經束を强靱ならしめると同時に、外に對する「眼力」と「聽力」の銳尖敏感なるものが無かつたら、折角全體的に結束せられた民族の意志は、停滯した水のやうに腐敗するに非れば、忽ち土崩瓦壞の運命に際會するカルタの塔に過ぎなくなるであらう。

曩の歐洲大戰において、戰爭手段であるところの跳員機能が未だ擴充せられるに至らず、交戰諸國の一部の軍當局者間には、なほ古めかしいイデオロギーが愛襲せられてゐたがため、頗る非科學的方法を以つて、戰爭型態の一部が機構せられざるを得なかつたのである。卽ち當時の海上勢力は、未だ水上機による十分な「眼」を有せず、わづかに存在してゐた水上機とても、ラヂオによる「耳」を具備してゐなかつた。それ故に交戰國の何れの側も、全體的に結束せられた民族意志の、さながらの具現ともいふべき跳員による青天霹靂的戰術――卽ち「電擊戰」を展開するにふつゝかなものがあつた。

ユトランド海戰において、「獨逸艦隊は敵に損害を與へるよりも、かへつて多くの損害を蒙むつた。これはイギリス艦隊が、『スコット式砲火管制機』〔別名『砲火指導器』〕を使用してゐたが獨逸はこれを所有しなかつたからである」[5]といはれてゐる。今日、完全な「眼」と「耳」を併有する水上勢力にとりて、もはやかうした難點も、過去のお伽話として聽き流すべきであらう。

フォークランド沖の海戰において、「不意に、敵以上の勢力を以つて邁進し、敵を全滅させる」[6]

ことが、漸く當時、イギリスの軍令部長であつたフイツシヤア提督によつて、戰術的に考察せられてゐた。提督の「奇襲」戰術は、たゞ飛行機によつてのみ敢行し得られるものであつて、水上勢力それのみを以つてしては、機能的に不可能とする點も多かつたであらう。

こと苟しくも「エムデン」號の活躍に關しては、またそれに隨逐する協商側海上勢力の努力に至りては、むしろ「怪奇」なものさへが物語られてゐた。

現代にありては、これ等の非論理性・非科學性のマキシマムが排除せられると共に、戰爭型態そのものは、より一層簡單に公式化せられ、形式的に構圖化せられて來た。——卽ち跳員による青天霹靂的戰術は、頗る壯烈な形容句を以つて物語られてあらうけれ共、それの方法・場所〔戰局〕は、論理的必然に明示せられるの結果となるのである。そして、それは敵の政治的中樞たる首都であり、また經濟的核心たる生産工業地帶である。

從つて、それの上空に到達する「スピード」理念が、勝敗を決する最終の評價として、こゝで問題となる。

跳員による青天霹靂的戰術を契機として、全體的に結束せられた民族的意志は、こゝに「スピード」理念となつて集約せられた。ひとり戰爭哲學のみならず、平和的社會科學にありても「スピード」理念は、その構成的基礎概念の一である。

〈Geschwindigkeit ad infititum〉〔速度無際限〕の現代的希求こそ、「電擊戰」を産出せしめる根源衝動であつた〔!〕。

隣人に非文化的本能の萠え出づるのを未然に解消せしめ、殺戮のための殺戮意志を挫折せしめ「空疎にして排他的な民族主義」的民族の蒙を啓き、「奪掠戰爭」〔räubeoische Krieg. guerre de course〕を趣味として愛好した成吉思汗・アッテイラ一系列のイデオロギー的殘根を芟除し、こゝに構成的な何物かを植え付けることは、われ等日本人に課せられた文化義務ではないか。

構成的な何物かとは何か。それは八紘一宇の精神に外ならない。——八紘一宇の精神を具現すべき必須不可缺の條件として、われ等は「スピード」理念を評價するものである。物理的視像（フィジカリッシエ・ビルド）それのみとしての「スピード」理念は、人間的に評價せられるべき何物をも齎さないであらう。

こゝに「不幸なわが國に忠誠をつくす」〔Patriae infelici fidelis〕といふラテンの諺を忘れてはならない。「電擊戰」による深刻な打擊を蒙つた國は、一應、拾收すべからざる「カタクリ

ズム」の狀態を現出することもあらうけれ共、雨降つて地固まり、今度は報復の一念に燃え、愛國の激情に驅られて、「スピード」理念による反「電擊戰」の目論見を、雄々しくも目論見るに至るであらうことも、併せて考へ得られるのである。

4) 伊太利のブルーノ・マリーニ教授が航空母艦を形容した言葉。卽ち〈il nido galleggiante di aquile marine.〉

5) 參照、最頃物故したバイウオータア「ジュトランド海戰の砲術」。〈United States Naval Institut Proceedings.〉Oct. 1925 所載。

6) 參照、『フオークランド英獨海戰實錄』。

「スピード」理念によつて發達せしめられた「電擊戰」は、決して社會民主主義國家に生れて來よう筈はないであらう。何となれば社會民主主義國家の政治哲學は、全體主義のそれであり得ず專ら議會主義（パーリメンタリズム）に終始してゐるから。

C・シュミットのいふ通り、議會主義が生れた初發の形式は討議會〔Diskussionsgeselschaft〕であつて、たゞ討議することそれのみに據つて「眞理」を尋究しようと試みたのである。

議會主義は、「活潑な〔國民間の〕紛爭の形式的理論化」であつて、決して「この〔國民間の〕鬪爭を止揚する」[7]ことは出來ないのである。換言すれば正に〈Dialektologie〉であつて、絕え——國民間に蟠る階級的・職業的對立を止揚し、對立間の紛爭を解消するものが〈Dialektik〉であるとすれば、〈Dialektologie〉は、かゞる——のかうした對立と紛爭の激化に志向するものといひ得られよう。

それ故に、〈Dialektik〉は全體主義の政治哲學を觸媒として戰勝の方向に、〈Dialektologie〉は社會民主主義を通路として敗戰の方向に筋を引く。

形式的理論化であるからして、議會主義は國民にとり、最も本質的にして直接的、しかり而して必然的な何ものをも凝視することが出來ないのである。——故に、そこに生れて來るものは直接的ならず、また本質的な何ものにも根ざさない〈relativ Spontaneität〉[8]たるに過ぎない。

いま東亞諸民族が痛感して止まない本質的な、直接的な、そして必然的な希求は何か。それは個々に相對な Spontaneität をかなぐり棄て、東亞諸民族が一となつて西歐諸民族の觸手を撥ね

退け、こゝに東亞共榮圈を確立することにある。

本質的—直接的—必然的なものを高揚し、すべての對立を綜合に導き、こゝに東亞共榮圈の確立に至らしめるもの、それは八紘一宇の哲學である〔！〕。

八紘一宇の哲學を具現すべく、われ等は「スピード」理念を等閑に附してはならぬ。東亞に海岸があり、また山岳がある。——それを越えて、事物を一宇に維絡すべく、「スピード」は必須不可缺の條件であらねばならない。

「繼ぎはぎの平和を打ち破り、冷酷なる戰ひの種を蒔け」〔Disjice compositam pacem, sere criminabelli.〕。——ヴアージル。

7) Karl Mannheim, Ideologie und Utopie. 1930 S. 83-85.

8) Max Raphael, op cit. S. 109.

戰爭と社會

一

戰爭と文化は、おなじく生きんがためにする人間活動の兩側面であつて、その間、何等本質的差別の認められないことを知つたのである。この問題は、延いて戰爭と社會の問題に書き換えられ、即ち軍事科學と社會科學との對立となつて考察し得られよう。戰爭と文化とが人間生活の一筋と歸一せられると同時に、軍事と社會、延いて軍事科學と社會科學との對立は、ひとし並に人間叡智の基調に還元せしめられるのである。前にもいふたやうに、戰爭は、あらゆる事物に附隨す

る對立の「解消者」〔Erlöser〕である事由も、こゝで自ら首肯し得られるであらう。

新しい兵器の發明は、新しい戰爭技術の誕生となつて示現するとゝもに、新しい戰爭技術は、また新しい兵器の發明を示唆し、こゝに敏感なる辯證法的關聯が示現せしめられる、機械・技術との辯證法的關聯を忘却して、近代的軍事科學は考慮し得られず、非常時下の社會科學を樹立する事は出來ないのである。近代的な軍事科學は、ひとり軍事科學者が工廠内で汲頭して足れりとする課題ではない。如何にも戰爭が國家の支配者同志の相剋であり、國民大衆は、その費用を負擔するに止まるといふ古代の、ないしはマルキシストの戰爭理論が正認せられてゐる時ならば、軍事科學は必ずしも社會科學であり得ず、それ〳〵獨立して二元的の伸展を遂げるであらう。近代的戰爭は、然しながら社會の上層部同志の取引ではない。社會層全部の關心事なのである。それは「國民的抵抗」〔national Widerstand〕にあらざれば、「國家意志の貫徹」〔Willens der Nation zum Widerstandes〕であると、思惟せられてゐるのである。そして物質的價値と工業生産力とに劣れる何物もなく、均等に國民生活も亦、總動員の對象に擬せられ、戰爭の主體と轉形を遂げるのである。人間が兵器を使用するとゝもに兵器が人間を物體化し、生産・再生産〔補給〕の道程を性急に馳驀して、こゝに國家全體は渾焉として戰爭の一單位となつて更生する。近代軍事科學は、それが故に近代社會科學を内包する、といふテーゼは、かくして證據立てられるのである。

世界の一部〔西洋若しくは東洋〕における二大强國に惹起せしめられた戰爭は、直ちに擴大して世界戰爭となるであらうといふ豫測は、世界の軍事科學者誰でもに共通した提說である。この提說とても、かのマルキシストが考へるやうに、支配者階級の國際的提携・衝突を措定するものではない。やはり國民全體を一單位に擬した上の、經濟的關係に起因するものであつて、更に兵器・戰爭技術のあはたゞしき伸展が、世界戰爭への擴大性に、拍車をかける鋭き因子となるであらう。

世界戰爭は、しかしながら著者がこゝで、必ずしも考察の對象と成すものではない。著者が關心事とするものはその「形式」である。——卽ちやがて勃發するであらう戰爭は「如何にして戰はれるであらうか」の課題であらねばならぬ。「形式」の問題、卽ち「如何にして」のそれは、必ずしも新規な提案ではないであらう。殊に最近、兵器〔航空機——〕の伸展と共に、この提案

に對するさま〴〵の解答が、外國および我が國の軍事科學者に依つて與へられてゐるのを目堵する。その多くは、試論的のものにしか過ぎないのは、何故であらうか。それが、あまりに正確であり過ぎる限り、微量の、時としては大量の虚僞が、そこに内包せられてゐる事を看過してはならない。かれ等は、自分等の認識の限界を顧慮することなく、直ちに一般法則を導き出し、地理的ないし人種的差別を超越して、すべてを公式に表現し、シェマ化することにおいて焦燥なるものが認められる。

軍事科學は、社會科學を内包する。社會科學の諸綱目を、國際的に公式化し、シェマ化する事において果敢であつたものは、マルキシストを越えた何物でもない。否、マルキシスト自身といへども、この公式化・シェマ化の爲めに巨人的障壁に頭を打ちつけ、血みどろとなつて醜しき苦惱を嘗めつゝあるのではないか。滑稽にしてヒステリツクな排他論を布陳し來り、世界歴史に道化の頁を挿入しつゝある不純なるものを清算し、誇張に亘れるものを解消し去つた後に殘された――われ等が凝視し續けて欺かれない最終指定は、實に國民主義であらねばならぬ。軍事科學は國民主義に、金剛不可壞の根底を見定めるのである。獨自の國民性を母胎として獨自の戰爭技術が物語られ、跛行的ならざる國民主義の伸展に隨伴して戰勝の榮冠が準備せられてゐよう。

世界戰爭の「形式」に關し、「如何に」の問題に對する解答の一として、イタリイのドウエ將軍は「爆撃無敵」の理論を強調してゐるのである。即ち爆撃機の大編隊を飛翔せしめ少なくとも八列に亘る「空襲の怒濤」を以つて、戰術的の優位を乾坤一擲に確把しようとするものである。いはゆる「すべてを集結して打て」〔es müssen alle vereint schlagen〕といふ古めかしい戰爭理論を祖述するものであつて、もの凄き爆撃編隊の防禦――集中砲火の面前では、「防禦としての戰闘機隊」も、いまは死の網にかゝつた小鳥にでも若かないであらう。「新しい武器には必ず有效な反對武器がある」〔für jeden neue Waffe eine wirksame Gegenwaffe vorhanden ist〕といふ傳統法則に對して、最初の、そして唯一の例外は爆撃機である、といふのである。かうしたドウエ理論に如何ばかりの技術的確實性があるかは、頗る問題であらねばならぬ。但し大規模の爆撃編隊が誇る威力は、敵の防禦戰闘機群に浴せかける集中火力よりも、むしろ戰闘員と、非戰闘員とを問はず、敵國民の情意に恐怖の觀念を蒸成しめ、國志を挫折せしめる一事に存するはいはずして明かなるところ。われ等は、しかしながら善意にとり、ドウエ將軍は專らフランスの

みを假裝敵國となして、この理論を編み出したものであると解釋しておくであらう。〈Terror-wirkung〉〔恐怖心の働き〕は失はれようとする生命に對し、これを愛着する念慮より生ずるのである。こゝに世界の人類は何人といへども生命に愛着し、死の一歩手前の「恐怖」觀念の爲めに國民意志の貫徹をさへ放棄するといふ公式を作り上げ、「爆撃無敵」の理論はフランス以外の、更にヨーロッパ・アメリカ以外の强國に施しても、無差別に妥當であると思惟するものがありとすれば、それは餘程の愚者であらねばならない。但しイタリイとフランスとは國民主義的に對立し、時としては激化することさへもあらうけれども、人種的には、同一素質のラテン民族であるから、それだからしてフランスを目標とする限りにおいて、或る程度の、ないしは絶對的の確らしさが見定められてあつたのかも知れない。

空襲は陸戰におけると、海戰におけるとを問はず、常に敵の意表に出で機先を制することを以つて有利とする。この戰術は、しかしながら必ずしも新しいものではないのである。アルマンゴウ將軍が「陸軍の課題は、戰鬪行爲に入る前、新しい方法〔機動〕を以つて移動・集中を迅速ならしめるにあり、毫もこゝに『古典的』方法を選擇する餘地がない。しかるに空襲は別に、われ等に對して『怪奇な攻撃』の恐怖を以つて、ますく〳〵迫つて來る」といへるのはおもしろい比喩である。「古典的」方法に依る「怪奇な攻撃」〈brüskeer Attacken〉が、即ち爆撃編隊の最初のそしてまた最後の手段であつて、いはゆる「印象ふかき恐怖」を相手國民の意識に惹起せしめる事に依り、戰爭の終局を、促進することにおいて效果的のものである。〔〉Die Leitgedenken der Organistion des Luftheeres.〉von General Armengaud. Revue Militaire Française. Nr. 158. vom November 1933. D. Luftwacht. Bd. 1. Nr. 5)。われ等はまたアメリカの航空母艦「サラトガ」乘組の中佐L・D・ウェップが、艦名の因由を記述してゐるのを、こゝに引證する事が出來るであらう。即ち「それは一七七五年、初めてアメリカ革命戰が捲き起された戰場の名である。本艦の前におなじ名の附せられた軍艦が三隻もあつた。それはいづれも小型の『奇襲船』〈raider〉であつて、その都度の必要に應じて、軍艦に轉換する事の出來るものであつた。わが『レキシントン』號とても、畢竟、一の『奇襲』軍艦であるといふ事が出來る。即ち高速度偵察機や、重量の大なる爆彈を搭載した飛行機一編隊を發翔せしめ、通商破壞戰を展開する事が期待せられてゐるから、やはり往古の戰術であつた『奇襲』の意義を徹底せしめたものに外なら

ない」といひ、こゝに數百浬の偵察能力を有する艦載飛行機を附加した暁の「エムデン」號の恐怖を、さながらに想像してゐるのである〔▽Der Flugzeugträger" Lexington "〈Von Kapt. Ltnt. L. D. Webb, U. S. N. Aus„ U. S. Air Services" Von November 1933. D. Luftwacht. Bd. 1. Nr. 4〕。「古典的方法」—「怪奇な攻撃」—「奇襲」、これ等一系列の語彙を通して、爆撃のイデオロギイが何よりも周匝に明示せられてはゐまいか。『神武紀』に男軍・女軍の區別がある。鈴本煥卿はこれを解釋し、「男軍・女軍とあるは正兵・奇兵にて、追手・搦手の事なるにや」といへるは、肯綮に當れるものがあるらしい〔『一擧博覽』巻之二〕。爆撃行動は、卽ち「奇兵」であつて、遂に「正兵」ではない。——これを「正兵」に解釋し直さうと欲して、將軍ドウエは努力したのである。如何に努力してもイズムの更改は、決して機材の伸展を約束しないのである。現段階における海軍航空は、沿岸航空にあらされば艦載航空の範疇を出でず、つねに海軍力の、缺くべからざる機構一部として、それの存在價値が認められてゐるやうである。航空が地上の、ないしは水上の支撐を蟬脫し、最も完全に「自律」を獲得した暁にこそ、はじめて軍の「正兵」として更生し、ドウエ理論の顯現が物語られて遺憾なきを得るであらう。但し現段階にあり

て、空軍は依然として陸軍力の、ないしは海軍力の、それが無くては叶はぬ機能のひとつである點において、「奇兵」としての第二次的地位に墮せしめる事は、蓋し肯綮を缺くものがあらう。近代戰において、更に今後の大戰において、正・奇の差別そのものは、既に時代錯誤に陷れるものでなくてはならぬ。

〈hurtar para dar Dios〉〔神に捧げやうが爲めに盜する〕といふスペインの諺は、ジエスイツト教徒の信條であつた。それは同時に、來るべき大戰の「形式」を示唆し得て得りがあらう。「如何にして戰ふべきか」の課題は、「如何にして勝つべきか」のそれを越えた何物でもない。近代戰および未來戰は、勝つべき爲めに方法と手段とを選擇しないのである。由來人道觀念の崇ぶべきものである事は、公理のやうに明瞭である。——われ等はしかしながら汎愛主義者となる前に、勝利者とならなければならぬ。われ等は他を憐れむ前に、自分自身を救はねばならない。自分自身を救ふことは勝利者たる事に依つて達成し得られやう。勝利者であらうが爲めに、また人道觀念を逆用することは、不可思議なアイロニイにあらずして何んであらう。爆撃機大編隊の威力に依つて惹起せしめられた「恐怖の働き」は、危機に瀕する人道觀念の私生兒ではないか。

空襲に依つて「恐怖の働き」が、いやが上にも激化せしめられ、遂に闘志を挫折して、國家意志の貫徹を放棄するに至るのは、萬事、方便主義に依る自由主義國家に見ることが出來るところの特質でなければならない。かれ等は「統制」を思念すべく、あまりにも個人意識が強調せられ過ぎてゐる。かれ等は國民としての榮譽を惡ふ前に、日常生活のハツピネスを維持する事に焦慮する。かれ等は義務を履行するよりも權利を主張する事において放縱である。かれは犧牲者たる事を好まない。——もし雄々しい行爲が艶說せられてありとすれば、他人のハツピネスと well-being との爲めに、自分自身のそれを棄て去ることである。これ等のいはゆる人道の闘士も、必ずや或る代償を豫定してゐるものである事が斷定し得られるであらう。國民としての榮譽の爲めに、代償を豫想せずして死に赴くこと歸するが如き心機は、金輪際、かれ等の理解に徹し得ないところである〔アングロ・サクソンおよびラテン民族——〕。

日常生活のハツピネスと、well-being との、ほんの一端が脅かされても、かれ等にとつては、異常の「恐怖の働き」が捲き起されるであらう。外科手術を見ても、かれ等は卒倒するのである。かうした民族心理の、無意識の働きかけを受けてゐる軍事科學者の戰爭理論！　それは如何に手

際よく出來上つてゐても、如何に壯烈に書き下ろされてあらうとも、畢竟、それは彼が屬する民族限りに、それの妥當性が認容し得られる相對的のものにしか過ぎないのである。〈Terrorwirkung〉の深さは、勿論地理的條件に依つて差別があらう。それよりも、しかしながら民族性の相異に依つて或る國にありては、むしろヒステリアに近き情勢を誘致するにもかゝはらず、或る國では殆ど問題としての可能性さへもが疑はれてゐるのである。爆撃大編隊の來襲を聽き、待ち設けてゐた「ケムペンフリイガア」〔戰鬪飛行家〕の一群は、顏面蒼白とならずして紅潮し、祝杯を擧げ、莞爾として愛機の操縱桿を執るやうな敵に對し、ドウエ理論も、遂に施すべき術がないであらう。東海の島帝國日本こそは、地理的條件からいふても、殊に目立ちて民族的モーラルの觀點から律しても、ドウエ理論を適用する事の出來ない、たつたひとつの例外である。たゞ數量のみを目安として「世界無敵」〔セコンド・トウ・ナンバー〕を說くアメリカ海軍と、自分等の主觀的心理だけを標準として、「爆撃無敵」の理論を公式化しようとするドウエ將軍とは、現代における錯覺現象の好一對ではないか。

その國には、必ずその國獨自の國防理論が提唱せられ、その國獨自の軍事科學〔社會科學をも

抱含す――」が樹立せられてあらねばならぬ。すくなくとも空襲に依る〈Terrorwirkung〉を基調とする理論は、日本に當嵌まらないのである。アメリカ海軍の「急降下爆撃機」の如きも、ラテン民族およびラテン・アメリカ諸民族に施したならば、或はその效果のマキシムを擴充し得たかも知れない。對手國が、しかしながら日本である限り、ほんの例外的場合を除くほか、期待せられたほどの戰術的收穫を把握することは遂に不可能であらう。曾て東部シベリアに集結せられつゝあると傳へられてゐた重爆撃機群も亦、これとおなじ結果を見るに相異がない。地理的條件と民族的モーラルの卓越は、重要都市が空襲の好い餌物である可燃性家屋より成る不利をさへ克服し、空襲の危機に對して、ロンドン・パリおよびローマ府民におけるがほど、敏感であらしめないのである。

さすがトイトニック民族に屬するドイツ人の觀察に、われ等にとつて有意義なもの〻見出されてゐるのは、比較的、公式化・シェマ化の病弊を、露呈すること尠いものである故である。フォン・ビューロウ少佐は、一九三三年八月〔昭和七年〕、關東方面で擧行せられた防空演習の事を叙し、かなり大規模のものであつたのにも拘はらず、防空用飛行機・防空用兵器〔高射砲・聽音器および照空燈等々〕の數量の少いことを指摘してゐる。彼はこゝで、一見わが國がヒリツピン、その他の方面から受けるであらう空襲に對し、甚だ不用意である事を警告してゐるかのやうに讀まれてゐるのである。フォン・ビューロウ少佐の眞意は、しかしながら左樣ではないらしい。彼は別の箇所で、「攻撃に從事する航空母艦の爆撃機隊は、日本の頑強な軍國民に對し、これを決定的・實際的に意氣沮喪せしめようとしても、その效果は、遂に薄弱なものとなるであらう」とか、「日本の空軍は飛行家精神と、犧牲心との比肩すべきものなき飛行家に依つて組織せられてゐるのであるから、こゝ僅々の年月を以つて、技術上の缺陷は克服し畢せられるであらう」とか、最後に「結局のところ、空中戰において勝敗を決するものは、機材それのみにあらずして、機材を操作する人間である」といひ、日本國民が決して空襲下にあつて、アングロ・サクソンないしラテン民族とひとし並に、とめ度なき「恐怖の働き」に依つて、カタストロフキツクな狀態を、現出するものでない所以を明かにしてゐるのは、外人としては正鵠を得た觀察であると考へられよう〔〉Das Luftproblem im pazifischen Raum〈 Von Major a. D. Frhrt. V. Bülow. D. Luftwacht. Bd. 1. Nr. 2〕。しからば日本は、何故にかく空襲に對して無關心なのであるのか。

日本は遂に、想を防空の事に致さない不用意な民族であるのだらうか。

爆撃の哲學が、「すべてを集結して打て」といふ古い理論に立脚するものとするならば、また防禦―戰闘の哲學は、普佛戰爭當時におけるフォン・モルトケ將軍の、「最高の防禦は攻撃である」でなければならぬ。空襲第一線は防空第一線と、時間的に相呼應するのである〔アルマンゴウ〕。この世のなかで、あまり新しい理論とてはないのである。「奇兵」に對しては「奇兵」を以つて對抗するか、いつそ進んで「奇兵」の策動起地に致命的の打撃を加へ、根こそぎに、これを掘り返す事を聰明としよう。敵爆撃編隊の來襲を拱手して待ち設け、しかる後にわが防禦―戰闘機隊を派遣して、これを撃滅するが如きは、決して上出來の防禦戰術ではないのである。われ等はこゝで、再び將軍アルマンゴウがフランス國民に教示したことを引證せねばならない。――卽ち「フランスを空襲より防禦する秘訣は、反撃に次ぐ反撃を以つて、これを撥ねかへす事にある」。〈Schlag für Schlag zurückgeben〉こそ、モルトケ將軍の、いはゆる最高の防禦法に該當するものであつて、また空襲を恐れない日本の民族心理と、さながらに契合するものが、そこに認められてはゐないか。こゝに國際聯盟を中心とする自由主義國家群は、滿洲事變以來、日本といはば「侵略者」扱ひにするのは、東洋の現狀はおろか、ヨーロッパでも行はれてゐる新しい戰爭理論に對する無智のしからしめる所であらう。

いま更、辯疏するのも可笑しいが、日本はその近世史の如何なる頁を繰つて見ても、「侵略」に該當する如何なる事實も發見せられてゐないのである。但し柏崎永以の『古老茶話』に、豐臣秀吉の朝鮮征伐を試みるに至つた動機を忖度し、「天正十九年八月五日、於二聚樂城一秀吉寵子鶴松三歲早死。妙心寺に葬る。祥雲院と號す。秀吉、悼惜無限云々。此秋卽秀次を養子として關白を讓ねられぬまゝに、近年大明愚帝打つゞくよしを聞て、朝鮮より大明に入て榮花を極めん。纔の年を、むだ〳〵と終らんとなり」といふてゐる。――若し永以の記述に誤りがないならば、これこそ正眞正銘の「侵略」に符合するものであらうけれども、これは後にも先にも、たつた一度限りの事實であつて、しかも大明に拘はる限り、紙上の計畫だけに終つてゐる。不確實な秀吉の一擧を、終始、渝らぬわが國家の意志と混淆するのは確に歷史的錯誤を侵すものであらう。古來の歷史を通じて、わが國が、わが國境外に施した武力工作は、アルファからオメガに至るまで、皆悉く、防禦の一筋に拘はるものである事は、炎の文字を以つてこゝに錄存せられて然るべきであ

らう。

しかしながら至つて近視眼的であつて、爆撃に對しては防禦―戰鬪機か、甚しきに至つては、高射砲を以つて對抗して、それで事足りると、一圖に信じて止まぬ保守論者にとり、わが國が執らねばならぬ最高の防禦手段を目して、進攻的に誤解するのも止むことを得ないであらう。凡そゆはれなきものは恐日病に罹る諸國の指導者達が、日本に對して抱くヒステリアでないか。若しわが國が滿洲國内に、何等かの武力工作を營んだとしたならば、それは正當なる防衛手段の外の何物でもないのである。――しかも彼の誤解に、油を濺ぐやうな記事が、「日本の航空」と題してフランスの雜誌において讀まれてゐた〈L' Aviation Fran çaise. No. 251. 14. Fev. 1934〉。卽ち「日本軍事計畫の調査に依ると、日露間の紛爭にむかつて、苦心を表現してゐるやうである。朝鮮および滿洲國では、攻撃航空に對する優良な出發地を、創設してゐる。日本は領土防空の效果に對しては、別に何等の考慮をも支拂つてゐないかのやうに見へてゐる。原則上、すべての努力は、むしろ防禦的攻撃にむかつて導かれてゐるものか」と。――そのいふところ、眞理でもあり得、また虚僞でもあらう。ひとり目障りなのは「攻撃航空」

の言葉である。「攻撃」は、しかしながら「防禦」の意義を擴充し、その最大限度を超えた何物であつたらうか。いやしくも國防自主の理論にして正認せれてゐる限り、一國が領土内に、防禦に不可缺であると思惟せられた如何なる工作を施さうとも、毫も他國の容喙を許容しないのである。光榮ある「防禦」は、日本の terminus a quo であるとともに、また同時に、terminus ad quem であらねばならぬ。このテルミナスふたつは、しかしながら頗る高蹈的な拋物線に依つて結びつけられてあることを誰か看落したであらう。――それはゆるげども、決して撓はまぬ民族的モーラルの象徴である！

フランス記者の叙述は、あまりにも無遠慮である。卽ち「最近北支那における事件の經驗は、優良な航空といへども、多期となつてから、この地方に組織的根據地を有しないものは、全く無力である事を現はした。……日本の第一の關心事は、ソヴェット聯邦から沿海洲およびウラヂオストクを取り去る事であらう。この後者は、日本帝國に對する航空策動の出發起地として役立つであらう」云々、「一度、日本軍に依つて成功を收めたこの急攻撃は、幾千哩以上も距てゝゐる宏大な地方の清掃を急施しなければならぬ。これが相手側をして……大偵察機および爆撃機を使

用する爲めに、必要な組織を考慮するの餘儀なきに立ち至らしめたのである」云々。——そして最後に「日本帝國の、すべての工業地帶〔神戸・大阪・名古屋・東京〕は、もはや相手國の復讐に依つて脅威せられないであらう。單に低劣な效率の例外的侵入および困難なる實行のみが、日本において熟考せられてゐるのみである」云々と！

我等はこゝで、前に引證したフォン・ビューロウ少佐の言說を想起しなければならない。すくなくとも外國人の眼で見て、日本の防空運動が、機材の點において不十分なものゝ認められてゐるのは、低劣な效率の例外的侵入か、困難なる實行〔フォン・ビューロウ少佐は、地理的條件よりして大洋・大陸いづれの方面よりも、日本空襲の困難を說いてゐる〕を考慮してゐる當然の歸局ではないか。普通、行はれてゐる防空運動なるものも、實は日本防空の基調に觸接すること、比較的、稀薄なものがあると思惟せざるを得ないのは、これが故である。たとへ日本でなくても、いやしくも、日本とおなじき地位に立つ國は、國境外に存して空襲起點となるべき危險な地帶を、「清掃」する事を以つて國防理論の大乘に擬するは、最も賢明な策ではなかつたか。この點において西太平洋上における日本は、地中海におけるイタリイにも比考し得られよう。イタリ

イの生命線は、アフリカ海岸のトリポリである。しかるにイギリスのマルタ島の領有は、何時でもシチリア—トリポリの通路を、一跛行的であらしめ得るであらう。それでイタリイは地中海制覇の目的を達しようが爲めに、イギリス空軍が本島に到達する以前、イタリイはマルタ島に「決定」を下さねばならないのである。——バルボ元帥が、有名な「大空艦隊」〔Himmels-Flotte〕の業蹟を成し遂げたのは、イタリイをして何時か、地中海西部の海面において、指導的役割を演ぜしめるに至るであらう豫備階梯であつた。〈Der Einfluss der Luftstreitkräfte auf die Mittelmeer—Situation Italiens 〉 Von Oberleutnant Stephan von Berko. Magyar Katonai Szemle Nr. 12. Dezember 1933. D. Luftwacht. Bd. 1. Nr 6.〉。イタリイは、自國の防衛の爲めにマルタ島に決定を下されなければならぬ。——日本はおなじ目的の爲めに、何處の地に「決定」を下さねばならないであらうか。——これ等はこゝで卽答すべく、あまりにも重大な問題である。しかもこの事に關して日本の意志を忖度し、取越苦勞の揚句、ヒステリアの症狀を露呈するに至つては、また餘りにも「深刻な聰明」性であるといひ得られよう。

われ等はたゞ、アルマゴウの論稿より、「最後の爭闘は擴大して、さま〴〵の舞臺において展

開せしめられるであらう。母國内であらうが、その外であらうが問ふところでない」といふた言葉を拔き出して、世人に示せばそれでよい。そして空中における驚異は「輕い」――それに對する防禦手段は、しかしながら頗る「重い」ものである所以を理解せしめたらばそれで事足りる。われ等は必ずしも「自律艦隊」〔autonom Flotte〕の機能を過重視し、ドウエの絶對的テーゼに隨逐するものではない。われ等は、しかしながらまた試みられかけた空襲に對する「反擊」〔Verantwortung〕を忘却するほど、お人好しではないのである。「腦味噌のない者は爪がない」とは果して何人に當嵌まる諺であるか。――新しい戰爭理論の教へる最後のものを凝視することが出來ず、防禦・攻擊の古めかしい對立觀念の囚虜となれるものゝ爲め、この諺は準備せられてあつたのかも知れない。

わたしは初めに、戰爭は、あらゆる事物に附隨する對立の「解消者」であると、いふた言葉をこゝに再び考合せられたい。今まで述べ來り、述べ來りしところに據つて、戰爭の理念に內在する重要な對立――卽ち「攻擊」と「防禦」とのそれを解消し、爆擊と反擊との區別も消滅し、たゞ死力を盡して戰ふといふ深刻な、極めて深刻な一筋に合流せしめられるのである〔11〕。

II

戰爭は、いまや社會全體の關心事となつた。曩にわたしの論稿において戰爭と文化との對立を解消し、これ等はおなじく、生きんがためにする人間活動の兩側面に過ぎない事由を明かにしたが、この對立の解消は、延ひて前線と銃後との差別を無くし、すゝんで攻擊と防禦との、かなり古くから軍事科學者の頭腦に、こびりついて離れなかつた區分をさへも、無意義ならしめることを說明した。一度戰爭が現象しようものなら、國家社會は一丸となり、その職域の全部を總動員して戰爭に參畫し、死力を盡して、乾坤一擲の戰ひを戰ひ拔くといふ、ひたすら壯烈な一筋に歸向せしめられるのである。「汝の無の中に、わたしは一切のものを發見しよう」〔In deinem Nichts hoff ich das All zu finden.〕と欲するといふたゴエーテの言葉の內に、全體主義の遼遠な始源が見定められてゐよう。

近代戰において攻擊と防禦との區別を設けることは、嚴格な意味において頗る困難と認められるべきものがあらう。例へば飛行機の離着裝置を有し、郵便物の遞送業務に從事しつゝある大西洋上の優秀船の如き、その世界平和と近代文化とに貢獻する功績に對しては、何人といへども疑

義をさし挿まないのである。しかるにこれ等の優秀船も、戰時においては立ち所に航空母艦と轉形し、空襲の一撃を都市に加へる起點となり得るであらう。由來、最高の防禦は、攻撃にあるといはれてゐる。しかも航空機關の伸展に依り、いはゆる機先を制する事が必勝の鍵であると思惟せられるに至り、この攻撃・防禦の限界が、頗る漠然たるものとなるのは、もとより當然のことゝいふべきであらう。

「空軍の行動は、陸海軍の前線が固定しても、毫も拘束を蒙ることがない。空軍に對しては、如何なる地理的限界も、地上防禦も、その用を成さないのである」。卽ち「空中戰における防禦の大經濟性」は、わが方よりも「打ち勝たれない爆撃編隊」を發翔せしめ、反撃に次ぐ反撃を以つて、敵の攻撃を相殺するにある。したがつて將來の戰爭は、「集中せられ、そして急攻撃に適するやうに整備せられた攻撃的空軍に依り、すくなくとも一方より挑みかけられるであらう」といふ重大な豫測の下に立つに至つたのである。——なんとなれば宣戰布告の後、防禦武器の製作・增加に對して、おほくの時間が殘されてゐず、間髪を容れずして、行動に移らねばならないからである。

ドウエ理論——「爆撃大編隊を以つて、攻撃の波に乘る」——といふことは攻撃の理論であるとゝもに、また防禦の理論でもあらねばならぬ。いやしくも空軍の事物に拘はる限り、攻撃・防禦の區別は、すでに時代おくれのものに屬するであらう。時代おくれの理論に膠着し、機先を制しようが爲め、攻撃の巨腕をさし延べることを忘れたが最後、敗北の憂目を見るに至るのは宿命的に必然であつて、その最も卑近な實例は、獨逸の「電撃」作戰に對する佛英の如きものであらう。「對手國の意志貫徹を、先づ撃破することに成功した國に、必ず戰勝の榮冠が來るであらう」〔Der Sieg fällt der Nation zu, der es gelingt, den Willen des Gegners zum Durchbrechen zuerst zu brechen〕とは、われ等の片時も忘れてはならない鐵則である〔Capt. Claire L. Chennaut〕。

しかり、戰爭の初發より、敵國の「敏感」な地點——その軍隊および經濟的・社會的諸生活の安全瓣である箇所に對して試みられた廣汎な、重い、そして度重なる空襲は、印象ふかき脅威を與ふる可能性を有つ。敵國は脅威に對し、現實の反應を受けるであらう。しかも空襲側は、これに依つて抵抗を受けねばならない危險を、根絶し得られるのであると、將軍アルマンゴウはいふ

てゐる。そのいふところに誤謬はない。なんとなれば將軍は、防禦理論としての攻撃理論を考察してゐるからである。それであるからして空軍を擴張し、勢力を空軍に集積し、以上の行動を準備してゐることは、フランスにおけると同樣、他のいづれの平和諸國に就いて見ても自ら證示せられるところである。かくして自國を空襲の危機より防禦し、反撃に次ぐ反撃を以つて、敵の攻撃を撥ねかへさうが爲めに、各國は航空工業を整備し、大型飛行機〔schwere Typ oder Riesen-Flugzeug〕の數量を揃へておくのである。大型飛行機は遠距離に存在する敵國の空襲起點を、爆撃する目的を以つて使用に供せられるものだ。しかも「この擧に出づる爲めには、五六箇月前より、機材をめざましく增加せしめ、しかも工場生産物には、ヴェイルを懸けて置くがよい」といふ、周到極りなき警告さへもが與へられてゐるのである。

若し强いて攻撃・防禦の對立を以つて、空軍を分類するならば、爆撃機を以つて攻撃の、戰鬪機を以つて防禦の機能を果すものである、とする常套の觀察が正認せられるに相異がない。この觀察は、しかしながら、遂に今日および明日のものではあり得ないのである。論をすゝめて志氣〔moral〕の問題に說き及び、戰鬪機は、祖國の防禦の爲めに戰つてゐるのに比し、爆撃機は命令に依つて、敵國の攻撃に從事してゐるに過ぎない」理由を以つて、若干の差別をそこに認めようとするのは、あまりにもアングロ・サクソン的觀察であるといひ得られよう。すくなくともわが國の飛行家に限りては、攻撃と防禦とのいづれに從事するを問はず、志氣に、何等の差別はあり得ないのである。

將來は攻撃もなければ、防禦もない。——たゞ「戰爭」〉Krieg〈が、死力をつくして戰爭せられてあるのみである。「空中攻撃の意義は、一般に認められてゐるけれども、空中防禦の正しい表象を把握し得たものは、至つて尠いのである」といふ斷案は、それだからして論理學上の複言法〔Tautologie〕より來る誤謬であるといはれよう。なんとなれば「攻撃」といふ表現の內に自ら「防禦」といふそれが、包隱せられてゐるからである。この兩者の差別を解消し、「新しい武器が發明せられる度毎に、かならず新しい防禦武器が出現する、といふ古色蒼然たる理論に對し、爆撃機のみが最初の、そして唯一の例外である」といふドウェ理論を爆破し去つたものは、實にフランスにおける「機砲裝備單坐戰鬪機」〔Kanonen—Einsitzern〕の出現であつて、同時に本型は、これからの空軍裝備における王座を、重爆撃機に代はつて占めるであらうと。

この新型戰鬪機に、「速度」といふ一因子が附加せしめられる事に依り、その戰鬪性能は、いやが上にも發展せしめられるのである。わたくしはこの課題に關聯して、フランスにおける國民主義運動の根源である新聞紙〈Action Française〉に、同紙編輯 Sejo の署名を以つて發表せられた一論文をこゝに批判しなければならない。——Sejo はフランスの戰鬪飛行機が、350 ないし 550 m/h の高速度を發揮するに至つた事實を擧げ、「昨日までの戰鬪機は、すでに廢物に歸して了つた」ことを斷言してゐるのである。しかるに〈Les Ailes〉誌上に P. BA. といふ署名を附して發表せられた一論文において、この斷案よりして「戰鬪飛行機が全般に亙り廢物となつた」といふ結論を導き出すことの誤謬を指摘してゐる。卽ち上記、速度の增加は、如何なる方面より觀察しても、機砲裝備單坐戰鬪機の、未來の空中戰における性能を、疑はしめる理由にはならないのである。

速度の向上と、こゝに從來、防禦的意義の打ち勝つてゐた戰鬪機をして、爆撃機と拮抗する性能を把握せしめ、攻撃・防禦の對立を償還し、こゝにたゞ、「空中戰」といふ理念それのみとなつて、再現せしめる機緣となつたのである。若し强いて、攻撃的といふ表現を使用するならば、

比較的よく整備せられた空軍に適用せしめられるものであらう。——なんとなれば空中戰は、原則的に優勢な空軍より、弱勢な空軍に對して挑みかけられ、弱勢な空軍は、常に防禦的の立場におかれるからである。そして防禦的立場を執る空軍は、空軍本來の目的である「機先を制する」代はりに、「機先を制せられる」受働的地位に陷り、遂に敗北の運命を强要せしめられるに至るのである。

各强國は、國策として自國の空軍を、强化せしめることに營爲してゐるのである。曾てその代表者達は國際會議の席上において、或は攻撃的武器の撤廢を力說して雄辯なものが認められてあつた。しかるに實踐においては、汲々として攻撃的武器の充實に努力しつゝあつたのは、不可思議なアイロニイにあらずして何んであらう。しかも「不可思議なアイロニイ」は古めかしい攻撃・防禦の差別的謬想に職由するものである。この差別が解消せしめられ、「戰爭」といふ單一理念のみが、そこに殘存せしめられた唯一の眞理である限り、われ等はたゞ「戰爭」に對する準備のみを、こゝに强調すればよいのである。——辭義の末節に囚へられ、空疏な論議に耽り、攻撃・防禦の煩瑣な差別論に時日を曠過するのは、芳しからぬ社會民主主義者の通癖とするところ。

「戰爭」に對する準備は、ひとり機材に止まるのでない。更に人間的因子にまでも擴充せしめられることは論を要しない。ア・ベロが、フランス空相ドネーン將軍の空軍政策を祖述して、技術者と士官〔――それに軍事航空と民間航空〕とが結合することに依り、その相互理解よりして「空の統一が、眞に現出せしめられるであらう」といへるは、卽ちこれであつて、こゝに「航空の技術的問題を總攬して一瞥の下におくこと――これは實に、機材の創造から、その改良にまで及ぶのである」といはれてゐる。人間的統一は、こゝに機材の創造を示唆し、空軍組織を緊密ならしめると同時に、新しき技術の伸展に導入するのである。「航空の十億」とよばれるもの卽ちこれであつて、「平時において、資格のある軍・空軍部隊は卽座に現役に編入せられ、訓練した る豫備軍として配置し、急速動員すべく準備せられる」こと、「產業動員の新考案に惠まれ、戰時において、その發展の凡てを支持する〔輓近、技術的進歩に依り斷えず伸展の計畫である〕」こと等々に關する諸計企の、全部を內包するものである。攻撃・防禦、そのいづれの理念とても、特に頗僻して、こゝに强調せしめられてゐるとは推測せられない。――たゞ「戰爭」に對する準備のみが、「航空の十億」政策を通じて思念せられてゐるのみである。青年フアシストの活動要素の一因子として、青年フアシスト司令下におかれたイタリイの航空スポーツ、或は航空人の一族を形成して、軍隊的に組織したる操縱士に代える事に依り、青年航空〔女子を含む〕の國家社會主義的基礎を樹立したナチスの航空政策、またこれとおなじである〔H・マスネ〕。

しかも國民主義下の現代機構において、國防第二線を死守する青年航空の一族こそ、社會の élite として、その指導的價値を確把するものであらねばならぬ。しかも青年航空が、軍事航空の背後に存在する限り、「戰爭」は國民全體の關心事である事實が證示されて遺憾なきを得るのである。≫ Sicher ist z. B. dass der nächste Krieg alle Kräfte einer Nation in Anspruch nehmen wird, da eine jede Bevölkerungsschicht unmittelbarer am Kriege interessiert und persönlich von ihm betroffen sein wird. ≪〔Capt Claire L. Chennaut〕。しかも階級別・職業別に依る合縱連衡が鐵的に强化せらるればせられるほど、鬪志は銳尖の度を增加し「戰爭」現象より、「決定」を導き出すことの迅速性が獲得せられるのである。殊に對手國がしかける攻撃を、反撃を以つて撥ねかへし、その空襲起地を「淸掃」するが如き英雄的の試みは、この階級別・職業別に依る合縱連衡が十全に達成せられた國民にして、始めて敢行し得られるので

ある。反撃は、すくなくとも攻撃の範疇を以つて律せられよう。――それは、しかしながら至高の「防禦形式」である事を忘れてはならない。

階級別・職業別に依る合縦連衡が具現せられるに至らず、「統制」が確把せられてゐない國民に限つて、攻撃・防禦の差別觀念に囚はれること、甚しいものがあるやうである。社會民主主義國家の多くは、この流亞であつて、人民は軍事費の支辨を澁り、負擔を輕減し、甚しきに至つては、それを階級別に局限しようが爲めに〔例へばマルキシズム〕、國家樞要の軍事施設を、プログラム中より削除して能事了れりとする。かれ等の多くは意識的に、無意識的に「戰爭は、支配者同志の間で惹起されるものであつて、兵士と水兵とは、それに驅使せられるのである。大衆はたゞ重稅を負擔し、人間物資を徵收せられるに過ぎない」といふ、驚くべき謬想に侵淫せられてゐるのである。――ひとりマルキシスト間に止まらず、英米のパーリメンタリストの或者にあつても、おなじ思想内容が、別箇の形式において踏襲せられてゐるのは、危險も甚しといふべきであらう。かれ等は決して、この思想内容を、ありのまゝに提露して、輿論の齊射を浴びるの愚を成さないのである。擬裝するに、うらゝかな社會民主主義の衣裳を以てする。

たとへそれほどでなくても、古めかしい攻撃・防禦の對立觀念を復活せしめ、軍事費を、消極的施設のミニマムに、切り下げようとするものもある。かれ等は軍備を、防禦的〔狹義の〕のものに跼蹐せしめ、國防上、重大な罅隙の生ずる事を知らないのである。L. Chennauet は「實際爆撃機一臺の爲めに要する經費を以つて、五臺ないし六臺の戰闘機を製作することが出來るのである。――また一臺の爆撃機に要する人員を以つて、五臺の戰闘機を操作することが出來るのである」といふてゐる。勿論、これは機砲裝備單坐戰闘機の出現に依り、爆撃機が、すでに今まで考へられてゐたやうな無敵性を、發揮することが不可能視せられるに至つた後の戰術的經濟論として聽くべしである。しかも想を、この新型單坐機獨自の機能に致さず、只その製作費を對比し低廉なる理由を以つて戰闘機を――それに隨伴する防禦理論を主張するものありとすれば、これまた甚しい錯覺であるといはねばならぬ。すべからく國家國防の必要に應受して、財政豫算を按配し、その財源を考究すべしである。絶えて財政豫算を本位となして、國家國防の施設を制肘することがあつてはならぬ。わが封建期にありて、「入るを計つて出す」といふモツトオが、國家および一家の經濟的準繩に擬せられてゐた。これは、しかしながら現代のそれではない。今日の

殊に時局下の準繩は、これを逆にして「出づるを計つて入る」ことを尋究しなければならぬ。ひとり英米のみではない。世界いづれの國家に就いて觀察しても、既往において、その國家が當然必要とする國防型態は、財政豫算の現狀の爲めにねぢ歪められてゐないものはなかつた。しかるに既往におけるパーリメンタリストは、「國防は須らく財政と調和を保つべし」といふテーゼを案出し、危險な鰐隊を露呈する國防型態であるにも拘はらず、ねぢ歪められたものを正認しようとして腐心した。「レキシントン」乘組の中佐L・D・ウェップが「アメリカの海軍飛行機は、艦隊より分離せしめることの出來ない一部分であつて、僅少な日數の內におそらく國防の第一擊を遠方に加へ得る巨腕である」といへるに鑑みるがよい。ひとりアメリカの海軍飛行隊のみならず、かれの渡洋作戰なるものが、名實ともに「進攻的」のものであるにも拘はらず、かれはこれを國防のプログラムに內包せしめてゐるのであつた！

それのみか、さながらラオコンの毒蛇のやうに、日本を緊めつけようとしつゝあるものは、軍事的意義を多大に包隱するアメリカ空路である。この意味において太平洋の戰術的價値〔空中戰〕は、「海上より日本を攻擊することは困難である」狀態も改善せしめられ、すくなくとも日本に

取つて重大性を增加して行つたのである。すゝんで國內と、國外との航空動脈を完成するに非れば、われは網にかゝつた小鳥にだも若かなくなり、切迫的の重壓は、日本の四周に殺到するに相異がない。但しアメリカの投げかけた網は、尨大なものであるけれども、目下のところ、その目は、「細かさ」を缺いてゐる。——われ等はこの間隙を通じ、制空の羽ばたきを開始する餘地は未だ至るところに殘されてゐたのである。これも、しかしながら今暫くの間であつて、輪廓が整つた後は、急速に網は締めつけられ、目はその「細かさ」を增すであらう。曾て稱へられた「非常時」とは、畢竟、この切迫的狀態を、簡約に豫測し表現したものに外ならなかつた。

「東洋の緊張」を遙望してゐるフランスのヂアーナリストは「日本の政策は、陸に對して攻擊的に、海に對して防禦的であらねばならないやうに觀察せられてゐる」といふてゐる。——これは頗る常識的な觀察である。われ等は、しかしながら攻擊的・防禦的の、古色蒼然たる對立意識を淸算し、單一な「戰爭」理念を、そこに置き換へるであらう。そして階級別・職業別に依る合縱連衡を具現し、こゝに∨conjunctis viribus∧〔團結力〕を强化することのほかに、切迫せる環境に對し、善處する手段のなき所以を、こゝに强調するであらう。

「侵略に抵抗することの出來ない國民は、絶えず、侵略に暴露せられてゐる。その外交政策は必ず軟弱であつて、外交條約は、常に不利益な條件下において取り結ばれてゐる。――なんとなれば、國民は權利・正義觀念の命ずるところに依つて、自分の主張を、貫徹する實力を缺いてゐるからである」。〔グローヴア・クリーヴランドの言葉〕。

權利・正義觀念は、それを生き〳〵した感觸に齎す下部工作を通じて、はじめて效果的な或物であり得るのである。物體と、物體との關聯を超えて、現代意識を物語る何物もあり得ないであらう。しかるに想を下部工作に致さず、物體的範疇の彼岸に佇立して、戰爭および平和の技術を、眞劍に考察しようとするイデオローゲンが、時々、見出されてあるのは、一種の奇蹟にあらずして何であらう。

われ等は常時において、非常時にありては尙更、民族的モーラルの效果を强調することにおいて、何人にも劣るものではない。民族的モーラルは、しかしながら具體的にして、眼で見られ得るところの、すくなくとも高價な「工作」を濾過することに依り、はじめて評價に値する一課題であり得よう。世界を彩描するものは、決して「觀念」の分布圖ではない。豪華極まる物體工作の躍動せる〈Hypotyposis〉でそれはある！

「物體と力との概念は自然に適用せられて決して分離せしめる事が出來ない」〔Fr. A. Lange, Geschichte des Materialismus. 2. Reclam. S. 277〕。この古めかしい唯物論者の理論は、若干修正を施して、そのまゝ現代機構を說明する最後のプリンチープであり得よう。

民族的モーラルが物體機構の廊下を通じ、「力」となつて快露する營みは、最も端的に歷史性の支配を受けることを忘れてはならない。むかしの「力」は必ずしも今日の「力」ではないであらう。日本刀は、遂に今日の脅威とはならないのである。それのかゞやかしい傳說を、今日の「實踐」と混淆するものありとすれば、それこそ由々しい認識の不足であらねばならぬ。戰爭の技術ほど、辯證法の作用を强く攝受するものはないであらう。「むかしの武士は組討を好みたるゆへに、相撲を武藝とせしなり。近世戰法そなはりて組討を好まず。故に武藝とせざるなり。是故に今は、下賤の業となりぬ」と、平直方は『夏山雜談』にいふ――。われ等は、〈Practice created theory and impelled it onward〉の理論を、こゝに認識しないではゐられない。

手工業が、機械工業の爲めに止揚せられた後は、民族的モーラルも「力」の具現を完成すべく

もはや原始工業の廊下を求めずして、近代メカニズムの核心を把握するであらう。――そのエリートは航空機關である。

飛行機は、進攻の道具である同時に、また防禦のそれであらねばならない。「大空は何處にもある。各戸の軒までも連續して、絶へ間なく、航行の出來る大洋である。それ故に『空の脅威』は何處にも存在する。そして『全空中戰』主義が、大膽に唱道せられるので、いよ〳〵形勢が切迫する」〔アンリ・プーゼ〕。

しかしながらふたつの國が、科學のおなじ水準に佇立してゐる時、極力戰爭現象の勃發を未然に防止しようとする足掻きが、彼等の間に目堵せられてあらう。しかるにその一方の科學が、著しく低い水準にためらつてゐる場合、その國は、それに隣れる強國の恣なる空襲の危機に露呈せられてゐることは、倫理學的判斷ではどうする事も出來ない論理學的必然性ではないか。

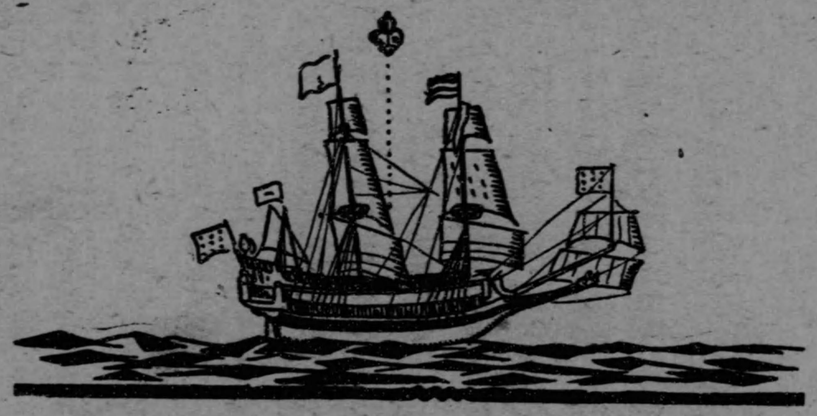
しからばこゝに、空襲管制の方法を問ふ――。

解答は頗る簡潔である。それは、わが科學の水準を高上せしめることに盡く。卽ち工業能力を整備して、國產飛行機・發動機を可及的早期において、大量生產を可能ならしめる機能を、把握するにある〔――他國人の血と、汗とを以つて凝結せられた飛行機を買ひ集め、それを羅列して「空の砦」が構築せられ得ると考へるは、餘りにも「東洋的」である！〕。

いづれの國といへども、國防の問題を重要視することにおいて變りがない。但し問題の認識に多かれ少かれ、若干の不足を含有する時に忽ち危機の殺到する間隙が提露せられるのである。曾て英國に、空軍軍縮を目的とするマクドナルド案なるものが唱えられたが、これに對し、フランス代表ナドルニイは註釋して、一國の軍事組織において、地平線防備と垂直線防備との間に、區別を設けねばならない。一方においては陸軍および海軍が、他方ありては空軍が、相互にこれを代表する。地平線防備しか準備してゐない國を攻撃するには、單に一中隊の兵員も、一門の砲も一隻の軍艦も、出動せしめる必要はない。これを荒らし、これを破壞する爲めには、航空隊の攻撃で十分である、といふてゐる。

わが封建人は、日本橋の水がロンドンに通じ、船舶に依る「物體的」壓力が、水平に殺到することをさへ辨へてゐなかつたのである。現代人は、軒から軒まで空つぐきであり、飛行機を道具とする「物體的」壓力が、垂直に襲ひかゝることをよく認識してゐる。

「物體的」壓力は資本家に對する市場の如く、國民に取りては客觀的範疇であつて、人間の主觀意識の産物である善惡判斷〔倫理學〕、若しくは正邪判斷〔法理學〕の彼岸に橫はる自然律であり、歷史的法則でもある。弱小國は、この壓力を回避しようが爲めに、軍用航空の廢止を主張し、それは「航空の國際化なしに、材料的にも不可能である」所以を說く〔ド・マダリアガ〕。彼は、水平よりも垂直への伸展を是認しても、それは「國民」の名義の下に營まれてゐるといふ重大な認識を缺如してゐた。國民の「名義」を抹消した歷史は、如何に稀薄なものであらう。生物學的原則に從ひ、「マクドナルド案」の措定として働く「人道」目標に到達する以前に人間は死ぬ。——それ故に自然律を「國民」の名義の下に集約する〉Laconique.〈は、征空を目的とする英雄的行爲において、それの極致を見るのである。それはまた强大國に課せられた至高の倫理でもあらう。——なんとなれば蒼空より試みられた爆擊は、たとへば事變前の上海のやうなソドム化せる都會に、蒸化せられ勝ちな〉Verwesungsgeruch〈〔頽廢氣分〕を解消する第一級的功果を持ち得ようから。



戰爭と技術

希臘人は、たゞ人間のことばかり顧慮して自餘の宇宙については殆んど無關心であつた。しかるに近代の人々は、たゞ宇宙のことをのみ顧慮して人事を等閑に附して省みない、とはヂアン・ラスキンの言葉である。人事を等閑に附して宇宙の事物をのみ凝視する結果、あまりにも甚しき「分業化」「專門化」の弊に陷つたのは、正しくも近代文明の、あまり芳しからぬ特色と見るべきである。

アダム・スミスが「分業」理論を提唱して以來、あらゆる學問・事業の「專門化」といふことが、必要以上に過重視せ

られやうな結果となつた。現に政治上では、行政・立法・司法の分立說が、ながらく論議の對象となつて、あまねく正認せられてゐたのである。文官と武官と、更に國民との間にさへ障壁が設けられ、それ〴〵自分に割り當てられた分野に跼蹐し、他の分野に屬する事物に對しては、我不關焉の態度を執拗に持してゐたのも、亦かうした「時代」條件（Zeitbedingung）の反映であつたと思惟し得られる。

しかるに今日では、時代の條件は轉換しつゞけてゐて、すでに昔日のものではない。最新科學の伸展は、その效果を綜合し、技術を交流せしめ、相互に補整し合ひ、こゝに有機的全體を織成することに依つて、始めてそれ〴〵の機能一〇〇パーセントを發揮する、といふ事實を證示するに至つたのである。極端な中央集權に立つナチズムス及びフシズモの如き、この「時代」條件を擔つた政治型態であるといひ得られよう。われ等はいま、これ等の政治型態には觸れず、そしてこの「時代」條件を擔へる技術型態について、若干說明をつゞけるであらう。

一九三三年十月一日、當時の佛蘭西空相R・コットの努力によつて「エア・フランス」稱する「單一」會社が設立せられ、こゝに同國における航空統一が、ともかくも成就せしめられたのであつた。しかるにこれよりも、哲學的背景に富み、われ等の關心を深めるものは、獨逸における船舶の艤裝集中であつた。「狀勢が顚倒して、もはや衰微するの外なきに立ち到り、年々、國家の經濟力は弛緩し、海上貿易は影響を受けざるを得なくなり、ついで財政の危機が訪れて來た」のは、今次歐洲大戰の直前であつた。そしてこの危機に抗すべく、「垂直的にも水平的にも、あらゆる事物が、こぞつて『集中』を唱道した」のである。かくして各種造船業者の間には水平的の、それと政府との間には垂直的の集中が實現し、こゝに隣邦佛蘭西の評論家G・ド・ローランをして、「世界各國を通じて、垂直・水平の西方面にわたつて、獨逸以上に『統制』をすゝめ得たものはない。驚嘆を以つて待望せられたこのシステムは、至るところで、多少の模樣式へを加へて模倣せられた」[1]と、やゝ羨望に似た言辭をなさしめるに至つたのである。

垂直的集中および水平的集中といふ言葉を、東洋的に解釋すれば、合縱・連衡の意味に該當する。合縱・連衡は國家統制の二樣式であつて、殊に現代におけるが如き決戰態勢下にありては、血腥きあらゆる相剋關係を淸算して、この合縱・連衡が形而上的ないし形而下的に示現せしめられなければならない。形而上的には國民全體意識の强化であり、また形而下的には作戰資材およ

び作戰技術の多角形的綜合である。

作戰資材および作戰技術の多角形的綜合型態を通じて、こゝに國防の形而下的基礎が强化せられるのである。

1) Cf > La Marine Allemagne < —— Le Yacht. No. 2667. 5/Mai. 1934.

國民の全體的意識であると、作戰資材および作戰技術の多角形的結合であるとを問はず、「綜合」にむかふ過程は、人爲的に營爲せられるものであるか、それとも自然的に經驗せられるものであらうか。

これが形而上的の場合にありては、如何にもヒツトラア或はムツソリーニのやうな指導者の意志を通じ、人爲的に試みられることもあるだらう。そこには、しかしながら不自然な或物が、多かれ少かれ保存せしめられ、したがつて不作法な葛藤が、そこに惹起せられざるを得ないのである。形而下的の物體結合においても、はじめから「綜合」目標を把握して、意識的な道程をおしすゝめることもあらうけれ共、それの背後には、意識するとせざるとに拘はらず、否でも應でも——willy nilly——そうしなければならない必要が、いはゆる「客觀的範疇」となつて、切迫的に働きかけてゐるのである。

たとへば日本とおなじく、石油を生產しない佛蘭西が、或る物體二種類を結合して、代用燃料〔粉末石炭四〇%＋マズウ六〇%〕を得るが如きも、いはゆる「必要は工夫を生ずる」[2]ことの現實の證左であらう。ひとり工夫を生ずるのみではない。工夫せられた新器材を活用することに依つて、政策を確定すること、航空におけるが如きものがある。即ち佛蘭西における「統一」において、空軍以外に屬する航空能力の「綜合」を成就したが如きこれである。

政策は、こゝに航空能力の「綜合」を成就するとゝもに、それの最高「綜合」は、こゝにまた新しい活用と工夫とを生み來るのである。AとBとの綜合は、絕えてABではない。それは本質的に新しいCであらねばならない。ア・ベロが「航空の技術的問題を『綜合』して一瞥すると、こゝから資材の『創造』に推及する」[3]といふてゐるのは、この理論をさながらに開示してゐるものであらう。

2) Cf. > Combustibles de l'avenir ? < Le Yacht. No. 2673. 16/Juin. 1934.
3) Cf. > La politique aérienne du général Denaine. < L'Aviation Française. No. 263. 17/Mai. 1934.

兵器および戰術の多角形的結合型態が、防禦・攻撃の作戰行動を展開するに際して、如何なる程度までに英雄的な、そして「創造的」な威力を發揚するであらうか。わたしは、それの解答に對する試案として、ロシア人であるA・ヴォリンスキイ〔A Volinskii〕の戰爭理論[4]をこゝに批判するであらう。——彼は專ら「海上における空軍力の結合せられた攻撃」を主題として、叙述のペンをすゝめてゐる。

ヴォリンスキイは、敵の空軍起地ないし艦隊に對し、「各種兵器の結合に依つて爲された戰爭行爲」の、如何ばかり、その效率を高め得るものであらうかを證示しようがため、先づ空軍が一艦隊と結合して行動を開始した場合を想像してゐる。この時飛行機編隊は、結合行動に遲れないやうに出發しなければならない。この結合を通じてのみ、「脅威」〔Überraschung〕——結合行動

の本質的效果——を敵に與へることが可能であり、また都合よろしき機會を捉へて、準備を怠つてゐる敵に對して、痛撃を加へることも出來るのである。即ち「結合攻撃」の目的とするところは、或る一定の刹那、最高能力を以つて敵に觸接するにある。

「結合攻撃」の有利な效果といふのは、敵の注意を攪亂し、その砲火を分散せしめることに依存する。それで天候關係〔雲〕や低く擁塞せしめられた煙幕の援護下にあつて、多方面より攻撃を開始するがよい。或は非常な高速度を以つてカーヴし、或は垂直・水平運動に馴らされることを肝要としよう。そして「結合攻撃」が特に有利な場合は、〔一〕敵が或る海軍根據地を襲撃する目的を以つて機雷敷設區域を通過する場合、〔二〕敵が或る海岸で上陸作業に從事してゐる場合、〔三〕大洋上の海戰、〔四〕一艦隊が敵基地を攻撃する際等である。

右に要約したヴォリンスキイの「結合」理論に、頗る重要な暗示ひとつが內包せられてゐる。即ちそれは各種兵器ないし戰術の多角形的結合型態が、實踐に際會して效率のマキシマムを發揮することは、捉へられた絶好の一瞬間に限られてゐる、といふことである。「攻撃を開始しようがため、吉日を選ぶなぞいふてゐると、全戰爭期間、その好機は逸し去るであらう」[5]といふ將軍

アルマンゴウの言葉は、少くとも膽汁質指揮官に對する適切な警告として聽くべきであらう。

各種兵器は、それ〴〵獨自の目的と限界とを有し、これを以つてかれに置き換えることは出來ないのである。かく相互に「異種性」〔Heterogenität〕を有するものより、最も「本質的」な戰鬪要素を拔き出し、これを結合・綜合することに依つて創造せられた攻撃力のマキシマムを發揮し得る瞬間は、全戰爭期間中、ほんの僅かしか與へられてゐないのである。——この瞬間を把握し、それに應受して結合・綜合すべき武器を選擇する營みは、全く指揮官その人の叡智に俟たねばならぬ。卽ち多年の體驗と、かゞやける判斷とを以つて組成せられた「天才性」の快講であると考へられる。

4) Vgl. Deutsche Luftwacht, Bd. Nr. 2 S. 52—54

5) Cf. Revue Militaire Française, Nr. 148 vom November, 1933—Vgl. 〉Die Leitgedenken der Organisation des Luftheeres〈 Von General Armengaud. Deutsche Luftwacht, Bd. 1, Nr. 7, S. 250—253

戰車の如きも、戰線突破の目的を以つて絶好の瞬間に乘ずる兵器である。戰車を目し、獨立した兵器であるとする論者もあるけれ共、戰車は由來、甚だ狹隘な視達範圍しか有し得ず、時としては煙幕の內をさへ進まねばならない。こゝにおいて戰車と飛行機との結合が考察せられるに至つたのである。この課題を取扱つたものとして、こゝでわれ等は、F・W・フオン・エルツエンの論文[6]を參考に資するであらう。

フオン・エルツエンは、飛行機が如何なる利益を戰車に附與するかを吟味して、「飛行家は『眼』を、自分の最も本質的な武器と考へてゐる。しかるに戰車隊には、最も必要な眼が缺如してゐるのである。それで飛行家自身は、盲目戰車の『空まで伸びた眼』に外ならない」と考へてゐる。それで戰術的指導の任に當つた飛行機は、地上の戰車隊に攻撃の方向を通知し、命令を傳達し、「照明」の實を擧げて、戰車をして敵砲火の下に、暗中模索するの危險を防止せしめる[7]のである。

それで飛行機が戰車に對する關係は、さながら潛水艦に對するのと、おなじきものがあるだらう。潛水艦同志は潛水中、聽音器に依つて通信することが出來るけれども、戰車はそれが出來ないのである。たゞ空よりの警告を以つて、戰車同志の衝突を防止することが出來るといふ相異が

ある。「實際の場合において、戰車と飛行機との結合には、いろ〳〵の困難が伴つてゐる。この困難は、しかしながらいづれの武器の結合においても、いろんな方向にわたつてまぬがれることが出來ないのである。先づそれの克服は、世界の全陸軍を通じて、或る單一武器より全體を構成することに依つて成就せられることが出來るであらう。——この單一武器こそは、戰爭機械として、近代軍隊の課題を解決すべき至高の地位を占め得るに相異がない。」

6) Vgl. 〉Zusammenwirken von Tanks mit der Luftwaffe. 〈 Von Oertzen. Deutsche Luftwacht. Bd.I. Nr. 7. S. 250—254.

7) イギリスにおいては戰車指導用として、遠き以前よりアウトジロ機が最適と認められてゐた。——それの速度が戰車の速度と大差なく、戰車隊と規則正しい接觸を維持するに足るといふ地位を、常に占め得るといふ點で、普通の飛行機よりも、はるか大なる便益が是認せられてゐたのである。

しかしながら單一の、そして萬能力を保有する「戰爭機械」〔Kriegsmachine〕を製作することは、今日のところ、未だユートピイの域を脫しないのである〔殺人光線〕。今日において、われ等が責任を以つて物語ることの出來るものは、兵器ないし戰術の多角形的結合型態を超越したところの何物でもあり得ないのである。單獨の武器に依つて巨人的萬能力を發揮せしめようとすることは、現代における科學の伸展段階を以つてしては、絶性的に不可能なのである。して見ると「空軍の絶對的テーゼ」を思辯——しかり、よしんばその全部ではないにしても、かなり相當の部分は、すくなくとも「思辯」であり「叙事詩（エーポス）」である〔！〕——したドウーエその人のラテン的構想は、「あまりに先走り」してゐるのである。それで「空軍は、陸・海軍に取つての共通の一要素である。そのいづれの機構にも包括せしめられ、いづれの役割をも勤め、また獨自の機能を以つて他を補整する。空軍集中の、ないし空軍經濟のプリンチープは、如何なる場合にありても空軍を陸・海軍の補助機能として常に分立せしめ、外表においては、それの限界を明確にすることにある」[8]といふ程度が、蓋し最も科學的な、そして實踐的な空軍理論であると思惟し得られよう。ミツチエル將軍に依つて代表せられてゐる「航空狂者」〔Uber-Luftenthusiast.〕は、所詮、一種の山師であつて、祖國の光榮ある防禦に對し、價値高き何物をも寄與することが出來ないのである。

「レキシトン」乘組の中佐L・D・ウェッブが、「アメリカの海軍飛行隊は、艦隊より分離せしめることの出來ない一部分であつて、わづかな日數の內に、おそらく國防の第一擊を遠方に加へ得る巨腕である」といふたのは、必ずしも自畫自讃の言辭ではなかつた。少くとも海軍飛行隊の理解に關する限り、爭ふべからざる眞理が、そこに物語られてゐたのである。航空母艦は海戰に際して、それ獨自の課題を有してゐる。しかしながら「用意周到に組成せられた艦隊は、組織的全體を具現してゐるのである。航空母艦は、この組織內の確實な一機構として存在してゐる」[9]といふ事實も、併せてこゝに正認せられるべきである。——更にまた、かのH・ラツセルが、戰艦上に裝備せられた飛行機を主題として、「空と水との聯繫を緊密にし、防禦のプラツトフオームとしての戰艦性能を强化すべきである」[10]といへるに、作戰資材および作戰技術の多角的結合型態を豫想して止まない現代意識の最高頂が見定められてあらう。

8) Von General Almengaud.

9) Vgl. ＞Der Flugzeugträger Lexington. ＜ Von Kpt. Ltnt. L. D. Webb. U. S.-N. Deutsche Luftwacht. Bd. I. Nr. 4. 〔Aus „ U. S. Air Services. Nov./1933〕

10) Vgl. ＞Ist der Flugzeugträer zu entbehren ? ＜ Von Sir Herbert Russel.-Deutsche Luftwacht. Bd, I. Nr. 4 〔The Nawal and Military Record. 5. Oct./1933〕。

II

「高度國防」の達成をして遺憾なからしめんには、先づ社會各層に醞釀するところの觀念型態の階級的差別を止揚して全體化すると同時に、あらゆる部門に發達した技術の職業的對立を渾一して、至高の綜合に向はしめねばならない。觀念型態の全體化と技術の綜合において、「高度國防」の理念は成立するのである。

フランスの海軍大佐カステツクスは、「武器の連結」といふことを課題として、頗る有意義な考察を試みてゐる。この連結は、殊に最新兵器間に看取せられた現象であつて、連結關係は、更に武器以外の尖端的諸裝置にまでも擴充せしめられる可能性を有つのである。商船が軍艦として機能一部を果し得ることは、決して新しい問題ではない。更に飛行機に至りては、平時の機械で

ある。曩にわが松平全權が、ジュネーヴ軍縮會議において、廢止を提唱した飛行機離着裝置を施設し、最優秀商船の如きは、軍艦にあらずして、大洋上で、第一級的效果を擧げてゐる商船なのである。卽ちカタパルトおよびデリックに依つて飛行機を「射出し」、又これを「捉ふ」所作を營むものである。目下のところ本裝置はたゞ、郵便機を射出するに限られてゐるやうであるけれども、追ては旅客機にも、適用を見るに至るに相異がない。しかもこの種の裝置は、經濟的の問題であるといふもに、軍事的の問題ともなるのである。おなじくフランスのV・バルジョウ大尉は、「カタパルトを使用する航空機の艦上歸着の可能性」といふことを主題として論述するところに依ると、大尉は先づ「カタパルトを使用する航空機の艦上歸着の可能性とは何であるか」の問ひに對し、われ〳〵はこれを行動中の戰鬪艦上に歸着する事をいふのである」と理解し、しかも「この問題は、未だ解決せられるには至らない。キヴルないしハインの布を艦尾に伸べて斜面を作り、航進中、その引揚げを容易ならしめることは、一九三〇年以來、ドイツで試驗せられたのである〔汽船ルユッツオウ號〕。この裝置は、着水を容易ならしめる爲めに、工夫せられた譯ではない。航行中の船舶に對して、豫め着水した水上機〔スタッゼゲル〕を捉ふる爲めに考案せられたのである。またそれは船舶が、適當な速度——十二ノツト——ならでは、利用する事が出來ない缺陷がある。しかしフランスでは水上機運送艦『コンマンダン・テスト』[1]號に對して、これを施行した。またスウイデンでは、巡洋艦『ゴトランド』[2]號の爲めに、これを適用した……」といふてゐる。

飛行機そのものが、平戰兩用の道具であるといふもに、この飛行機の一定量を搭載する商船、若しくは叙上「コンマンダン・テスト」號のやうな水上機運送艦は、その機能上、航空母艦と、何等の差別も認められなくなるであらう。——しかも水上機を〔歸着した〕を、艦上に「捉ふる」所作が敏活に行はるれば行はれるほど、その軍事的價値は高められて來るのである。

1) 基準排水量一〇、〇〇〇噸、速力二〇・五ノツト、雷撃機二五〔この中、常用機數約一〇〕。水上機用カタパルト四基。本艦は軍備制限條約の航空母艦に該當せざるもの——以上は有終會編『海軍要覽』〔昭和八年版〕航空母艦一覽表に依る。なほ本艦は、大戰後、フランスの民間工業に依つて、全部建造せられた軍艦中、重要なものである。艦内には三大工場を備へ、金工および木工機關を設備

し、また水上機の操作用として電氣起重機五臺、間隔を置いて据付く。格納庫の高さ七米、二大支柱を以つて支持してゐる。繒油分配の完全な裝置を有し、「かく艤裝すると本艦は、迅速なる移動可能性を發揮する優良な海軍航空基點を構成する」といはれてゐる。そして「本體の利用は一九二七年起工以來、飛翔方法の發達に依り、特に有益の度合を增加した。また試驗施行中、新方法に依るカタパルトおよび着水の進歩を見た。これ等の考案を支配した遠大な目的のお蔭で、本艦の利用は當初、豫期しなかつた以上に擴大せられるであらう」云々。——本艦が飛行機に對する防備としては、一〇〇mm 砲十二門、外に三七mm 砲八門および機關砲十二門を裝備。定員は士官四十二名・下士官および兵六百名。そして「參謀室は最新式に依つて考案せられ、同時に美術と實用を兼ねた特種裝置を以つてし、士官・乘組員並びに附屬設備〔浴室・洗面所・瀧水浴・理髪室および休憩室〕は、全員に最大安樂を與ふる爲め同樣に考慮せられてゐる」。なほ本艦性能として、特に顯著なるものは、燃料消費の節約の爲めに、特別の工夫が施されてゐる事である。なほ詳細に關しては、Cf〉Le Transport d'eviation "Commandant--Teste" 〈——Le Yacht, No. 2559, 9/ Avril 1932.

2) 本艦は三ノットの速力を有し、馬力三萬三千、八基の飛行機を搭載してゐる。

V・バルジョウ大尉は、更にその報告をつゞけていはく——「大速力航進の艦上に歸着することの可能な他の方法は、極く最近、有名な技師ソーニイクロフトが、イギリスにおいて發明したばかりである。これは船尾に大傾斜面を下垂するのである。しかる時は、航跡の作用として波立ちはするけれども、海面を平らにするであらう。船が高速度が航進するならば、尚更可なりである。三、四千噸位で、三〇ノットを發揮し、水上機六基を收容すべき『水上機運送艦』の雛形が設計せられてゐる」云々と——。

これ等の新裝備は、平時にありて、大洋を跨いで設定せられる國際航空路の可能性を、かの「浮き島」裝置〔V Seadrome 〈〕なぞよりも、はるかに手輕に、經濟的に實現せしめ得るであらう。しかもこの文化的恩惠は、科學それ〴〵の分野における成果を結合して、叡智を綜合して、それの價値マキシマムを擴充するのである。叙上カタパルトおよびデリック裝置は、專ら軍艦ないし商船と水上機との結合である。しかるにその後、イギリスでは、軍艦ないし商船と陸上機との結合に關する一計企が傳へられてゐた。わが大尉は論をすゝめ、「終にイギリス海軍省では、現に『着陸筏』を試驗しつゝある事實を報告しよう」といへるもの、卽ちこれである。——これ

は高速度を以つて曳船する筏の種類に屬し、「車輪を有する飛行機」の降着臺として役立ち得るものである。故に「イギリス人は、一九一八年の解決――即ち陸上型飛行機と飛行臺とを結合するシステムを、忠實に固守してゐるやうである」。

勿論、水上若しくは陸上型飛行機と飛行臺〔艦船上に裝備せられる〕との結合の現狀態は、今日における科學および技術の段階に照し、未だその到達せねばならない最高限界までに、相當の開きがある事は爭はれない。即ち「現狀においては、巡洋艦または輕巡洋艦の、カタパルトを使用する航空の艦上歸着の問題は、軍事的には解決せられてはゐない。この航空は、歸着に對してなほ沿岸基地と連絡してゐるかのやうに見られる。技術の現狀に於いて、これは殊に狹い場所の海軍航空である」[1]といひ得られる。して見ると水上機が、艦船に「歸着する」事の可能性が――即ち「捉へる」事のそれが、艦船と飛行機とを結合する契機となるであらうことが、こゝに分明するのである。

艦船と飛行機とが結合する事の、もうひとつの實例は、飛行機が潛水艦に對する護衞として、使用に供せられた場合を擧げ得られる。しかしながら「この防衞使命の爲めには、敏活ならざる

航空方法でも十分である。それは畢竟、戰鬪艦の檣樓の、動的延長たるに過ぎない」から……。この目的を達する爲には、オートジロ機が理想的であるかのやうに考へられた。この實驗は「ラングレイ」號上で行はれ、機は降着に際し、五米も轉らなかつたことが證示[2]せられてゐる。

戰鬪艦の檣樓が「眼」の役目を勤めるものとすれば、飛行機は、最も鋭尖な「眼」を具備した移動監視所であらねばならない。これを軍事航空の範圍外に擴大すれば、警察の役割に該當するであらう。航空警察、即ちこれであつて、最近、アメリカ合衆國のニューヨーク市ほか數箇所では、オートジロ機を以つて、これに代へられようとしてゐる事實が報告せられてゐるのも、軍事航空と、おなじ機能を果さうが爲めに外ならないのである。「結合」は、相互に足らないものを補整しようが爲めであつて、限られた範圍内においてのみ、可能性を有つたに過ぎない地上・水上の諸單位に對し、學術・經濟および軍事のいづれを問はず、航空は最も重要な助力を附與してゐるのである。航空工業そのものが、あらゆる重工業の綜合的產物であるとゝもに、航空の機能そのものも、亦すべての機能の綜合的役割を果すのは意味が深い。

航空母艦は、水上艦船と飛行機とを結合したものである。しかるにアメリカ合衆國では、「飛

行船の型體が伸展するといふもに、これを航空母艦として使用するの計畫を樹立した。……卽ち視達範圍を擴大し、飛行船と水上艦の間に、郵便物の遞送および人員の運輸に從事するであらう」[3]といふに至り、こゝによく航空の綜合的役割を明瞭に開示してゐる。——空・水・陸の三身一體が、經濟的に多大の效率を發揮するといふもに、軍事的にも有利なる條件かず〳〵を附與するのである。殊に航空機關に見る速度・視達範圍の廣大は、水上・地上諸機能の能率をして、幾何學的級數において、これを增大せしめる「魔術者の杖」である！

1) Cf ＜Les orgines et les tendences de L' Aviation embarquée＞——La Revue Maritime, No. Août. 1933「艦載航空機の起原および傾向」と題する論稿參照。

2) 參照、同上八六頁。

艦載航空の役割は、專らこの「索敵」作業にあるやうである。世界大戰當時、ドイツの巡洋艦「フリイドリツヒ・カアル號」の甲板に、當時にありては最新裝備を施した水上機を搭載したといはれてゐる。またドイツの水上機根據地がワルネミユンデに設けられ、カテガット一帶の「照明」に寄與するところが多かつた。その後、また一箇所、ルユーゲン島のザスニツクに增設せられ、その航續力は遠く、バルチツク海中央を、東方に延びてゐたさうである。これ等はいづれもA・スピンドレルのいふ通り、水雷艇にして待機中のものが缺如してゐたから、水上飛行機がその不足を補塡して、「眼」の役割をつとめた初期の體驗とらふべきであらう〔Cf. ＜En Baltique de 1917 à 1917＞〔Souvenir d'un ancien officier de la marine impériale allemande〕——La Revue Maritime.No. 156./157 Dec. 1933./Jan. 1933〕。

3) Cf ＜—— Le dirigeable porte-avions ＜—— La Revue Maritime, 148 Avril, 1932

水上飛行機を「捉へる」こと、卽ち艦船へ歸着する問題は、未だ技術上、完全な解決を見る事の出來ないのは前述の通りである。しかしながら、その絕對的解決が未だ達せられてゐないとはいへ、相對的に解決せられてゐるものは、直ちに經濟的の利用に供し得られるのである。例へば大西洋橫斷飛行の安全性を維持する爲めに、かの「ウエストフアーレン」號を停泊させ、デリツクを以つて郵便飛行機を引揚げ、給油その他必要な補給を爲した後、カタパルトに依つて射出する營みの如きは、中間着水の必要を見ずして一氣に大洋橫斷の可能性と安全性を具備する「飛ぶ

船」が出現した曉の便利さを想像すると、未だ甚だ不手際な方法であるかも知れないのである。しかも現段階においては、「ウエストフアーレン」號の方法は、依然として絶對的のものであり得よう。——卽ちこの方法に依つて、獲得せられたる經濟上の利便は疑ふべくもないのである。一九三三年七月十一日、「ドルニエ・ワール」〔D 2069 V Monsun 八〕機に依る試驗飛行において、九時三〇分にバサアストを離陸し、「ウエストフアーレン」號に中間着陸を試み、翌日十八時五十五分にブラジルのナタアルに到着した。この純粹の飛翔時間は十五時間と五分であつたと報告[1]せられてゐる。

アメリカ合衆國の資本を以つて計畫せられた「浮き島」裝置の如きも、「ウエストフアーレン」號とおなじイデーが產んだものであつて、現代技術の水準が誇り得る絶對的價値を開示してゐるのである。太平洋を隔てゝ、アメリカ合衆國と對峙する誰一の文化國は、日本である。しかも日本には、獨逸若しくはアメリカ合衆國の方法に準據し、航空機關の驅使に依る「太平洋把握」のイデオロギイが、社會いづれの分野にも擡頭しなかつたのは何故であるか。それは資本の缺乏といふよりも、殊に民間航空の分野における技術の水準が低く、しかもそれを先進諸國の水準に追ひ付かしめるべき、何等の努力も試みられてゐなかつたからである。先年、軍艦「春日」は皆既日蝕觀測隊を南洋委任統治領「ロソツプ」島に運び、帝國海軍が學術の研究に、重要な寄與を成したことは、われ等の大に多とするところである。しかるに若し、これが先進國の計企であるとすれば、該觀測隊は、必ず氣球を附屬せしめ、成層圈を、研究の視野に內包することを忘れなかつたであらう。これを以つて見ても、わが國における「太平洋把握」のイデオロギイは、その立體性を缺如してゐる點において、甚だ跛行的の型態において蒸化してゐたことを知るのである。イデオロギイは「全體」の理念と牽聯する。「全體」の理念は、「立體」の理念を附加して、こゝに初めて史的伸展を衝動づけるイデオロギイとなつて把握せられるであらう。

日本の太平洋における關係は、ソヴイエト聯邦の北氷洋に對するそれとおなじである。閉された氷海・變幻常ならざる突風の襲來、これ等の最惡條件に依り、深い探險作業は、常にあらゆる機械の結合を以つてしても難關に遭遇するのである〔卽ち飛行船「グラフ・ツエツペリン」號と潛水艦「ノーチラス」號ないし碎氷船「Malygin」號との結合作業——〕。しかるにソヴイエート聯邦は「北氷洋把握の爲めに、飛行機をして碎氷船と提携せしめ、英雄的作業を敢行した〔カー

ル海探險隊、セーヴェルナヤ・ゼムリヤ島、ウランゲル島およびタイムイル半島等への探險隊の奉仕」[2]といふてゐる。しかのみならず、ソヴイエート聯邦は北極の各所に、ラヂオ測候所を構築してゐることを着過してはならない。獨逸人であるW・ブルンスは、ラヂオ測候所に關するソヴイエート計企を「不愉快」な一件であるとしてゐる。なぜならば「該測候所は、氣象報告の仲介所たるの目的に外れてゐる故である」とはいふものゝ、「後日、極地觀察の的確なプログラムが組織的に進捗し、卽ち根據地が相互に連絡を保ち、本國と絶えず通信することが可能となり、これがまた冬期のみならず、夏期においても亦持續するやうに設定せられ裝置せられたならば、一九三一年と同樣な好條件の下に、飛行船に依る探險が遂行し得られるやうな氣象報告を接受し得る機會に常に役立たしめることが可能となるであらう」[3]といふてゐる。

畢竟するにソヴイエート計企は、航空機關とラヂオとを結合し、こゝにいはゆる「空の工業」なるものを樹立して、北極に「赤色圈」を設定しようとするのである。惡しき條件さま〴〵を展開して止まぬ北極の如き、到底、水上機關のみを以つてしては、把握の目的が達し得られよう筈がない〔かの〉Italia〈號の悲劇を想起するがよい！〕。また陸上機關のみに倚賴してゐては、尙更心細いのである〔イギリス人クールタウドの「橡の植民地」――スウエデンの大尉アーレンベルグは、こゝに救助飛行を敢行し、食糧品の投下を試みてゐた〕。ひとり北極把握の目的を達し得るものは「空の工業」萬端の裝備を施して遺漏なき、例へば「グラフ・ツェッペリン」號のやうな「浮遊せる觀測所」〈die schwebende Beobachtungsstation〉のほかの何物でもない。このやうな硬式飛行船のゴンドラ內にラヂオ測候所を設置し、または縣鉤にオートジロ機を垂下することに依り、あらゆる諸機能の多角形的結合型態を示現するに至るであらう。多角形的結合型態に依るに非ざれば、北極のやうな對象に對して、それの本質把握が成し遂げられるものではない。太平洋に對しても亦、これとおなじきことがいひ得られよう。

航空機關を中樞とする多角形的結合型態の作用に依る「太平洋把握」は、ひとり學術的・經濟的に有意義であるに止まらない。それは軍事的に、頗るヴアイタルな課題であることはいふまでもないであらう。

1) Vgl. ZFM. Nr. 24 Jahrg. 24. Luftfahrt-Nachrichten.

2) ソヴェート聯邦國家計畫委員會編纂『ソヴェート聯邦第一次五箇年計畫實績』〔日露協會譯本〕二四七頁。

なほ同書三五七頁にはおいて、極北地方に民族區劃設定が行はれ、その職業的經濟は改善せられ、夏期、これ等地方交通の主要通路たる多數の水路——エニゼイ、オビ、インヂギルカ、コルイマ河等々が確立せしめられた事が報告せられてゐる。勿論、これ等の水路確立は、空路の創始と結合せられて、その效率を擴充せしめられる事を看過してはならない。かくてヒビーヌイにおける大鑛業化學綜合工場、北極圈外エニセイにおけるイガルスキイ林業綜合工場、北樺太における石油石炭工業、カムチヤツカにおける纖詰工業、ヤクーツク共和國および極東民族地域における採金業の如き巨大な工業が創設せられ、更に「北氷洋横斷航路の設定せられたことは、將來、北部諸民族の經濟的・文化的興隆の爲めに、稗益すること多大である」といふてゐる。——この事實とゝもに、われ等はソビエツト聯邦におけるシベリヤ定期航空路網ないし飛行船工業の發達を考合する事を忘れてはならない。「ロシアが北アジアの經濟開發の爲めに、一層期待し得るものは中位の容積で軟式又は半硬式の飛行船にある。實際それが手頃で一層經濟的である。そして川蒸汽や碎氷船に比較すると、比較にならない程度の快速力を持つてゐる。また大氷原上を一年中、何時でも利用せられて得る。但し運賃が高いので、實際交易の行はれるものは、藥劑・外科器械・機械類および色眼鏡の如きものである。復航には毛皮・寶玉類をロシアの都市に持ち歸るであらう。飛行船は、ロシアの土地踏査および空中撮影に必須のものゝやうである。——この國には未だ土地臺帳がないのである」云々。そして「飛行船格納庫の若干數は、中位の容積で木製となし、既に各所に建設せられてゐる。殊にシベリア鐵道沿線に添ふクラスノヤルスクとイルクースクとに據點が設けられてゐる。また大河川の流域には諸方に分布せしめられてゐる。即ちエニセイ河の沿岸ツルチヤンスク、レナ河の中程ヤクーツクおよび河口ビユラン、最後にコリイマ河口ニシユネ・コリムスク等である。——いまこれ等の諸據點の全部に一瞥を投ずると、この新組織設定の目的は、先づ氷海沿岸、ツーコテイク半島およびヤークーツク地方の交易を開拓するにある事が認められてあらう。至るところに瓦斯製造工業・繫留柱・測候所および無線電信設備が格納庫をめぐつて建てられてゐる。これ等の諸地方は、中部シベリア線より北方に、著しく片寄つてゐる。その沿線の第一回踏査は、北極航空局長、ドイツ大尉W・ブルンスに依つて試みられ、將來、飛行船に依る大交易線は一層擴張せられねばならぬ。幹線は理論上、ツルチヤンスク—ツングスコエ〔エニセイ〕——ウルシヤ——オレクミンスク——プラゴエスチエンスクを縫ふて設定せられるであらう」云々〔Cf. 〉Les dirigeables Soviet-etiques〈——La Revue Maritime, No. 159. Mars. 1933〕。

3) Vgl. 〉Luftfahrzeuge als Hilfsmittels der Polarforschung〈 Von Walther Bruns. ZFM.

潜水艦が水面に浮んでゐる時の價値は、極めて低いものである。これは海上の視界が狭少なためであつて、この缺陷を補ふ目的の下に、飛行機と潜水艦との結合といふ事が、何人の想念にも常識的に浮んで來るであらう。「潜水艦と飛行機との提携は」——と、ア・トマジイは說く——「頗る奇論であつて、實踐の問題よりも、むしろ冒險小說を創作する爲めに、唱へられたやうな感がある。飛行機は水上において、潜水艦は水中において活動する。その中間に存在する水面は双方に對して休息又は通航の場所であるに過ぎない」と。しかるに以前、この冒險小說を現實化したやうなものが、パリの航空展覽會に出陳せられたことがあつた。これは佛蘭西の一技師の設計にかゝるもので、先づ潜水艦の背に筒を設け、そこに一臺の小型水上飛行機を格納する。技師は自ら筒口を開いて水上機體を取出し、軌條を滑らして翼を附け、極めて技術的な方法を以つて水上機を、その位置に引懸ける。その發翔準備が整ふと、潜水艦は靜かに沈下する。次に後退して飛行機を水面におく。また機體を收容する時は、この逆作業を營めばよい。但し海上の靜穩を要することは、その第一條件である。

この佛蘭西設計は、その後アメリカ合衆國において實驗[1]に供せられてゐる。ロンドン條約では艦隊所屬の各艦艇に、少くとも飛行機一臺を配備することが認許せられてはゐるものゝ、技術の現段階において、その恩惠を享受してゐるものは主力艦・巡洋艦および航空母艦の三艦種に止まる。それでこの試驗に依つて、この恩惠を驅逐艦および潜水艦にも擴充せしめようといふのであつた。試驗に供せられた機型は、V-S-2（或はV-1）の登錄番號を有する折疊式快速小型飛行機であつたが、こゝに技術上の困難がいろ〳〵生じ來つて、はか〴〵しい進歩とても見られなかつたのである。しかも困難の主たるものは、やはり前述の場合の如く、着水（卽ち「捉へる事」）の技術的問題に極まつてゐた。（發翔の問題に關し、叙上佛蘭西設計では未だカタパルトが考慮に上つてゐなかつたけれども、アメリカ實驗では「水雷艇上よりカタパルトを使用しない」事由が、すでに證示せられてゐたのである）。

これ等の諸問題に、ともかく解決の端緒を與へ、いはゆる潜水艦＋飛行機の結合型態を示現せしめたものは、イギリスで建造せられたV-M. 2（號であつた。本艦は、甲板上に止水堰が設け

られ、二座席翼折疊式小型水上機を格納するほどの容積を有してゐる。この堰即ち格納庫は司令當直室の前方に位地を占め。その前上部には十五米の長さを有つ滑走臺が突出せしめられてゐる。これがカタパルトの用を成すのであつて、巡洋艦のそれと、ほゞ同樣の外觀を呈してゐる。

ア・トマジイ[2]のいふ通り、本艦の出現に依つて「潜水艦の軍事的價値を增進せしめる點において多大の利益を與へ得るものである」ことは疑ひを容れないのである。しかしながら本艦の新裝備が、如何なる程度において軍事的價値を發揮し得るかは、なほ數々の實驗の結果に俟たねばならない。しかるに本艦は、未だその實驗を重ねない內に事故に遭遇し、遂に喪失せしめられたのは惜しむべしである。

イギリスにはM型潜水艦に屬するものが、ほかになほ二隻あつた。即ち〈M.1〉および〈M.3〉號である。M型三艦は、それ〳〵水上において一、四五〇噸を有し、一九一七年の進水である。一號には海岸砲撃のために三〇五粍の加農砲を保有する砲塔が裝備せられ、こゝに潜水艦と砲煩との結合が試みられたが、その使用が困難である上、ロンドン條約の制限[3]もあり、遂に廢止せられてしまつた〔三號は機雷沈設艦に改造〕。

〈M1〉號とおなじ目的を達する爲め、もつと徹底的なものは、アメリカ海軍において考案せられた潜水艦に轉形する飛行機であらう。この飛行機は、三一呎の翼長と四一呎の機體、それに時速一〇〇浬を獲得する。翼を取りはづすと、そのまゝ潜水艦となり、エンヂンは推進器の機能を働かすのである。——これは、しかしながらより一層の試驗を要するもので、しかもその後、一向その沙汰を聽かない事を考慮すると、その戰術的價値も未知數であるはいふまでもない。

1) 「アナコスタの海軍航空隊では、アメリカ海軍潜水艦に搭載すべき潜水艦用飛行機ネヴイ・レーニングの飛翔試驗を行つた。これは一一〇馬力の發動機を有し、長さ二米四五の區劃中に納め數分間に處置し得られるのである。この新機具の採用に依つて、アメリカ潜水艦の視達範圍は著しく增大せられるであらう」云々〔Cf. 〈Aviation Maritime〉——La Revue Maritime, No. 142, Oct. 1931〕。

2) 〈Avion et sous-marin,〉 par A. Thomazi Le Yacht, No. Special. Oct. 1931.

3) ロンドン條約において、潜水艦備砲の口徑は一〇三粍に制限せられてゐた。

航空家は、軍艦の巨砲に逆に、照準の正確を維持する爲めに、航空家の助力を必要とするであらう。「武器の連結」といふ古色蒼然たる言葉は、飛行機の發明とそれの伸展とに依つて、實證を把握したとカステツクス[1]はいふてゐる。そして新しい武器である飛行機は、軍事界に於いて獨占的の地位を占めること、舊武器は廢止せられず、新武器の附加物として存續すること、新武器は舊武器と協同してのみ、その效果を發揮することが出來る事等々を明らかにしてゐる。

カステツクスは何事を說いてゐるのであらうか。彼は武器を見本に擬して、自然辯證法を、さながらに布陳してゐるのみである。敢へて武器に限らず、自然に見る如何なる事物か、自然辯證法の規約の外に佇立するものがあり得ようか。たゞ戰爭の道具であるから、從つて優勝劣敗の直接の因子であるから、武器において、特に自然辯證法の、最も端的な作用を認識することが出來るのである。

「連結」若しくは「結合」といふことは、少くとも善良なる部分にして、現代にまで生き伸びてゐる部門の——卽ち未だ止揚し切られない部分々々の、全體的「綜合」を意味するのである。し

かも武器の發達史における辯證法的諸過程は、頗るジグザグした線を素描するかと思へば、必ずしも連續性を示現せず、われ等の視野より薇薇せられてゐるものもある。中世紀以降、火藥の異常な伸展に依つて、古代攻城に使用せられた〈Catapulte〉〔東洋では「弩」に該當する。——四輪戰車上に載せ、分銅に依つて彈丸・石塊ないし箭を射出する〕は、一時淸算せられてゐたのにも拘はらず、現代では「飛行機に、短い滑走距離において、飛翔上、必要とする速力を附與する裝置」[2]〔海軍大尉ジザールの定義〕として、その名稱といふに復活してゐるが如き、その一例である。但し「むかし動きをした分銅は、いまは壓搾空氣、または火藥を使用する器具に、その席をゆづつてゐる。しかし機械の目的とするところは空中に一武器を射出することであるから、今も昔も同一である」。

しかもこの同一の着想を、「航空に使用した最初のカタパルトは、ラングレイ教授の創案にかゝり、一九三〇年、飛行機模型を使用して『ポトマツク』號上で射出試驗を行つた。その後ライト兄弟は、陸上機の離陸を援助する爲めに、分銅式を利用して、古代羅馬の武器を想起せしめた」といふてゐる。——技術の發見は、新しい技術を生育せしめるとゝもに、また古いそれを、新し

い意味において、蘇生せしめるのである。〔いはゆる「創造」なるものは決してあり得ない。但し「創造」と思惟せしめるやうな「結び直し」はある。最も優れた「結び直し」は、天才的構成力の、巨人的「綜合」能力を俟つて營まれるであらう〕。

「綜合」は、おなじ範疇に屬する航空機關同志の間にも營まれる。曩に墜落し、悲劇的終末を見たアメリカ合衆國の硬式飛行船「アクロン」號ついで、同運命に遭遇した「メーコン」號が一編隊の飛行機群を懸垂し、こゝに飛行船と飛行機との結合を現示せるが如きこれである。しかもこの「綜合」作用は、むしろ異種性の諸機構に對して顯著なるものを見る。——卽ち商船・軍艦等の水上單位は勿論、鐵道・自動車等の「諸機械」を初め、地上構築物〔殊に飛行場の夜間照明裝置・ラジオ測候所〕にまで擴充する。更に擴大して直接、造兵工業と關係を繫がない「各種の重工業・輕工業諸部門を內包し、こゝに渾焉たる一、しかしながら嚴密に科學的な「海防」の理念が組成せられるのである。强化せられたる海防型態とは何か。それは、あらゆる重工業および輕工業の諸部門を牽聯する、多角形的結合型態のほかの何物でもないであらう。しかも「航空」は、恰も車輪の軸のやうに、あらゆる資料をそれ自らに「綜合」し、こゝに多角形結合型態[3]を示現せしめる根源因子である！

1) カステックス「將來の戰爭に對する飛行機の效果に就て」と題する稿論參照。U. S. A. Naval Institut Proceeding, Jan. 1925 所載。

2) Cf. 〈La catapulte pour le lancement des hydravions〉—— La Revue Maritime. No. 1932. なほカタパルト發射の際、操縱士に如何なる生理學的作用を惹起するかに就き、イタリイの軍醫少佐セザレ・タレンチに依つて各種の實驗が行はれた。一九二五年、多數の操縱士に對して行はれた澤山の實驗の結果、次の事柄が決定せられた。卽ちA、カタパルトに依る射出は人體機關に有害なる變化は「感動的」のものである。C、精神方面には何等の變化なき事等々。——但し射出後、身體に疲勞を覺えることはあるらしい。これを無くする事は目下フランスにおいて繼續的に研究中である。これ等が成功を告げた後は、今日のところ、軍用機ないし郵便機に限られてゐるけれども、すゝんでカタパルトに依つて旅客機をも射出する事が、考慮せられるに至るであらう。

3) 航空を契機とする資材の、多角形的結合型態は、時間的〔同時的〕に、また空間的〔地理的〕に、それの擴充性を示現する事は、本文において觸れておいた。但し本文は、主として技術的方面に、

論述の例證を求めたけれども、結合の支索は延伸して非技術的な、政治・文化・經濟および藝術を總括する上部各構造にまでも推及し、こゝに國民全體性の理念となつて開示せられて來るのである現に軍部限りの陸海軍でなく、國民の陸海軍であるとか、國防は國民全體の關心事であるとか、ないしは「戰爭は國民能力の秤量である」「フオレス・トシーヤマン」とかいふ諸觀念は、全く科學の伸展に依つて諸技術の連結が問題とせられ、組織は擴大して、海防の多角形的結合型態が認識せられた後に、はじめて誕生した新提唱である。行政上の言葉を以つて表現すると、「統制」ないし「管制」に該當するものであつて、ともに强化せられた國民意志の支持を端的に必要とするものである

■

こゝで、われ等の注意せねばならない重要な事項が殘されてゐる。卽ちこゝで「綜合」といふのは、決して「統一」のことではないといふ認識がこれである。若しそれが「統一」であるならば、どうして多角形的結合型態なるものゝ示現が考察し得られようか。多角形的結合型態の示現をして心ゆくばかり奔放ならしめんには、必ずや空軍・海軍それ〴〵獨自の機能を喪失せしめられることなく、水も洩さぬ愼密な關聯を持續しつゝ、共通の目的に向つて「綜合」せられねばならぬ。斷じて「統一」であつてはならないのである。

巨大な搭載量と遠大な航續性とを具備し、水上・地上の支持を必要としない「自律航空」は、少くとも現段階にありては、未だユートピイの領域を蟬脫しないものゝやうに觀察し得られる。それだのにも拘はらず、イギリスに劣らない植民國であつて、しかも海軍力の劣勢であつた佛蘭西は、どうしても「自律航空」を可及的早期において現實化し、これに依つて市場および植民地の管掌と商船護送の役割とを果さなければならない。アンリ・ベルネイが、佛國の航空プログラムを考察して、「一九三二年十一月二十七日の法令に依つて創設すべき第一の海上航空隊は、自律航空隊であらねばならない」といひ、またつは、近代艦隊を指示する照明であるところの大航續力—重水上飛行機の有效な機型を處置することである」といふてゐる。

これはV・バルジョウの、有名な論文における第二結論「海上の制空權は、陸岸を離れて以來水面の艦船——卽ち海面の制海權と連絡して存在する[1]」といへるを爆破して、その第三結論「外洋における自律航空は、海軍に特別の任務を附與するものである[2]」といへるを特に强調するもの

であつて、近代艦隊を指示する照明の役割を超越し、「自律航空」には依然として、それ獨自の存在價値が附與せられてゐるのである「――これは佛蘭西セオリイであると同時に、ドウエその人に依つて代表せられた伊太利セオリイでもある」。これにアメリカ人L・D・ウェップが「空軍單獨で海上における通商要路をコントロールする事は果して可能であり得ようか」と疑ひ、「飛行機の行動範圍は、飛行機そのものゝ行動半徑に依つて局限せられるものではない。たゞそれを搭載する艦船の航行範圍に依つてのみ制限せられてゐる」[3]といふたアメリカないしイギリス・セオリイが對峙せしめられてあらう。この對峙は、そのまゝ想念的なラテン思想と實踐的なアングロサキソン・セオリイとのそれに解釋し直される。――更にサア・ハーバート・ラツセルが「イギリス國民にして空路に依り、生活必需品を受けてゐない限り、われ等は船舶に、それの運輸を信賴せねばならないであらう」[4]といふに至り、こゝに民族性の僞らざる發露を見定めることが出來るであらう。「自律航空」論が、よしんば伴奏入りで大陸に聽かれる事があつても、飽くまでも實踐的なイギリス人は、金輪際、巡洋艦五十隻建造の提案を撤回しようとはしないのである！

多かれ少かれ、ユートピイを含む「自律航空」は、未だ實踐の彼岸に佇立してゐるものゝやうである。水上勢力の缺陷を塡充すべく、水上諸單位の支持を必要としない「自律航空」は、不安な何物かゞ、そこに清算せられないがまゝに保存せられてゐることを看過してはならない。勿論「自律航空」は、現代の航空諸伸展が志向する――、そして絶えずその幾分かを實現しつゝある――最後の目標であることにおいて疑ふべき何物もあり得ないのである。航空が、しかしながら得て遺憾なく、「自律」〔autonom〕の全部を確把した曉においても、依然として問題は殘存してゐよう。なんとなれば航空機關は、水上諸單位に代用することの出來ない別箇の課題を有してゐるからである。たとへば「主力艦『ネルソン』の建造費を以つて、最新・最強の飛行機一千臺を製作することが可能であり、かうした飛行機大集團に對し、主力艦は抵抗することが出來ない」[5]といふやうな提論は、いはゆるヂアーナリズム理論にしか過ぎない。〔――飛行船五十隻もあつたら日本を二日間を蔽き潰すことが出來る、と放言したミツチエル將軍に至りては、無下に低級な黃色ヂアーナリストの典型であつて、おなじ範疇に屬するわが國のヂアーナリズム軍事評論家も顏負の體爲。ともに小供雜誌の記事にしか値せず、その專門的價値は雰である！〕。

1) Cf. 〉La Programme de L'aéronautique Navale,〈 Le Yacht, No. 2668 12/Mai 1934.
2) Lieut. de Vaiss Barjot, 〈 Reflexions sur la guerre aéro-navale.〈 La Revue Maritime. Avril/1934.
3) Vgl. 〈Flotte und Luftwaffe 〈〔drei Aufsätze——L. D. Webb., Sir Herbert Russel., J. E. T. Harper〕 Deutsche Luftwacht. Bd. 1. Nr. 5. S. 163., S. 170.
4) Ibid. Sir Herbert Russel. S. 170.
5) 『ディヲイ・スィル誌』——Loc. cit S. 169.

「空軍對海軍」〔Luftmacht *gegen* Seemacht〕の問題は、すでに問題としての可能性が薄くわれ等は須らく、〉gegen〈の接續詞を、〉und〈に變更すべきことを、こゝに提論しなければならない。「空軍と海軍」とはふたつながら、われ等にとつて必要な機能であつて、相互に劣れる、また勝れる何物もなく、兩機能は牽聯して、われ等の安全感を保證するのである〔J・E・T・ハーパア〕。われ等は、それだからして「わが艦船の任務は、飛行機に依つて實行せられるであらう」というラテン的構思を清算し、たとくば「『ネルソン』號は、專ら飛行機大集團が企て及ばない別箇の仕事を達成することに、それ本來の目的を有してゐる」とか、「空軍において決して海軍力を無視することが出來ない。空軍は、海上における海軍力の補助機能として多大の價値を有してゐるけれども、決して第一人者ではあり得ないのである」[1]〔H・ラッセル〕とかの諸構思を正認しなければならない。

論理學上、航空機關と水上諸單位との關係において、「Aか、然らずばB」〔entweder oder〕の構思を排斥し、「AとゝもにBもまた」〔sowohl als auch〕のそれを正認したわれ等は、すんで航空機關に示現せられた「空間」「時間」の哲學的意義を尋究しなければならぬ。このかゞやける提論としては、將軍アルマンゴウの下のやうな言葉を引證することが出來るであらう。即ち「空軍は確實に、陸軍および海軍の存在なくしては考へられないものである。しかしながら空軍は、三軍の內で最も良く、技術の革命的伸展と、戰爭に對する發展手段の迅速性とを利用してゐるのである。空軍は、二個の主要なる點において挺出せるものがある。即ちその一は『空間』である。——近代世界を不安ならしめてゐる紛爭の擴大性を考慮する時、『空間』問題の如何に重大なものであるかゞ知り得られてあらう……」と。將軍は、專ら戰爭理論として叙述してゐる

のであるけれども、「空間」理念を經濟哲學的に解釋し、「市場」概念と結び付けることに依つてこゝに平和理論として考察し直されよう。それと本國中樞部とを連絡する航空機關の、特に課題とするものは「『時間』である。――「時間は『驚異』を保證する……」とアルマンゴウ將軍はいふ。そして「戰爭行爲が營まれる度毎に、ます〳〵世人は『驚異』を以つて、成果の確實な抵當であると考察する[2]」のである。これは、しかしながら戰爭行爲に限つたことではない。平和行爲においても尙更しかりであつて、現に交通手段の「革新は、すくなからぬ驚異である」(!)。

これはゼオルジュ・ムーリイが曩頃、『マンチエスタア・ガーデイアン』誌に掲載せられた「甚だ穩かならざる步度の一記事」――卽ち七十噸の砲座を構成し、時速一三二哩を以つて航行する「飛ぶ船」(bateau volant)が、ブルウョークシアで進水せしめられた事實に對して、發せざるを得なかつた咏嘆なのである。しかもかうした「飛ぶ船[3]」の巨大な搭載量を、そのまゝ平和的に善用することに依り、「嘴にオリーヴの小枝を啣へた白鳩」が象徵する平和に接觸する營みも必ずしも不可能とは思惟せられないのである。

〔nemo repente fit turpissimus.――「何もかも、こぞつて惡いといふ物はない」。〕

1) Loc. cit. S. 169.

3) Vgl. >Die Leitgedanken der Organisation des Luftheeres.< von General Armengaud. Revue Militaire Française, Nr. 148 vom November 1933. Deutsche Luftwacnt Bd. 1, Nr. 5.

3) Cf. >Bateau Volant <――Le Yacht No. 2640. 28/Oct. 1933.

戰爭と悲劇

——防空運動の社會科學的研究——

I　如何にして防空は社會科學の一項目たり得るか

去る四月十三日、宮城を中心として實施せられた「警備防空演習」は、市民の白熱的眞摯もて滯りなく終了したことは、われ等の快心事とするところである。東も西も共におなじく戰時下にあり、巨人的困難は、東洋にも歐洲にも、ひとしく横へられてゐるのである。これを克服しようがためには、あらゆる階級層を縱に連ね、すべての職業層を横に結び、いはゆる「國家總動員」の態勢を以つて當らねばならない。この意識が社會の隅々にまでも滲潤し、こゝに今同の防空訓練の、かゞやける成果となつて具現したのである。

右は主として、今回の防空訓練に見られたる形而上的なもの〔モーラル〕について觀察した結果なのである。いま一度、これを形而下的のものについて觀察すると、こゝに考慮せねばならない事項が幾多殘されてゐるものゝやうである。殊に大東亞戰爭直前、歐洲方面より歸朝せる人々——殊にワルシャウにおいて、獨逸軍の空襲下にありて爆彈の洗禮を受けた人々——は、異口同音に、防空避難室・防毒施設の不備を鳴らしてゐるのを聽く。さりながらこれ等の形而下的のものは、畢竟それの上部機構たる形而上的のものゝ一屬性であることを忘れてはならぬ。形而上的のもの〔モーラル〕にして完璧なるを得れば、これ等の形而下的のものは、さながら砂漠に泉が湧き出づるやうに、自ら整備せられて來るのである。それとは逆に、形而下的のものそれ自體の完備を見ても、形而上的のものにして全からずは、こゝに施設の浪費を招來し、技術の退步が結果せられるのである。われ等はこゝで「形而上的のものは、形而下的のものゝステレオ版に過ぎず」とするマテリアリストの見解を蔑如しよう。——マテリアリストの社會機構は所詮カルタの塔にしか過ぎず、少くとも防空の觀點から見て限りなき脆弱性が露呈せられてゐるのである。

防空のことに拘はる限り、われ等は何故に形而上的のものを、特に強調するのであるか。それは、敵がわれ等にしかける「空襲」の目的は、爆彈そのものゝ擅にする破壞的所作よりも、かう

した破壊的所作が結果するところの、型態なき「恐怖の働き」〔Terrorwirkung〕をわが社會機構の深層に徹せしめ、わが社會機構の全體を被ひ、これを震撼して鬪志を挫折せしめることにあるが故に外ならぬ。〔アルマンゴウ將軍の言葉〕[1]。また一方、心的・物的諸工作を以て、階級層と職業層を連結し、敵爆彈の破壊的所作が結果する「恐怖の働き」を、その可及的小範圍に喰ひ止めることに、防空の目的が見定められてある。それだからして「防空」は、社會的であるといひ得られるのである。

空襲は、古典的の方法を選擇しないであらう。空襲は、少くとも「不作法な攻撃」〔brüsken Attacken〕であることに終始する。——「不作法な攻撃」であるからして、「不作法な防空」を以て對處し得ると考へてはならぬ。「防空」は少くとも科學的であることの切迫的の必要が、機會ある度毎に、しみ〴〵と痛感せられてゐる筈であらう。それが故に、防空は社會科學の一項目として物語られることの、可能性が認められて然るべきであらう。

1) Deutsche Luftwehr. Bd. 1, Nr. 5, S. 154-160. 〔Revue Militaire Française Nr. 148 vom November 1935〕

Ⅱ　如何にして空襲第一線は防空第一線と相呼應するか

「敵の機先を制し、繼續的に敵の志氣を沮喪せしめるやうな動作は」——と、將軍マルマンゴウは說きかける——「軍事行動の伸展につれて、强い影響を惹起するに至るであらう。空襲第一線は防空第一線と、時間的に相呼應する」と。卽ち拱手して敵の空襲を俟つにあらず、「反撃に次ぐ反撃を以て敵の攻撃を撥ねかへす」にもあらず、彼方からの攻撃が未だ開始せられざるに、ドウーエ將軍のいはゆる「爆撃機の怒濤」を此方から投げかけるのである。卽ち「空襲」を「空襲」によつて反撃し、敵のドウエテイズムを、いやはるか强力なわがドウエテイズムをもつて相殺し去り、拔本塞源的に、敵の空襲源を掃蕩し去るのである。——おそらく空軍活動としては最も劇的な、そして壯烈なクライマックスに達したものであり、防空第一線が、同時に空襲第一線となつて展開せられ、こゝに「最高の防禦は攻撃にある」[2]といふ古めかしいモルトケ理論の、さながら